

神戸市看護大学

いちかんダイバーシティ看護開発センター

ICHIKAN NURSING DEVELOPMENT CENTER FOR DIVERSITY

2022 年度 実績報告書



刊行に際して

神戸市看護大学学長
いちかんダイバーシティ看護開発センター長

南 裕子

神戸市看護大学は、新型コロナウイルス感染拡大が始まった 2020 年 4 月から『いちかんダイバーシティ看護開発センター（以後、本センター）』の開設準備をはじめ、2021 年 4 月に開設いたしました。パンデミック型の感染拡大に伴い大学は教育や研究のあり様を急激に変更することを余儀なくされているさなかのことでした。一方、神戸市は感染拡大の大きな波に襲われていましたから、看護大学として地元の諸課題に何ができるか、どのような組織づくりがあれば良いのかなど議論を重ねてまいりました。この度の感染症が本センターの方向性を導いたともいえます。

本センターは、年齢、性別、人種、国籍、宗教、価値観、ライフスタイルなどが異なる人々が共に生きる地域社会の中で、一人ひとりの生存、生活、尊厳を尊重し、個人と、個人が集まってつくるコミュニティのもつ、豊かな可能性を実現することを目指しています。目標としては、①地域課題の解決や健康創造都市戦略等を担う学術研究の推進、②市民との連携・交流による地域の保健医療への貢献、そして③国際都市神戸にある大学として、学生の異文化理解の推進と海外の大学との交流の推進を掲げています。

この理念の背景には、SDGs や日本学術会議で提案された地元創成看護学の方針を実装することにも繋がります。多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組み、その成果が市民に還元され、生活の質の向上に少しでも寄与することになればと願っています。

本センターでは、地域連携、生涯教育、国際交流、及び産官学連携、防災・減災支援を 5 つの柱として、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して地域の健康課題の解決に取り組み、その成果が市民に還元され、生活の質の向上に少しでも寄与することになればと願っています。

これらの活動は神戸市民の皆様はもとより、専門職、自治体、関係機関（職能団体や民間企業）と共に行ってまいります。コミュニティとの協働を通じ、新たな知見を得て、ローカルに働きかけた経験を蓄積します。そして、この知見をグローバルに展開し、国際的な人・文化交流ネットワークの拠点を構築してまいります。

2022 年度は、8 グループ（地域連携、健康支援、在宅ケア支援、国際交流、保健師キャリア支援センター、地域保健支援、臨床看護連携、および災害看護）の継続的かつ斬新な活動に加えて、ウクライナ支援、ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材育成事業（DX）、リカレント教育運営委員会プロジェクトの 3 チームが加わりました。各グ

グループ／チームは各々の専門性を生かしながら、地域住民をはじめさまざまな人々の健康支援を通して、地域への貢献や専門職の支援を行っています。また、その成果を研究として発表できるよう活動を続けています。

今回刊行しました「神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター2022年度実績報告書」は、各グループ／チームにおける事業の成果をまとめたものです。2019年から3年あまりにわたって私達の生活に脅威をもたらしてきた新型コロナウイルス感染症も、ようやく落ち着きの様相を呈しております。少しずつ元の生活に戻りつつある現在、本センターでは、コロナパンデミックに対して行った活動の総括をしながら、変化する地域社会のニーズや課題に対して、学内外の方々との協働のもとに、活発な活動を続けて参りたいと思っています。

2023年度から学長とセンター長が交替します。まだまだよちよち歩きの段階ですが、皆様の忌憚のないご意見、ご指導をいただけますようお願い申し上げます。

目 次

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要	2
------------------------	---

グループの活動

I	地域連携グループ	7
II	健康支援グループ	32
III	在宅ケア支援グループ	47
IV	国際交流グループ	72
V	保健師キャリア支援センターグループ	75
VI	地域保健支援グループ	82
VII	臨床看護連携グループ	86
VIII	災害看護グループ	88
IX	ウクライナ支援プロジェクトチーム	91
X	ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる 医療人材育成事業（DX）プロジェクトチーム	94
X I	リカレント教育運営プロジェクトチーム	100

業績一覧	103
------	-----

センターの組織	106
---------	-----



いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

1. 本センター設置の趣旨

我が国では、人口減少、少子高齢化が進行中であり、2040 年に高齢者人口がピークを迎える。2040 年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現を目指して、住民の「健康寿命の延伸」と「多様な就労・社会参加」とともに、「医療・福祉サービスの改革による生産性の向上」への取り組みが必要とされている。本センターは、このように多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組み、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与することをめざして設立した。

2. 沿革

神戸市看護大学は、阪神淡路大震災発災後 1 年後の 1996 年に開学し、兵庫県及び神戸市の復旧・復興とともに歩んできた歴史を持つ。2006 年度の文部科学省現代 GP の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に始まり、現在に至るまで地域に根ざした教育・研究・地域連携活動を行ってきた。

2009 年度に、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」が開設された。2012 年度には、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を全学的に展開した。さらに、2013 年度には、文部科学省の拠点事業である地（知）の拠点整備事業（Center of Community:以下 COC 事業）で、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」に取り組み、2014 年度に、地域連携教育・研究センターが開設され、西区を中心に地域貢献活動を継続し、地域住民との交流、健康増進活動等を行ってきた。

これまでの取り組みを発展させ、2021 年 4 月にいちかんダイバーシティ看護開発センターが開設された。尚、これまでの地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行う。

2006 年～	文部科学省の現代 GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の助成を受けた事業の実施（～2008 年度）
2009 年	健康支援地域連携センターの開設
2012 年	健康支援地域連携センターが、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を展開
2013 年	COC 事業における「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」への取り組み（～2017 年度）
2014 年	地域連携教育・研究センターの開設
2021 年	いちかんダイバーシティ看護開発センターの開設

3. 理念

本センターは、年齢、性別、人種、国籍、宗教、価値観、ライフスタイルなどが異なる人々が共に生きる地域社会の中で、一人ひとりの生存、生活、尊厳を尊重し、個人と、個人が集まってつくるコミュニティの持つ豊かな可能性を実現することを目指す。そして、センターおよび本学では、日本学術会議で提案されている地元創成看護学の実装を目指している。センターでは、地域連携、生涯教育、国際交流、及び産官学連携、防災・減災支援を 5 つの柱として、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組む（図 1. センター概念図）。そして、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与する。さらに、地元住民に加え、専門職、自治体、関係機関（職能団体や民間企業）と共にこれらの分野の課題解決に取り組む。コミュニティとの協働を通じ、新たな知見を得て、ローカルに働きかけた経験を蓄積する。そして、この知見をグローバルに展開し、国際的な人・文化交流ネットワークの拠点を構築する。



図 1 いちかんダイバーシティ看護開発センターの概念図

4. 目標

本センターでは、神戸市を中心としながら、兵庫県下の様々な地域を地元ととらえ、公立大学法人として、教育研究活動の成果を地域社会に還元することを目標とする。

(1) 地域課題の解決や健康創造都市戦略等を担う学術研究の推進

神戸市と地域の抱える保健・医療・福祉分野の様々な政策課題に対して、産官学連携の強化を図り、課題解決に資する研究に取り組む。そして、国内外に向けて研究成果を発信し、各分野の学術的発展に貢献するとともに、政策提言等により、健康寿命の延伸、健康格差の縮小を目指す健康創造都市戦略の一翼を担い、保健・医療・福祉施策の充実に寄与する。

(2) 市民との連携・交流による地域の保健医療への貢献

地域と連携した教育研究活動として、企業、市民、市内の大学、神戸市民病院群をはじめとする医療機関、福祉施設等と連携した教育研究活動、地域貢献活動を推進するとともに、その成果を積極的に市民へ還元する。そして、市民に信頼され、貢献できる大学として、公開講座等の実施、大学施設の開放等を行うことにより、市民の生涯学習に寄与し、市民との交流を促進する。さらに、地域の看護人材の供給のために、看護職者の就業継続支援や復職支援、新たな学びのニーズに対応したリカレント教育を充実させ、看護職者の生涯学習の拠点としての役割を果たす。

(3) 国際都市神戸にある大学として、学生の異文化理解の推進と海外の大学との交流の推進

多様な価値観や文化的背景、生活習慣等に配慮できる国際的な感覚を有した人材育成を行うことを目指す。異文化への理解やグローバルな視点と感覚を培うため、海外研修による異文化体験や地域で暮らす在日外国人との交流、外国の大学との国際交流を推進する。さらに、グローバルな視点を培う国際交流の推進のため、海外からの留学生の受入れを推進するとともに、国際化が進む保健・医療・福祉分野において、医療介護分野等で働く外国人のキャリア開発を支援する。

5. 組織図

いちかんダイバーシティ看護開発センターは、センター長及び副センター長のもと、地域連携、生涯教育、国際交流、産官学連携、防災・減災支援という大きな5つの柱を掲げ、8つのグループ事業を展開する。グループは、地域連携、健康支援、在宅ケア支援、国際交流、保健師キャリア支援センター、地域保健支援、臨床看護連携、災害看護から成る。各グループの活動はプロジェクト型とし、各グループにリーダーを配置して、本学教員が自発的に参画し、全学協働で行っている。また、グループの他に、神戸・兵庫訪問看護ステーションこころの支援、ウクライナ支援、ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材育成事業(DX)、リカレント教育運営については、プロジェクトチームとして活動を行っている。

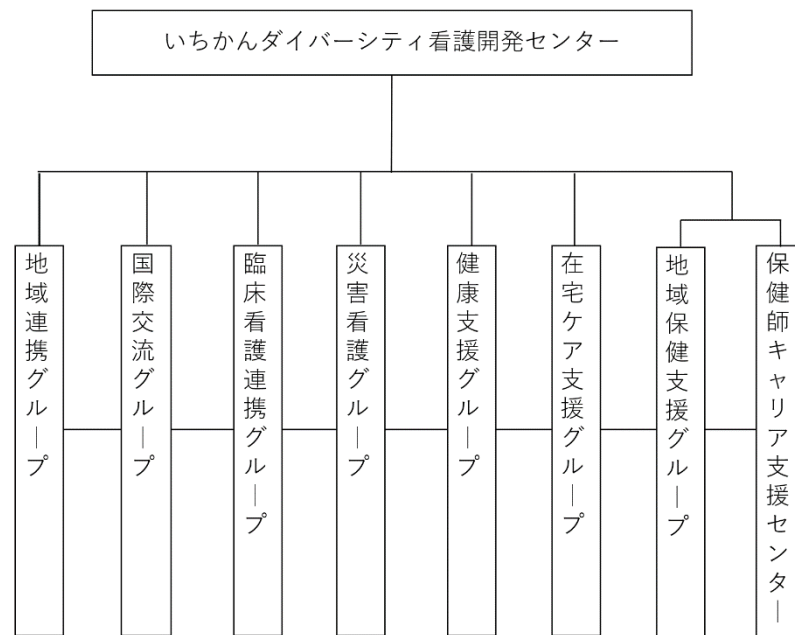


図 2 いちかんダイバーシティ看護開発センターの組織図



グループの活動

I 地域連携グループ

1. グループ概要

神戸市看護大学は、2006 年に文部科学省現代 GP の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に採択された後、2009 年に「神戸市看護大学健康支援助地域連携センター」を開設し、2012 年には国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」へ、2014 年には「地域連携教育・研究センター」へと、名称の変更とその活動を発展させながら、地域住民との交流や健康増進活動等の教育・研究・地域貢献活動を継続して行ってきた。2021 年 4 月にこれまでの本学の取り組みをさらに発展させるために「いichかんダイバーシティ看護開発センター」が開設されたことに伴い、これまで行ってきた地域連携・教育研究センターの活動は、いichかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行うこととなり、2022 年度は 2 年目である。

2. グループメンバー

リーダー 片倉直子

メンバー 丸尾智実、片山修、水川真理子
富田春奈（2022 年 8 月末まで）、勝田玲子（2023 年 1 月から）

3. 地域連携活動

（1）コラボカフェ

いichかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子

1) 概要

本事業は、大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として運営されている。現在、本学を含め神戸市内の 9 大学が本事業に参画している。本学は、2012 年にコラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、Collaboration の略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

2) 目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

3) 実施事業

- a)子育て親子への場の提供と交流の促進
- b)子育て等に関する相談、援助等
- c)地域の子育て関連情報の提供
- d)子育て及び子育て支援に関する講習
- e)コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

4) 運営方法

対象：生後 2 か月かつ、首がしっかりすわってから 3 歳児までの未就園児と、その保護者
開催日時：毎週 火・木・金 9 時 45 分～12 時 15 分、13 時～15 時 30 分（予約制）
2020 年より新型コロナウイルスの感染拡大防止のために予約制とし、感染状況に応じた利用人数の制限を行い、感染予防策を講じて来所型のコラボカフェを開催している。
スタッフ：保育士 3 名が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。

5) 実績（利用状況）

2022 年 1 月から 12 月末までのコラボカフェの開催日数は 129 日、年間の延べ利用者数は、保護者が 454 名、子どもが 494 名であった（表 1）。このうち新規登録者は 160 組であった。1 日平均利用者数は、保護者が 3.5 人、子どもが 3.8 人と、2022 年も新型コロナウイルス感染症拡大の影響で利用者の人数制限を行った。経年別にみるとコロナ禍の利用者数は減少傾向である（図 1）。冷房の故障により新設作業のため 7 月 8 日～8 月 30 日までは扇風機や換気で暑さ対策を行った。そのことを了承くださった方にご利用いただいたため、当該期間の利用者数に影響がみられた。新規登録者を経年別でみると、コロナ禍前よりは減少しているが、コロナ禍の前年と同数であった。（図 2）。一日あたりの平均利用者数は 7.3 名であった。保護者から保育士への相談は随時受け付けており、2021 年は 10 件の相談があった。保育園や幼稚園入園に対する不安、子どもの友達との関わり方、スプーンやフォークの持たせ方、赤ちゃんがえり、睡眠について母親から保育士に質問があり、保育士が都度相談に応じている。

学生の延べ参加者数は 6 名であった。大学院生が授業や研究で利用している。新生児乳幼児援助の授業では、乳幼児の発育発達の観察や、乳幼児を育児する親の思いを理解するために、コラボカフェ利用者に一人 30 分程度話を聞いて助産師の役割について学び、母子との交流を深めていた。

表 1 月別の延べ利用者数(人) (2021 年 1 月～2021 年 12 月)

	保護者	子ども	新規登録	学生
2022 年 1 月	41	41	10	0
2 月	39	39	3	0
3 月	56	56	12	0
4 月	34	35	10	0
5 月	29	31	12	0
6 月	58	59	17	0
7 月	24	26	6	3
8 月	21	20	1	0
9 月	43	41	5	0
10 月	58	60	15	3
11 月	43	44	8	0
12 月	37	42	6	0
2022 年 計	454	494	160	6

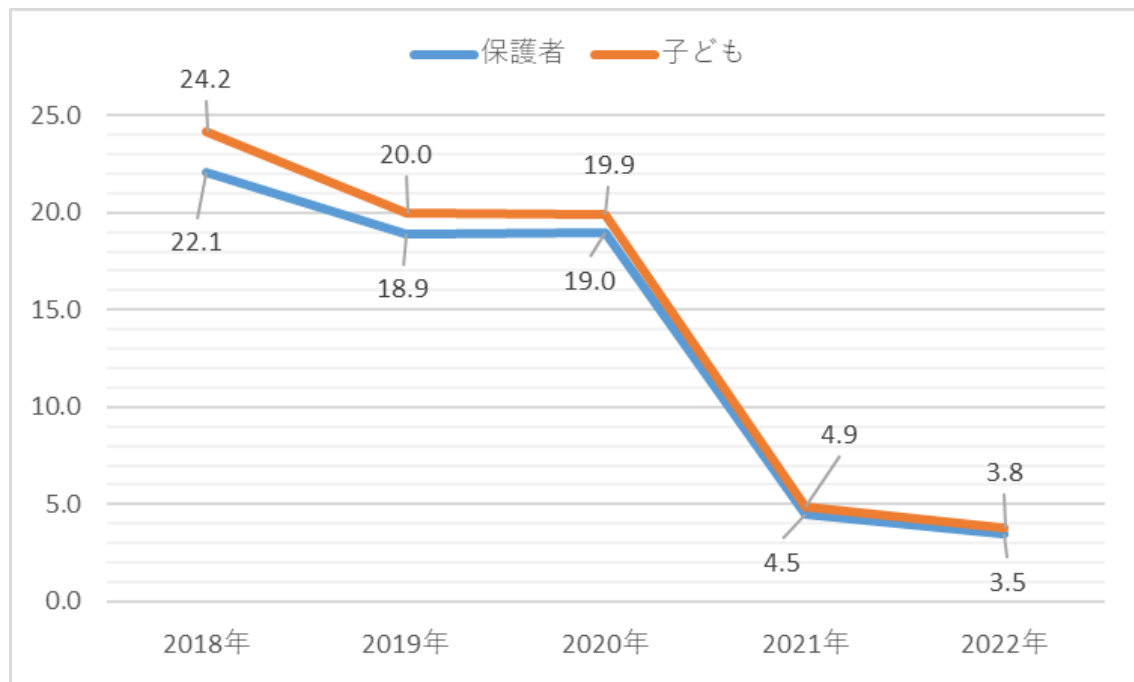


図 1 一日あたりの平均利用者数の推移 (2018～2022 年)

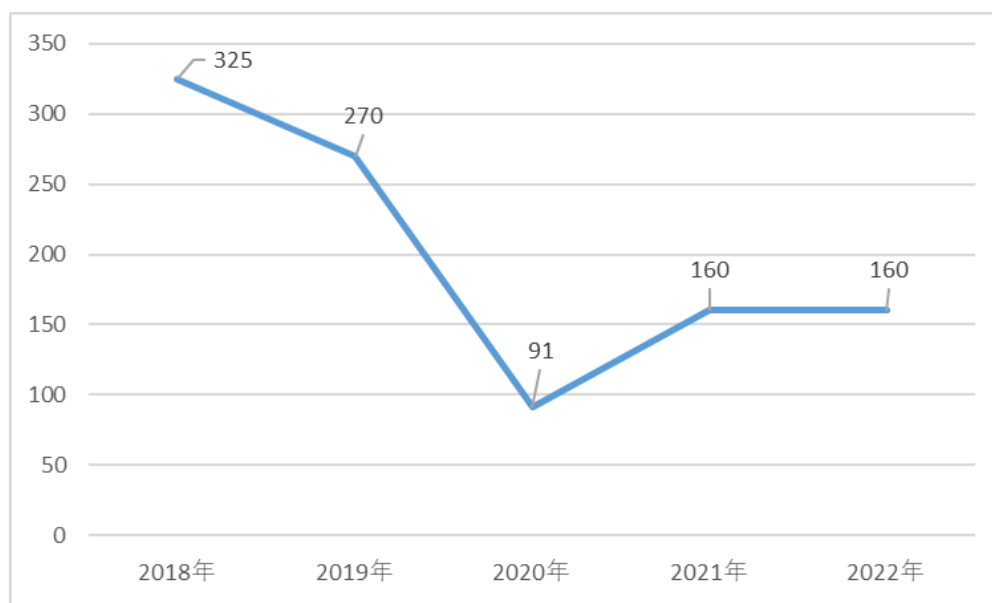


図 2 新規登録者数の推移(2018～2022 年)

6) 教員と保育士が企画・運営したプログラム

2022 年度は、来所型イベントを 5 回、オンラインイベントを 1 回開催した。

「子どもの靴選び」

6 月 1 日に感染予防対策を講じて完全予約制とし、一度に会場に入室する人数を制限して「靴の選び方」の来所型イベントをコラボカフェで開催した。椎野啓三講師（足と靴のプラウド：代表取締役・店長）からの講義後、全員の子どもの足の長さや幅を計測して、実際に履いている子ども靴をみながら、買い替え時期や選び方についてアドバイスを行った。参加者は 14 組 28 名であった。参加者より、「靴を購入するにあたり基準が分からなかったのもとても参考になった」「大きめと思っていた靴が小さめだと言われて驚いた」という感想がきかれた。

「母乳と卒乳、離乳食の話」

7 月 27 日に「母乳と卒乳、離乳食の話」についてオンラインでのライブ配信と、録画のオンデマンド配信で開催し 11 名が参加した。産業医科大学の広域・発達看護学講座教員の井上ちはる先生が講義に続いて、事前に頂いた質問に回答した。「子どもが自然と卒乳するまで、授乳を続けたいと思った」「離乳食量の増やし方をどのようにするか悩んでいたのですが、徐々に増やしたいと思ったら思った。」という感想をいただき満足度の高い会となった。

「子どもの心の発達～子どもの認知機能の発達について～」

9 月 15 日に体育館でのイベントとして企画し、保護者が講義を聴いている間に保育士が子どもの遊びを見守る体制をとって開催した。かささぎ心理相談室・本学非常勤講師の山

口修一朗先生が講義を行った。14 組 26 名が参加され、「自分の子どもがどういう時期でどのように対応すべきかが理解できた」「安心があるからこそ外にいけるということや、ひまわりなのにバラを咲かせようとするなど、わかっていても忘れがちだったりついつい押しつけたりしそうになることなど、改めて気づきがあり参考になった」などの感想をいただいた。体育館での開催について、「広いスペースで子どもを見てもらえるのでとても助かる」と好評だった。

「子育てについて」

9 月 28 日に体育館において、「子育てについて」のイベントを開催し、9 組 17 名が参加された。臨床心理士・公認心理師の田渕富美先生が講義に続いて、参加者からの質問（兄や姉にあたる子どもとの関わり方、子どもの好き嫌いと遊び食べについて）などに回答した。

「今悩んでいることに対して、的確なアドバイスをいただけた」「どんな悩みもいつか解決すると聞いて、あまり思い詰めないように心がけたい」などの感想をいただいた。また、今後ご自身の生活の中に取り入れたいこととして、「困った際に相談する」「子どもは大人のことをよく見ている。言い聞かせるのではなく、まねしてもらえるようにする」「他人と比べてしまう気持ちを受け入れる」「兄弟げんかの対応」「悩みすぎない」などが挙げられ、研修が生活に活かされることが分かった。

「食育セミナー」

10 月 19 日に体育館で「食育セミナー」を開催し 13 組 25 名が参加した。管理栄養士の高松沙緒里講師からの離乳食や幼児期の食事についての講義に続いて、おやつとり方や偏食などについての参加者からの質問に回答された。「同じような悩みをもつお母さん達が多く、質問内容も実感できることが多かったので、聞きたいことがたくさん聞けてよかった」「収穫があった。帰ってからチャレンジしようと思えて参加してよかった」などの感想をいただいた。また、今後ご自身の生活の中に取り入れたいこととして、「おやつのあげ方や好き嫌いがあるときの考え方」「食事が長くなるときの対処方法」などが挙げられた。開催後のアンケートでは、参加者全員が満足できたと回答され、「食は 1 日 3 回で毎日本当に疲れるが、日々の具体的ななかかわり方を学べた」と好評を頂いた催しとなった。

「お口の健康づくり」

11 月 22 日に体育館で「お口の健康づくり」イベントを開催し 8 組 16 名が参加した。歯科衛生士の友弘公子講師から、歯の健康を守る上で乳幼児期が重要であることや、むし歯を減らすためのポイントなどの講義後に、歯ブラシの選び方、歯磨きの時間帯、実際の磨き方などについて、模型を使ってわかりやすくデモンストレーションをしていただいた。参加者からは、歯磨きをいやがる場合の対応や、母乳を飲ませた後の歯磨きの必要性などについて質問があり、安心して対応できるように回答がなされた。集団教室後に希望者には個別の相談にも応じる時間を設け、それぞれの悩みへの対処法をお伝えする会となった。



7) 保育士が企画・運営したプログラムについて

毎週木曜日にふれあい遊びとして、手遊び、絵本の読みきかせ、紙芝居、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなどを保育士が実施している。その他に、来所型の季節のイベントとして、7月6日と7日に七夕、7～8月の火・木の午前中に水遊びを行った。12月21日には、クリスマス会、3月1日にはひなまつりを開催した。保育士によるイベントは親子から人気が高く、予約受付の開始間もなく予約の枠が埋まる状況である。



8) 異文化交流と健康を考えるつどい

ウクライナから神戸市に避難してきた方々が安心して暮らせるよう、異文化交流と健康を考えるつどいを、いichかんダイバーシティ看護開発センターと共催で9月24日と11月23日に開催した。各回の子どもの参加は2～3名で、ウクライナ語の資料を準備して手作りおもちゃを作成したり、子ども同士の遊びを見守った。

9) 評価

昨年度に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響により感染予防で利用人数の制限を行っているため、利用人数は前年から横ばいで経過した。イベントの人気は高く予約開始とともに申し込みの連絡があり、親子が楽しみに参加されている。コラボカフェ来所時に、家族との関係や子育てについて、保育士との会話の中で相談がみられている。

10) 今後の課題

来年度は、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが 5 類に移行する予定であり、受け入れ体制などの運営方法を変更していくことになる。感染予防策を引き続き講じながら、安全に安心して利用できる子育ての場の提供を継続する。イベントの開催法方法は、コロナ禍で培ったオンラインも継続し、対面会場としては体育館やコラボカフェの利用をイベントの内容や目的に応じて検討する。イベント内容としては、これまでに行っていないテーマを選び、幅広いニーズにそえるように企画する。

(2) まちの保健室

在宅看護学分野 丸尾智実

神戸市看護大学「まちの保健室」は、兵庫県看護協会神戸西部支部の活動として、2005 年 12 月から地域住民を対象に実施している。出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、協力分野の看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的としている。現在は、地域住民一般の方々を対象にした『健康支援』、子育て中の保護者とその子どもを対象に健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する『子育て支援』、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談を行う『こころと身体の看護相談』、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う『もの忘れ看護相談』の 4 拠点で活動している。今年度、兵庫県看護協会のまちの保健室の趣旨に賛同し、神戸西部支部のまちの保健室のボランティアに登録した者は 20 名（大学院生 3 名を含む）であった。以下、表 3 に今年度担当した教員を示す。

表 3 2022 年度まちの保健室担当者一覧

拠点活動	担当教員
健康支援	第 1 回：池田、畑中、後藤、樋口 第 2 回：新澤、花井、岩井、澁谷、林、原口 第 3 回：大瓦、丸尾、宇多 第 4 回：江川、佐藤、石関、川畑、 第 5 回：岩本、山下、遠藤、山田 第 6 回：池田、畑中、後藤、樋口
子育て支援	山本、二宮、清水
こころと身体の看護相談	関口、坂口、船越、山岡
もの忘れ看護相談	秋定、坪井、石橋、蒲谷
まちの保健室運営委員会	丸尾、池田、片山、秋定、石関、坂口、関口、 花井、山田、山本

※ 担当教員はボランティアに登録していない協賛ボランティアを含む

『健康支援』

健康支援は、コロナ禍ではあったが、感染予防対策を図るなど各担当で工夫をしながら予定通りすべての講座を開催することができた。以下、表 4 に今年度の開催状況および概要を記す。また、各活動の概要を以下に報告する。

第 1 回：排尿の諸症状とケア

丸尾郁先生（神戸大学医学部附属病院、皮膚・排泄ケア認定看護師）を招聘し、排尿と尿漏れのメカニズムとセルフケア（尿吸収パッドの適切な利用、骨盤底筋群の紹介と体験、医療機関の受診）についてオンデマンドの講義（60 分）を行ってもらった。その後、排尿にまつわる参加者からの様々な質問に Web の画面を通して回答してもらった。質問では尿失禁を止める方法について、夜間に排尿のため 3 回ほど起きてしまうのでぐっすり眠れた気がしないこと、できるだけ薬剤に頼らずに尿漏れを予防する方法について、介護中の母親が日中も夜間も頻回にトイレに行くが、このまま様子を見て良いか、地元に泌尿器科がないのでどこを受診すればよいか等、切迫性尿失禁に関するもの、夜間の排尿に関するものが多かった。これらの質問に対して、講師より、加齢に伴う蓄尿機能の低下、腎機能低下による尿濃縮能力の低下など加齢に伴う変化は誰しも起こるものであること、症状が気になる場合や生活に支障が大きいときは医療機関を受診したほうがよいこと、骨盤底筋群を強化する体操を毎日続けることで尿漏れ症状の軽減が期待できることなどの回答があった。また、今回は参加者は視聴覚教室で聴講してもらったが、オンデマンドによる講義と双方向の質疑応答はスムーズであった。今回の様子から、開講形式は Web であっても対面同様、効果的であることを実感した。（文責：池田清子）

表 4 2022 度の『健康支援』開催状況

回	日程	テーマ	参加数 (人)	スタッフ数 (人) ※院生・学生含
1	5 月 19 日	排尿の諸症状とケア	24	7
2	6 月 10 日	自分をケアするところのトレーニング ～マインドフルネス入門～	28	6
3	9 月 2 日	訪問看護 Part.6 自宅で療養することとは？	5	3
4	9 月 9 日	冬に起きやすい心臓の病気 ～正しい知識と行動で自分の身体を守ろう～	7	4
5	10 月 28 日	生活体力を測ってみませんか？	34	4
6	2 月 9 日	健康な足をいつまでも ～始めよう足のケアと観察～	17	7
合計			115	31

第 2 回：自分をケアするところのトレーニング～マインドフルネス入門～

2022 年度は、オンラインと対面とのハイブリッドで、講義と演習を実施した。参加者数の内訳は、オンライン 17 名（61%）、対面 11 名（39%）であった。オンラインでの参加者は、西区以外に居住する神戸市民が多く、本学のまちの保健室に初めて参加される方が 90% 以上だった。講師の新澤助教が、マインドフルネスの定義やマインドフルネスな状態について説明した後、参加者に普段は無意識に行っている「食べる」「歩く」「呼吸する」をマインドフルに行うなかで、「今」の自分の身体感覚に注意を向ける体験をしてもらった。実施後のアンケートでは、オンライン参加者が対面参加者と比較して満足度が低い傾向にあったが、全体の 96% が今後の「自分の生活に取り入れられそう」と回答し、「生活がどのように変わるのかも楽しみ」との自由記述がみられた。（文責：花井理紗）

第 3 回：訪問看護 Part. 6 自宅で療養することとは？

本講座では、在宅療養のイメージや在宅療養・訪問看護の実際、人生会議について講義をした後、意見交換を行った。意見交換では、一人暮らしでも最期まで自宅で過ごすためにはどうしたらよいか、かかりつけ医などがいない場合の相談窓口について、地域に認知症の疑わしい人がいる場合の対応方法についてなど、参加者から積極的な質問があった。

アンケート結果では、「とても満足」「まあ満足」で 100% と高い評価を得ることができた。自由記載には、どの話も私の知りたいことにつながっていた、知らないことがたくさん分かったなどの意見や、一人暮らしでも最期まで自宅で過ごすことを希望しながら、老後の不安を取り除きたいという意見がみられた。在宅療養のニーズはあるが不安が大きい方も地域には多いと考えられることから、次年度以降も在宅療養に関する情報提供をしていきたいと考えている。（文責：丸尾智実）

第 4 回：冬に起きやすい心臓の病気～正しい知識と行動で自分の身体を守ろう～

心臓病は、2020 年の厚生労働省の調べによると日本における死因の第 2 位を占めている。また、心筋梗塞や心不全などの心臓病による死亡数は 1 月が最も多く、次いで 2 月、12 月、3 月と冬季に集中し、夏季のおよそ 1.5 倍にのぼることから、本企画は冬季に入る前に心臓病について事前知識を持っておき、予防行動がとれることを目的に実施した。

当日は予約者全員が参加した。講義では、代表的な心臓病である心筋梗塞や狭心症の特徴について前兆症状や動脈硬化と高血圧との関係性について説明し、血圧に関するクイズや心臓病になりやすいかどうかのセルフチェックも取り入れた。また、最後には“明日からの生活へ取り入れられそうな生活改善の目標”を挙げ、最後に一人一人発表してもらった。それぞれの普段の生活を振り返った上で課題を見出し、それを参加者で共有できたことによって対策の幅を広げることに繋がったと考える。参加者は特に血圧コントロールの重要性について関心を示し、終了後には食生活の改善（塩分を控える）や朝晩の血圧測定による血圧管理、寒暖差を防ぐ運動や入浴の方法など、具体的な対策を身近なことから学べたことに満足の声が多く聞かれた。（文責：石関美津子）

第 5 回：生活体力を測ってみませんか？



本企画では、本学の教員や保健師選択課程の 4 年生が参加者の身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者への健康づくりについてアドバイスをを行った。参加者は血圧・脈拍測定と問診を受けた後、ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位、開眼（閉眼）片足立ちや 5m 歩行（座位ステップングテスト）の測定をした。

新型コロナウイルス感染症予防対策として、昨年に引き続き、30 分に最大 15 人の完全予約制とし、比較的短時間で測定を終えるようにするなどの工夫をして実施した（写真：血圧測定の様子）。

終了後に参加者からは、「毎年参加し、データを比較して楽しんでいます。いつまでも続けたいです」、「毎日努力していることが数字にあらわれるので励みになります」、「優しく対応していただき、自分でも健康に気を付けていこうと思うことができました」など、企画に満足を得られた内容の意見が多数みられた。実施後のアンケートでも、本企画に対し「とても満足」あるいは「まあ満足」と 94.1%（32/34 人）が答えたことから、参加者にとって満足できる内容であったと考えられる。

今回の参加者は約半数が過去に本企画に参加経験のあるリピーターであることから、本企画の需要は本学周辺の地域で高いことがうかがえる。しかし、今年度は予約が一部埋まらない枠があったため、来年度は参加者の募集方法を見直す等、検討をしていきたい。

（文責：山田暢子）

第 6 回：健康な足をいつまでも～始めよう足のケアと観察～

2 月 10 日の「フットの日」にちなみ、足のヘルスプロモーションを促進するため、「健康な足をいつまでも～始めよう足のケアと観察」をテーマに講義と演習を行った。構成は 2 部制で、前半は、足の解剖と機能・高齢者に生じやすい足のトラブル（変形、爪病変、足白癬等）・爪切りや低温火傷に注意するなどのセルフケアの講義、後半は、足の観察方法・皮膚の保湿について講義した。その後、参加者は講義にそって自分の足の変形、皮膚や爪の状態、冷えの有無等を観察し、最後に、保湿乳液を使って足部の保湿を体験してもらった。講義の後、珪藻土マットの共有について？靴底が外側ばかり減るのは良いのか？踵部の皮膚はどこまで削ってもよいのか？などの質問があり、個々の質問に複数の講師が具体的に説明を行った。

利用者のアンケートでは「足に関心があった・年齢的に足の健康管理を意識・足のメンテナンスについて教えてほしい」などのコメントもあったことから、今後も足の健康をテーマに継続的に健康教育することが必要ではないかと考える。

（文責：池田清子）

『子育て支援』

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、子どもに関する相談を行うとと

もに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的に 2006 年から年 6 回実施してきた。2020 年度からは新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に併せて、オンラインでの相談対応なども実施してきたが、今年度は全て対面での子育て相談に切り替えて活動を行った。前年度同様に予約制ではあったが、相談時間の時間枠を取り除き、開催時間内であればいつでも参加してもらええる対応へと変更した。

しかしながら、今年度も利用者は少ない状況であった。子育て相談については、実際の子どもの様子を見ながら相談を受けるほうが利用者も相談しやすいため対面での相談とし、また、子育て中の親の生活を考えて時間の制限も撤廃したが、事前の予約（1 週間前締め切り）が必要であることも参加を阻害する要因となりうると考えられる。さらに、地域へのチラシや回覧板での広報が、現在は年度始めの 1 回だけとなっており、開催情報が利用者の方にタイムリーに届いていないことも考えられる。直前まで予約を受け付けたり、広報の方法を模索したりするなど、気軽に参加してもらええる開催方法を検討していく。

表 5 2022 年度の『子育て支援』活動状況

年	日程	活動	参加者数（予約数）
2022 年	5 月 11 日	対面での子育て相談 （コラボカフェ内）	2 組 3 人（2 組）
	6 月 29 日	対面での子育て相談	予約なし
	9 月 7 日	対面での子育て相談	1 組 2 人（1 組）
	11 月 16 日	対面での子育て相談	0 人（1 組）
2023 年	2 月 15 日	対面での子育て相談	予約なし
	3 月 8 日	対面での子育て相談	予約なし

（文責：山本陽子）

『こころと身体の看護相談』

「こころと身体の看護相談（以下、看護相談）」は、心身に不調のある方とそのご家族が気軽に相談できる地域のおよび精神看護専門看護師を目指す大学院生の教育の場として、2007 年 6 月より月 1 回（木曜日の午後・都合により曜日の変更有）、完全予約制の 1 回 12 人の相談枠で実施している。新型コロナウイルス感染症対策として、昨年度と同様に相談者の検温、手指消毒とマスクの着用を徹底した。また、会場の換気とソーシャルディスタンスの確保を行った。

今年度の相談件数は 49 件、うち新規相談は 7 件、一旦終結していたが再開した相談は 3 件、継続の相談は 39 件であった。相談者の年代の内訳は 40 歳代が 12.2%、50 歳代が 6.2%、60 歳代が 40.8%、70 歳代が 40.8%であった。性別の内訳は男性が 14.2%、女性が 85.8%

であった。例年と同様に、60 歳代以上の相談者が最も多い傾向であった。

相談内容は自分の心身の悩みが最も多く、次いで家族関係の悩み、対人関係の悩みが多くみられた。新型コロナウイルス感染症の流行が長期化していることから友人や家族との関わり、余暇活動といったコーピングを行うことが困難であること、家族や人間関係において変化が生じ、相談者は悩みを抱えやすい状態となっていることがうかがえた。そのような相談者にとって、感染対策を徹底し気軽に相談できる場として看護相談を対面にて継続していきたいと考える。

表 6 2022 年度相談件数（49 件）の内訳

相談申し込み（件）			相談終結 （件）	相談人数 （延べ）
新規	再開	継続		
7	3	39	4	49

表 7 2022 年度相談者（49 件）の年代内訳

年代	10 歳代	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代
件数 （％）	0	0	0	6 (12.2)	3 (6.2)	20 (40.8)	20 (40.8)

表 8 2022 年度相談内容内訳 （複数回答）

相談内容	対人関係の 悩み	家族関係の 悩み	自分の心身 の悩み	家族の心身 の悩み	日常生活 について	その他
件数 （％）	9 (14.8)	11 (18.1)	34 (55.8)	5 (8.1)	2 (3.2)	0

（文責：坂口豊代）

『もの忘れ看護相談』

「もの忘れ看護相談」は 2012 年 3 月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、知識の普及啓発のための 30 分間のミニ講義と希望者には教員が対応する個別相談を実施している。2022 年度の「もの忘れ看護相談」は、4 回開催し、参加者数は延べ 25 名であった。

ミニ講義では、自身のもの忘れが気になりはじめた方に加え、認知症と診断された本人やその家族の参加が多く、継続して参加している人も少なくなかった。

個別相談では、延べ 10 名の参加者のうち半数が新規の相談者であった。主な相談内容は、本人や家族の認知症診断後の生活に関するものであり、神戸市の認知症診断助成制度を利用し、認知症診断を受けたもののその後の生活に不安を感じる人が少なくないことがうかがえた。したがって、もの忘れ看護相談は、次年度以降も地域の人々と家族が診断後も安心して生活するための 1 つの相談先としての役割を果たしていきたいと考える。

表 9 『もの忘れ看護相談』参加者数と運営人数（人） ※（ ）は個別相談利用者

開催日	ミニ講義参加者数			運営人数			
	65 歳 以上	65 歳 未 満	計	教員	ボランティア		計
5 月 19 日(水)	4 (3)	4 (0)	8 (3)	4	学部生 2	あんしんすこやか センター職員 1	7
7 月 7 日(木)	6 (2)	2 (0)	8 (2)	4	—	あんしんすこやか センター職員 2	6
9 月 7 日(水)	3 (2)	1 (0)	4 (2)	4	学部生 4	あんしんすこやか センター職員 1	9
11 月 17 日(木)	4 (3)	1 (0)	5 (3)	4	学部生 4	あんしんすこやか センター職員 2	10

昨年度までの 2 年間は規模を縮小し開催していたが、今年度は感染防止に配慮しながら 4 回開催した。感染拡大時においても参加者がいたことから、今後も状況に合わせて開催方法を工夫し、地域の人々にとってのもの忘れや認知症に関する相談が身近にできる場となるよう活動を継続していきたいと考える。
(文責：秋定真有)

(3) トライやる・ウィーク

人間科学領域 自然科学分野 片山 修

1) 概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校 2 年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人一人の興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を 5 日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高め、自分なりの生き方を見つけることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

2) 実績

2022 年度トライやる・ウィークでは、本学において、6 月に星陵台中学校および 11 月に太山寺中学からの受け入れを行った。受け入れ人数はそれぞれ 3 名である。いずれも 3 日間の日程で実施された。内容は、下記に示した。また教科において、看護学授業見学、看護系科目授業準備など本学全体を知る幅広い体験をした。

表 1 星陵台中学校トライやるウィークのスケジュール

日程	内容
6月6日（月）	ガイダンス
	キャリア支援での作業
6月7日（火）	図書館業務補助
	コラボカフェ業務補助
	いちかんダイバーシティセンター業務補助
6月8日（水）	事務局作業補助
	看護学系授業準備補助（看護管理分野）

表 2 太山寺中学校トライやるウィークのスケジュール

日程	内容
11月7日（月）	ガイダンス・事務局作業補助
	キャリア支援での作業
11月8日（火）	コラボカフェ業務補助
	保育材料作成作業・保育士補助業務
11月9日（水）	図書館業務補助
	看護学系授業準備補助（看護管理分野）

（４）こうべ生涯学習カレッジ（コミスタ神戸）

老年看護学分野 秋定真有

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各校の教員の様々な専門分野を生かした講義を「こうべ生涯学習カレッジ」として提供しており、本学も 2012 年度から参加している。

今年度は、2023 年 1 月 20 日（金）10:00～11:30 に「認知症を正しく理解する～認知症とともによりよく生きるために～」をテーマに講義を行った。参加者は 60 名程度であった。講義では、認知症の基本的な知識とともに、認知症当事者とその家族の実際の体験や気持ちを紹介した。また、本分野が作成した「もの忘れとうまく付き合いながら暮らすための工夫」のリーフレットを紹介し、自身や家族のもの忘れが気になる参加者には、生活の中で実際にどのような工夫ができるかを考えていただくなどした。参加者からは、自身のもの忘れに対し日常で取り入れられる工夫を考えていきたい、もの忘れが気になる家族や近隣の人との接し方に役立てたいなどの感想が聞かれた。

(5) UNITY 講座

在宅看護学分野 丸尾智実

神戸研究学園都市大学交流促進協議会（UNITY）の公開講座は、市民の生涯教育を振興するとともに、加盟校の最新の研究成果を市民に還元することを目的として、1999 年度から開催しており、各加盟校が原則として毎年 1 講座（5 回シリーズ）、考えたテーマに即して企画・実施をしている。今年度は、療養生活看護学領域が担当した。開催日時・テーマ等の概要は以下の通りである。

1) 全体テーマ：コロナ禍の健康

新型コロナウイルス拡大を受け、私たちの生活は大きく変化をしました。これからの生活や健康への影響もまだまだ不透明です。コロナ禍の健康について、一緒に考えてみませんか。

2) 開催日時：2022 年 10 月の各土曜日 14：00～15：30（全 5 回）

3) 講座の概要

回	テーマ	担当分野	講師
1	あなたも気になる？ コロナ禍での認知機能の低下と予防	在宅看護学	准教授 丸尾 智実
2	フレイル予防のポイント ～お口と足の健康～	慢性病看護学	教授 池田 清子 助教 後藤由紀子
3	がんについてもっと知ろう ～コロナ禍にがんと生きる・がんを防ぐ～	がん看護学	准教授 小山富美子
4	コロナ禍における子どもと家族のケア	小児看護学	兵庫医科大学病院 小児看護専門看護師 熱田 恵美
5	その人の咳はコロナが原因ですか	急性期看護学	准教授 佐藤 隆平

(6) もの忘れ看護電話相談・もの忘れ看護相談オンラインミニ講義

『もの忘れ看護電話相談』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、蒲谷苑子

「もの忘れ看護電話相談」は、認知症患者およびその家族が社会から孤立することなく、

安心して自宅での生活を継続できることを目指し、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、2020 年度から新たに取り組みを開始した活動である。2022 年度の「もの忘れ看護電話相談」は、8 月をのぞいて 2 ヶ月に 1 回の相談日を設定し、1 人 20 分の事前予約制として広報した。相談者は、3 名で、のべ 4 回の看護相談を行った。

相談の中には、認知症と診断されているケースはなく、遠隔地からの昨年度から継続した相談希望もあり、日常生活上の些細な疑問や不安を相談できる場をもっている方が少ないことが窺えた。さらに、家族のもの忘れの症状に対して、不安を抱えながら仕事に従事している方の相談からは、対面での「もの忘れ看護相談」に比べ、周囲の目を気にせず匿名性を保ちやすい相談先であることも、利用のしやすさに繋がっていると考えられた。加えて、何かあっても相談できる場があることが安心して介護を継続できるとの感想も聞かれた。今後は、身近に相談できる場として、広報の工夫やアンケートの実施、相談後の感想を尋ねる等により相談者のニーズを把握した上で支援のあり方を検討していきたい。

『もの忘れ看護相談オンラインミニ講義』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、蒲谷苑子
いちかんダイバーシティ看護開発センター：水川真理子

「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は、新型コロナウイルス感染症の流行による外出自粛が続く中で、もの忘れや認知症に不安がある人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるように 2021 年 3 月に開始した活動である。2022 年度の「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は下記日程で 14 時～14 時 45 分に開催した（表）。30 分間のミニ講義後に、質疑応答や参加者同士の交流の時間を設け、実施した。2022 年度の「もの忘れ看護相談」は、参加者数は延べ 27 名であった。

表 『もの忘れ看護相談オンラインミニ講義』 テーマおよび参加者数

開催日	テーマ	参加者数		
		70 歳以上	70 歳未満	計
5/25（木）	認知症とともに生きるということ	5	1	6
6/30（木）	コロナ禍における認知症予防	6	3	9
10/27（水）	認知症と診断された時の心構え	5	1	6
12/16（金）	あなたの大切な人が認知症になったら	3	3	6

アンケート結果から、オンラインを活用して実施した講義は、感染拡大の中でも安心して参加できることに加え、移動時間が短縮できるなど気軽に参加できる利点が示されていた。一方で、参加者は本講義にもの忘れや認知症に関する知識や情報の習得のみならず、オンライン上で参加者同士の交流や意見交換の機会を求めていることも明らかとなった。また、継続参加者も多いことから、今後は、オンライン上であっても参加者同士がより主体的に交流をもてるような運営方法をさらに工夫し、活動を発展させたい。

(7) 神戸市フレイルサポーターによるフレイルチェック事業

公衆衛生看護学分野 岩本里織、山下正、遠藤真澄、山田暢子

1) 概要

本事業は、神戸市（公益財団法人こうべ市民福祉振興協会に委託）がフレイルサポーターを育成し、フレイルサポーターが地域の中でフレイルのリスクがある高齢者を把握し、早期に予防活動を支援することにより、将来的に要介護状態に陥ることを予防するものである。本学は、保健師課程4年生が「a. 地域住民の介護予防事業において、保健師による介護予防の事業・施策の立案、実施における関係機関との連携や調整、評価の役割を学ぶ」、「b. フレイル事業に参加・協働し、住民の主体的介護予防実施について学び、住民の主体的活動の推進のために保健師がどのような役割を担うかを考える。」、「c. フレイル事業に参加した地域住民に対して、介護予防に関する相談を実施できる」の3点を目的に参加している。

2) 実績

2022年11月17日、神戸市介護保険課、こうべ市民福祉振興協会、神戸市フレイルサポーターとの共催により開催した。本学の近隣に居住する住民13名が参加し、検温、消毒、十分なスペースの確保等、感染予防に十分留意した体制で行った。

内容は、フレイル予防の講話、自己簡易チェック（サルコペニアの簡易指標である指輪つかテスト、栄養・運動・口腔・社会性・こころのチェック）、深堀チェック（口腔・運動・社会参加のフレイルチェック）、健康測定、結果説明、フレイルトレーナーによるアドバイス、健康相談であった。本学学生は、フレイルサポーターの方々とともに、受付誘導、健康測定（血圧、握力、身長、ふくらはぎ周囲長、開眼片足立ち、筋肉量、滑舌測定）、健康相談を実施した。

実施後のアンケートでは、参加者の92.3%（12人/13人）が、本企画や学生の血圧測定、健康相談に対し「とても満足」あるいは「まあ満足」と答えたことから、参加者にとって満足できる内容であったと考えられる。

3) 教育上の効果

学生は、神戸市介護保険課の保健師より事前に講義を受け、神戸市の高齢者を取り巻く現状と課題、介護予防事業・施策の立案、関係機関との連携や調整、効果検証等の保健師の役割について学んだ。

当日は、参加者の健康測定や健康相談の実践を通じて、参加者の健康状態や日々の生活状況を伺い、これまでの看護の知識を活かして、フレイル予防のためのセルフケアの方法について一緒に考えることができた。また、事前の計画から当日の準備、実施、事後カンファレンス、評価までの一連の過程を通じて、保健師が地域の関係機関と連携してフレイルサポーターの活動の場を広げ、個々のフレイルサポーターの専門性や経験を尊重しながら主体的に活動ができるよう促し、組織としての力を信じ引き出していく支援の実際につ

いて学ぶことができた。さらに、地域において健康づくりの担い手として活動することが、フレイルサポーター自らの健康や生きがいにつながっていることも学んだ。

（８）プレパパプレママセミナー

ウィメンズヘルス看護学助産学分野 高田昌代、井上理絵、池田 智子
蚊口理恵、田中 幸恵

１）概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環として実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

２）実績

今年度は第１回目を 2022 年 9 月 3 日（土）、第２回目を 2023 年 2 月 4 日（土）に開催した。第１回目のテーマは「“感”～自分たちらしいお産と子育てに向けて～」として、大学院 2 年生が中心となり、新型コロナウイルス感染症防止対策を徹底した上で対面でのセミナーを開催した。15 組（当日体調不良で 1 組欠席）の参加者からは「病院での両親学級の開催が中止される中、沐浴などの体験ができ、子育ての準備のイメージがもてた」などの意見が寄せられ、コロナ禍における妊婦への出産・育児準備教育の場として活用いただいた。第２回目のテーマは「つなぐ～妊娠中の今、できること～」として、大学院 1 年生が中心となり開催した。15 組の参加（当日体調不良で 1 組欠席）があり、参加者からは、「準備からはじめるということの大切さを知れましたのでしっかり出産に向け準備していきたいと思います。」と概ね好評であった。

３）教育上の効果

セミナーの目的・目標、テーマについては、院生が授業で学んだ健康教育の手法と、助産学実習で妊産褥婦の援助を通じて考えたことを取り入れた。院生が意見交換を十分に行い、一貫性のある内容に構成することで、全員が同じ方向を向いて実践・評価まで行うことができ、集団指導の実践的技術を習得できた。

(9) 命の出前講座

ウィメンズヘルス看護学分野 井上理絵

1) 概要

命の出前講座は、思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まっており、大学院助産学実践コースの学生が「思春期健康教育論」の授業の一環として毎年実施している。対象者は小寺小学校 4 年生、5 年生の児童である。

2) 実績

今年度の第 1 回は、2022 年 10 月 24 日（月）、5 年生 59 名に対し実施した。授業内容は「命の誕生～一人ひとり違う誕生～」をテーマとし、教員が企画の要点作成と講義を担当、出産の劇は大学院 1, 2 年生が主体で行った。参加した児童は、小さな胎児模型や新生児人形に触れ「自分もこんなに小さかったんだ」と興味津々で話していた。また授業後の感想には「10 か月の間に命が重くなる」「がんばって産んでくれたお母さんに感謝したい」など生命の尊さを感じられるものが見られた。第 2 回は 10 月 27 日（木）、4 年生 61 名に対して実施した。大学院 2 年生が授業の企画・運営を担当し、大学院 1 年生も参加した健康教育であった。今年は「みんなちがって、みんないい～体の変化を知ろう～」というテーマで授業を行った。内容は、小学 4 年生の頃から起こる体の変化、男女の体の違い（月経・精通）、発育の個別性について説明した。月経時の対処法では実際に月経用品を用いた演習を行った。授業後の感想では「僕には女性の体は関係ないと思っていたけど知ること大切」とお互いの体を知る大切が語られ、女子児童からは「ナプキンの付け方がわかり安心できた」など具体的な感想も見られた。

今年度も対面での授業であったため、コロナウイルス感染拡大防止を十分に配慮して実施した。実施時は全員マスク着用を厳守、密閉を避けるため窓は解放、教室内では密をできるだけ避けるよう一定間隔を保ちながら講義・演習を行う工夫をした。

3) 成果

大学院生は、初めて小学生へ授業を行うという経験を通し、小学生という年齢を考慮した授業の工夫について実践で学んでいた。大学院 2 年生は、昨年 4 年生だった児童と触れあっており、5 年生へと成長した児童と対応することで思春期の頃の身体と心の変化について考えることができていた。今年度、初めて参加した大学院 1 年生は、助産師が行う思春期教育の重要性を再認識し、助産師活動の幅広さを学ぶことができていた。

本授業は、毎日新聞（神戸・明石版）にも掲載され、先入観の少ない小学生の頃から男女の体の変化を学ぶ思春期教育の重要性について地域へ発信する機会となった。

(10) 竹の台ふれあいまつり

ウィメンズヘルス看護学助産学分野 高田昌代、井上理絵、池田 智子
蚊口理恵、田中 幸恵

1) 概要

神戸市西区竹の台地域委員会が 2003 年より企画しているお祭りで、当分野は 2014 年から毎年参加をしてきた。参加にあたっては、厚生労働省と全国助産師教育協議会からの協力依頼を受け、院生がオレンジリボン運動（子ども虐待防止）について学び、社会への啓発活動を企画実施することを取り入れてきた（昨年度の報告書<https://www.orangeribbon.jp/info/npo/b19bc5840684b35ec398a423587fdfb1940b376d.pdf>）。赤ちゃん人形の抱っこ体験、アロママッサージなどを実施し、幅広い世代の皆さんと交流する機会を持ってきた。

コロナウイルス感染拡大に伴って 2 年間はお祭りの開催が中止されてきたが、今年度は竹の台地域委員会より規模を縮小して開催することが決定され、当分野にもご案内を頂いた。同委員会よりは密になる場面を避けた活動実施（参加人数は 4 名程度）を提案され、院生間で検討をし、オレンジリボン運動の啓発活動と「女性の健康支援」をテーマとし血圧測定・骨密度測定・健康相談を企画した。

2) 実績

11 月 6 日竹の台小学校でお祭りは開催され、同小中学校生によるブラスバンド演奏、地域住民の舞踊サークル等の発表がされた。幅広い世代が来場され、1000 人を超える規模であったと地域委員会から報告を受けた。

当分野からは院生 3 名と教員 1 名が参加し、体育館の一画で活動を実施した。院生がオレンジリボン活動をポスター掲示とリーフレットを用いながら説明をした。地域委員会の方の関心は高く、その場でオレンジリボンを胸につけて頂き活動への賛同を得た。

骨密度測定への希望者が多く利用者は 120 名に及び、測定結果に合わせて骨粗鬆症に関する健康相談を実施していった。整理券を配布して測定を実施したので、密になることと待ち時間の短縮が出来たため、地域委員会からも好評であった。

3) 教育上の効果

院生はオレンジリボン啓発活動の紹介を通じて、この活動が広く知れ渡り虐待のない社会実現を目指す意味を実感する機会となった。

来場された方は壮年期から老年期の女性がほとんどで、更年期障害や骨粗鬆症といった発達段階上の健康課題を抱えておられた。院生はそれらの女性の声を直接伺うことが出来、壮年期から老年期の女性の健康支援を実践する機会を得られた。

(1 1) HAT 神戸復興住宅における健康支援活動

慢性病看護学分野 池田清子 畑中あかね 後藤由紀子

1) 概要

本講座は 2003 年よりボランティア活動を展開している HAT 神戸復興住宅において、連合自治会より高齢化が急速に加速している地域高齢者の介護予防にむけた健康講座をおこなってほしいとの要望があり行っている事業である。しかし、2020 年度以降は COVID-19 による影響で対面での活動は、その都度、感染拡大状況を考慮しながら開催している。2021 年からは電話訪問を開始している。

2) 実績

2022 年度は、7 月 2 日（土）と 11 月 5 日（土）、2023 年 3 月 4 日（土）に対面での健康支援を実施した。参加者はこれまで本ボランティア活動に来所されていた住民 9～10 名であった。また、昨年同様、手書きの新年祝いのカードを 17 枚作成し、脇の浜あんしんすこやかセンターの職員の方に配布して頂いた。さらに本年度も中央区赤い羽根共同募金助成金を頂き、対面での健康支援に加えて電話による訪問を継続した。電話訪問の対象は 5 名で、学生が月 1～2 回電話訪問を継続している。人と話す機会が少ない独居の高齢の住民にとって学生からの電話は概ね肯定的に受け止められているが、今年度は徐々に外出制限も緩和され外出の機会が増えていること、電話訪問の対象者の認知機能の低下や身体機能の低下、地域において高齢者を狙った詐欺防止のため知らない電話に出ないように指導がされている等から、電話に応答することがむずかしい状況もわかってきた。この点は今後の課題である。

4. コラボ教育

在宅看護学分野 片倉 直子

（１）教育ボランティア登録状況

2022 年 4 月に活動継続への意思確認ができた教育ボランティア登録者数は、70 人である。

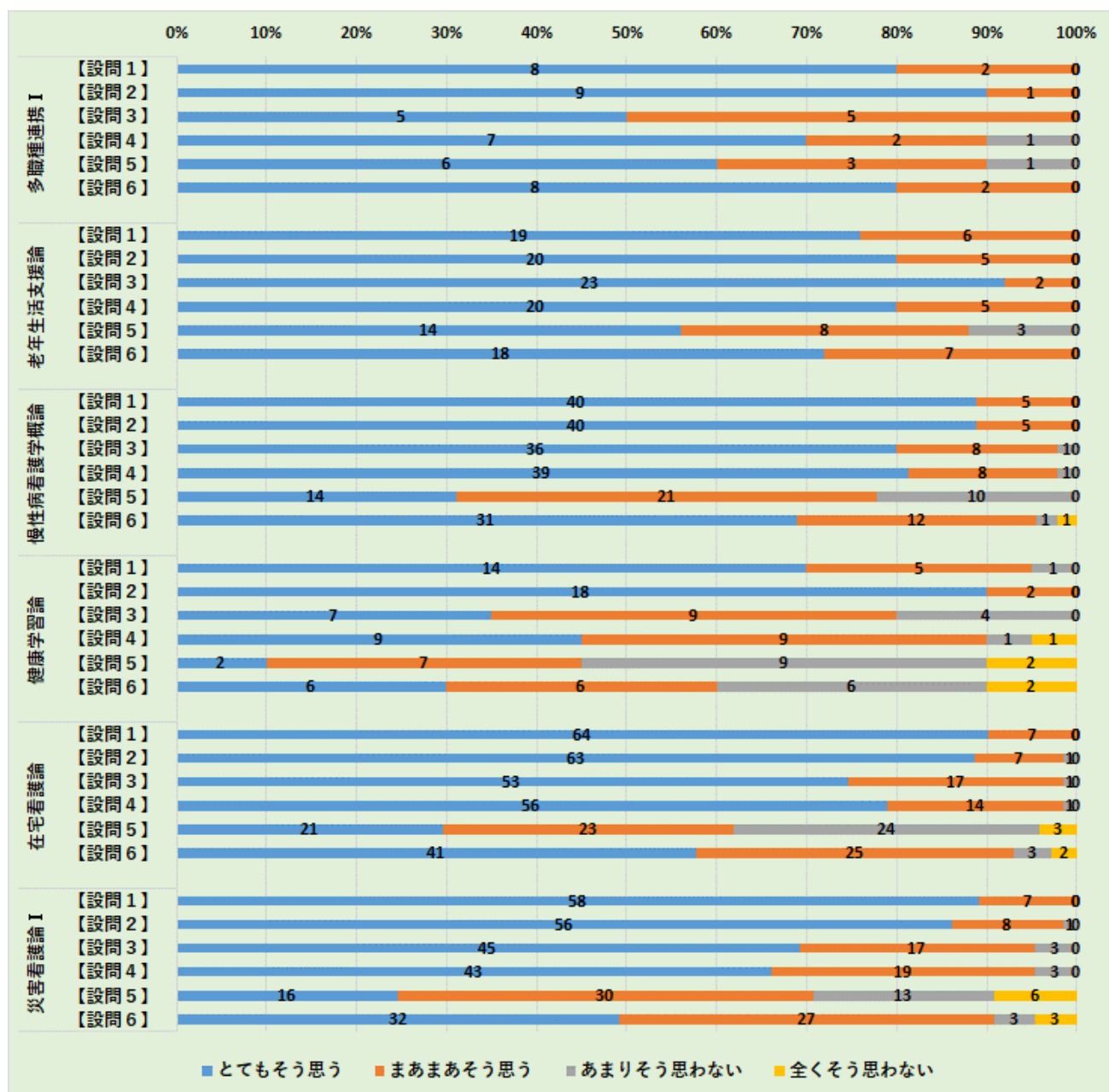
（２）教育ボランティア導入授業

2022 年度に実施した教育ボランティア導入授業は、1 年生科目「多職種連携I」、2 年生科目「老年健康生活支援論」「慢性病看護学概論」「健康生活支援学実習」、3 年生科目「健康学習論」「在宅看護論」、4 年生科目「災害看護論I」の 7 科目である。

COVID-19 の流行があったが、感染対策を十分に行ったうえ、対面で授業にご協力いただけた。「老年健康生活支援論」「慢性病看護学概論」では講義や教員との対談を、「多職種連携I」「在宅看護論」「災害看護論I」では学生によるインタビューへの回答を、「健康学習論」では学生による健康教育に参加し評価を、「健康生活支援学実習」では自宅訪問や地域活動の同行をしていただいた。

（３）コラボ教育学生評価結果

法人中期計画のなかで、「教育ボランティアの方々との連携をさらに強化し、学生と地域住民とのコラボ教育を推進する」ことを掲げていることを鑑み、2020 年度から教育ボランティア導入授業を受けた学生による「コラボ教育学生評価」を実施し、教育ボランティアニュースレター等でその結果をフィードバックしている。2022 年度の結果は図のとおりである。



- 【設問 1】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、いつもより**ことば使いや態度に気を付けましたか**
- 【設問 2】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、いつもより良い意味で**緊張して授業に臨めましたか**
- 【設問 3】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、**地域で生活する人々の理解**がより深まりましたか
- 【設問 4】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、**看護を提供する人々をケアする際に心がけること**についての理解が深まりましたか
- 【設問 5】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、大学や自宅近隣における**地域のイベントに参加してみよう**という気持ちが膨らみましたか
- 【設問 6】教育ボランティアさんの講演や意見、感想によって、**看護職を目指すモチベーション**が上がりましたか

図 コラボ教育学生評価 2022 年度科目

(4) 教育ボランティアによる推薦図書

法人中期計画のなかで、「地域において各種交流行事を実施するとともに、体育館、図書館などの大学施設を積極的に開放する」ことを掲げていることを鑑み、今年度は図書情報センターと共同で、「教育ボランティアさん推薦！いちかん学生へのおススメ図書」を実施した。6 人の教育ボランティアから延べ 11 冊の本を、以下の表のとおりご紹介いただいた。書籍は教育ボランティアのメッセージとともに図書館で写真のとおり掲示した。

表 教育ボランティアによる推薦図書

タイトル	著者	出版社
集英社版学習漫画世界の伝記NEXTナイチンゲール	堀内 雅一	集英社
ナイチンゲールの『看護覚え書』	金井 一薫	西東社
『我が家のヒミツ』（短編集）の「手紙に乗せて」	奥田 英朗	集英社
70歳が老化の分かれ道	和田 秀樹	詩想社
飼猫ボタ子の生活と意見	曾野 綾子	河出書房新社
「ひと」として大切なこと	渡辺 和子	PHP研究所
生きるとは、自分の物語をつくること	小川 洋子、 河合 隼雄	新潮社
あふれる愛	金澤 泰子	どう出版
産まれてすぐピエロと呼ばれた息子	ピエロの母	ベストセラーズ
ぼく モグラ キツネ 馬	チャーリー・マッケジー	飛鳥新社
坂の上の雲	司馬 遼太郎	文藝春秋



推薦図書の展示の様子

（５）教育ボランティア交流会

2023 年 3 月 1 日（水）14 時から 16 時まで、「2022 年度教育ボランティア交流会」を、感染予防対策を万全に整えて、本学ホールで実施した。教育ボランティア 25 人、学生 3 人、教職員 24 人が参加した。

2022 年度の授業の一部を教員が紹介した後、2 年生、3 年生、4 年生が、教育ボランティア導入授業における学びを発表した。教育ボランティアからは、自分の参加が学生の学びに役立っていることへの自負等が語られた。昨年度、教育ボランティアから「災害看護学」における学びの要望のあり、神原咲子教授が「災害と看護について『地域の防災力を高める～生活の視点から考えてみよう～』」と題したミニ講義を行った。

（６）教育ボランティアへの調査

法人中期計画のなかで、「教育ボランティアの方々との連携をさらに強化し、学生と地域住民とのコラボ教育を推進する」ことを掲げていることを鑑み、教育ボランティアがコラボ教育へさらに関われる環境を整えるために質問紙調査を実施した。2023 年 1 月末に終了し、8 割以上の回答を得ている。2023 年度は、この調査結果にもとづき、教育ボランティアがコラボ教育へさらに関われる環境を整える方策を検討する予定である。

Ⅱ 健康支援グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川 真理子
公衆衛生看護学分野 岩本 里織

1. グループの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの健康支援グループは、神戸市から委託を受けた事業の「オンライン健康相談(看護相談)」事業と、「オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防」事業を担っている。

コロナ禍において、地域住民は、受診や健康診断、訪問・通所サービスなどを控える傾向があり、慢性疾患の重症化や、介護負担の増加、子育て期の母親のストレスの増加などさまざまな健康課題を抱えていることが想定された。コロナ禍で生じる様々な問題の解消のために、オンライン診療が解禁となったほか、オンラインでの交流の機会も激増した。本学は、コロナ禍における地域貢献活動として、2020 年度に、オンライン保育やオンラインもの忘れ看護相談などを開催し、ICT を用いた看護の展開をいち早く取り入れてきた。これらの経験も踏まえて、2021 年度からは、神戸市の委託事業の一環として、ICT を用いた看護を開発、展開することとなった。

2. オンライン健康相談(看護相談)班メンバー

リーダー 岩本里織

メンバー 坪井桂子、林千冬、井上理絵、片山修、小山富美子、磯濱亜矢子、
畑中あかね、水川真理子、山下正、遠藤真澄、関口瑛里、山田暢子、
宮島朝子、西村康子、勝田玲子

3. オンライン健康相談(看護相談)の実績

(1) 事業概要

2020 年 2 月頃から流行した新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)により、2 度の緊急事態宣言の発出等による外出の抑制を要請された。さらに、コロナの流行は緩急を繰り返しながら 2023 年まで続いている。このような中、人々は医療機関・介護施設への通院・通所を控えたり、健康支援・地域連携活動、医療講演会や患者同士の情報交換・経験交流を行う患者の会、子育て支援サークルなど、地域福祉において重要な役割を担っていた活動が困難となり、病状の重症化や要介護度の重度化、漠然とした不安の増大、コミュニケーション不足による孤立化など、健康リスクの増大が生じている。

一方、コロナの流行によって、人々の ICT（情報通信技術）の利用状況は増大し、オンラインによる医療機関の診療などが行われたり、オンライン会議の開催など多様な場面において、ICT が活用されるようになってきた。スマートフォンの所有率は 79.7%（令和 2 年通信利用動向調査／世帯構成員層、総務省）であり、これは 13 歳から 50 歳代は 90%以上であるが、60 歳代 79.5%、70 歳代 48.4%である。一方、インターネットの利用率も 83.4%であり（「令和 3 年版情報通信白書」（総務省））、13 歳から 50 歳代では 90%以上、60 歳代 82.7%、70 歳代 59.6%である。このように多様な世代が、ICT の活用をしている。

以上のような、市民のコロナの影響による健康リスクの増大に対応するために、オンラインを活用して自宅に居ながらも気軽に健康に関して看護専門家に相談できるオンライン健康（看護）相談を、2021 年度から開設した。これは、オンライン掲示板による相談システムを開発・運用し、市民への相談に応えるとともに、神戸市民の健康相談へのニーズを把握し、看護相談システムの評価を行うことを目的としている。健康支援グループのオンライン看護相談班の看護教員が、健康に関する悩みや不安などの相談に応じることで、疾病予防や、子育てや介護の負担感の軽減につながると考える。

（２）経過と主な活動

【2022 年度】

2022 年 4 月から継続的に相談の受付をしている

2022 年 7 月 オンライン健康相談システムおよびホームページの改良

神戸市企画調整局政策課スマートシティ担当と広報 PR について会議

2022 年 10 月 西区制 40 周年イベント（西神中央ひろば）ポスター展示

2023 年 1 月 オンライン看護相談イベント in 六甲アイランド

（神戸市健康企画調整局政策課と共催）

2022 年度には、2021 年度に構築したオンライン健康(相談)の周知の拡大を目指して、活動した。まずは、オンラインシステムの相談のしにくさ、特に、ID、PW の入力 of 簡略化、ホームページの入り口の分かりやすさ等を改良した。

さらに、神戸市企画調整局政策課スマートシティ担当者と検討し、オンライン健康(看護)相談を、スマートシティのホームページで紹介してもらった。さらに、共同にてオンライン健康(看護)相談の住民への周知を行うイベントを六甲アイランドで開催した。

参考：オンライン看護相談のチラシ



(3) 相談実績

1) 相談実績

2021 年 12 月から健康相談（看護相談）を実施している。相談実績を表 1 に示す。

表 1 オンライン健康相談（看護相談）実績

相談受付日 (土・日・祝以外)	新 規		終 了		継 続 中	
	人 数	件 数	人 数	件 数	人 数	件 数
2021年12月	3	4	0	0	3	4
2022年1月	6	6	5	6	4	4
2月	2	2	2	2	4	4
3月	1	1	1	1	4	4
4月	0	5	0	5	4	4
5月	2	2	1	1	5	5
6月	0	0	0	0	5	5
7月	1	1	0	0	6	6
8月	4	4	5	5	5	5
9月	1	1	1	1	5	5
10月	1	1	0	0	6	6
11月	1	1	0	0	7	7
12月	0	0	0	0	7	7
2023年1月	3	4	1	1	9	10
2月	1	2	0	0	10	12
3月	1	1	0	0	11	13

2) 相談者の概要

2021 年 12 月から 2023 年 3 月までの相談者の総数は 27 人であった。居住地別では大学が所在する西区が 9 人（33.3%）と最も多く、次いで東灘区が 8 人（29.6%）であった。これは、開催したイベントの影響と思われる。

相談者の年代は、50 歳代が 7 人（25.9%）と最も多く、次いで 40 歳代 6 人（22.2%）、60 歳代 5 人（18.5%）であり、40 歳から 60 歳代の利用が多かった。

相談者の性別は、女性が 17 人（63.0%）、男性が 10 人（37.0%）であり、女性が多い傾向があった。

3) 相談内容

相談内容を表 2 に示す。相談内容は、「病気や受診などに関する相談」が 17 人 (47.2%) と最も多く、次いで「健康づくりや健康に関する相談」が 10 人 (27.8%)、「こころの悩みに関する相談」が 5 人 (13.9%) であった。

実際の相談内容をみると、分類に関係なく、多様な相談がみられた。腹痛やアレルギー、嚥下の違和感など、ちょっとした症状に関する相談で、医療機関の受診の必要性について判断を問う相談がみられる。さらに、術後など医療機関にかかっているけれども、医療機関には相談できなかったり医療そのものに関する相談などもあり、医療を補佐する情報の獲得のための相談の利用もあるようである。

メンタルヘルスに関する相談は、一定数みられている。2022 年度は新型コロナウイルス感染症やワクチン接種に関する相談はみられていない。

相談内容	件	%
病気や受診などに関する相談	17	47.2%
健康づくりや健康に関する相談	10	27.8%
こころの悩みに関する相談	5	13.9%
介護予防・介護・認知症などに関する相談	1	2.8%
新型コロナウイルス感染症に関する相談	2	5.6%
子育てや妊娠などに関する相談	1	2.8%

(4) 相談者のアンケート結果

相談者へのアンケート結果を表 3 に示す。回答者は、相談者 27 人のうちアンケートの回答があったものは 13 人 (48.1%) と少数であった。

オンライン看護相談について知った理由は、インターネット検索が 7 人 (53.8%)、広報が 3 人 (23.1%) であり、インターネットの検索が最も多かった。昨年度、今年度と多様な機関にチラシの配布をしているものの、チラシの効果が少ない状況であった。オンラインの相談という性質上、インターネット上での啓発を強化していくことが必要であろう。今年度、スマートシティ神戸事業と協力し、スマートシティ神戸のサイトにも掲載していただいたが、そのような方策について今後検討したい。

オンライン相談を利用した動機は、「オンラインで気軽に相談できるから」12 人 (92.3%)、「匿名で相談できるから」が 9 人 (53.8%)、「看護大学が実施しているから信頼できるから」が「無料だから」が 7 人 (53.8%) であった。利用者は、オンラインで気軽に相談できるという利便性を感じていること、匿名性や無料であることが相談につながっているようである。看護大学が実施していることが理由になっている者も多く信頼が得られているといえよう。

相談により課題解決や示唆が得られたかについての問いは、できた、まあできたと回答したものが 12 名 (100%) であり、相談者のニーズにあった回答ができていると伺える。

表3 オンライン健康相談（看護相談）の相談者へのアンケート結果

		2021年度		2022年度		合計	
		人	%	人	%	人	%
性別							
男性		4	57.1	1	16.7	5	38.5
女性		3	42.9	5	83.3	8	61.5
年代							
30-39歳		2	28.6	0	0.0	2	15.4
40-49歳		2	28.6	1	16.7	3	23.1
50-59歳		3	42.9	2	33.3	5	38.5
60-69歳		0	0.0	1	16.7	1	7.7
70-79歳		0	0.0	0	0.0	0	0.0
80歳以上		0	0.0	1	16.7	1	7.7
居住区							
西区		4	57.1	4	66.7	8	61.5
中央区		1	14.3	0	0.0	1	7.7
兵庫区		2	28.6	0	0.0	2	15.4
東灘区		0	0.0	1	16.7	1	7.7
長田区		0	0.0	1	16.7	1	7.7
オンライン看護相談を、どこで知ったか							
1.インターネットの検索		3	42.9	4	66.7	7	53.8
2.広報		2	28.6	1	16.7	3	23.1
3.チラシ		0	0.0	0	0.0	0	0.0
4.人から聞いた		1	14.3	1	16.7	2	15.4
5.その他*		1	14.3	0	0.0	1	7.7
オンライン看護相談に相談した動機（複数回答）							
1.看護大学が実施しているから信頼できるから		4	57.1	3	50.0	7	53.8
2.オンラインで気軽に相談できるから		7	100.0	5	83.3	12	92.3
3.匿名で相談ができるから		5	71.4	4	66.7	9	69.2
4.他に相談できるところがなかったから		0	0.0	2	33.3	2	15.4
5.無料だから		5	71.4	2	33.3	7	53.8
6.その他		0	0.0	0	0.0	0	0.0
オンライン看護相談により課題解決や示唆の獲得							
1.できた		4	57.1	2	33.3	6	46.2
2.まあできた		2	28.6	4	66.7	6	46.2
3.どちらでもない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
4.あまりできなかった		0	0.0	0	0.0	0	0.0
5.できなかった		0	0.0	0	0.0	0	0.0
オンライン看護相談の回答者の対応							
1.よい		6	85.7	4	66.7	10	76.9
2.ややよい		1	14.3	2	33.3	3	23.1
3.どちらでもない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
4.やや悪い		0	0.0	0	0.0	0	0.0
5.悪い		0	0.0	0	0.0	0	0.0
オンライン看護相談を再度利用する可能性							
1.ある		6	85.7	5	83.3	11	84.6
2.少しある		1	14.3	1	16.7	2	15.4
3.どちらでもない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
4.あまりない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
5.ない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
オンライン看護相談を友人・同僚に勧める可能性							
1.ある		6	85.7	5	83.3	11	84.6
2.少しある		1	14.3	1	16.7	2	15.4
3.どちらでもない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
4.あまりない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
5.ない		0	0.0	0	0.0	0	0.0
オンライン看護相談の満足度（10段階）							
1-10段階							
	10	4	57.1	3	50.0	7	53.8
	9	1	14.3	1	16.7	2	15.4
	8	1	14.3	0	0.0	1	7.7
	7	1	14.3	2	33.3	3	23.1

オンライン看護相談の回答者の対応は、「よい」「ややよい」が 13 名(100%)、オンライン看護相談を再度利用する可能性が、「ある」「少しある」が 13 名(100%)、オンライン看護相談を友人・同僚に勧める可能性について、「ある」「少しある」が 13 名(100%)であった。また、1-10 段階で相談の満足状況を伺ったところ、7 人(53.8%)が 10 であり、非常に満足が高かった。

以上の結果より、オンライン看護相談を活用した者にとっては、回答の内容に満足をしていただけ、課題の解決などにつながっていた。

(5) オンライン健康(看護)相談啓発イベント (六甲アイランド)

1) 開催概要

日時：2023 年 1 月 31 日(火) 13:00~16:00

場所：六甲アイランド(RIC ふれあい会館)

企画・運営：神戸市企画調整局政策課と合同開催

目的：オンライン看護相談の広報を行い、利用を促進する

イベントの効果によって実績が伸びればさらなる普及活動を検討する

内容 第 1 部：講座(例：健康増進、体力増進に係るような内容)

第 2 部：①健康チェック(血圧・体組成・足趾力測定)個別相談会

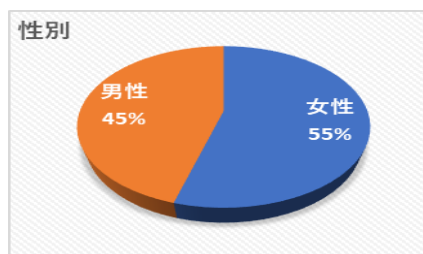
②オンライン看護相談個別操作説明会

参加者数：11 名(内 1 名は、オンライン看護相談個別操作説明会不参加) + 自治会役員 1 名

アンケート回答者：11 名

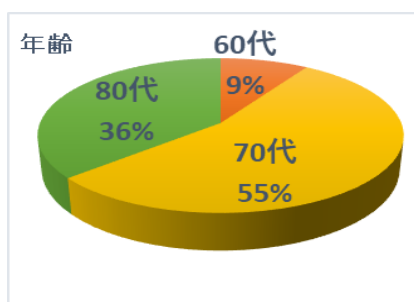
①性別

	n	%
女性	6	55.0
男性	5	45.0



②年齢

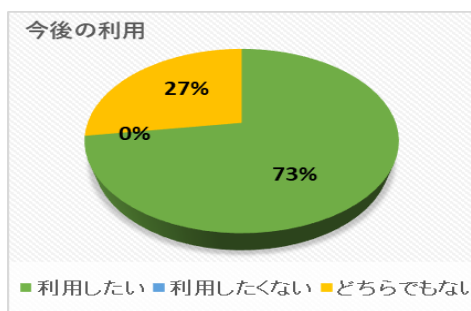
	n	%
60代	1	9.0
70代	6	55.0
80代	4	36.0



③オンライン健康相談について

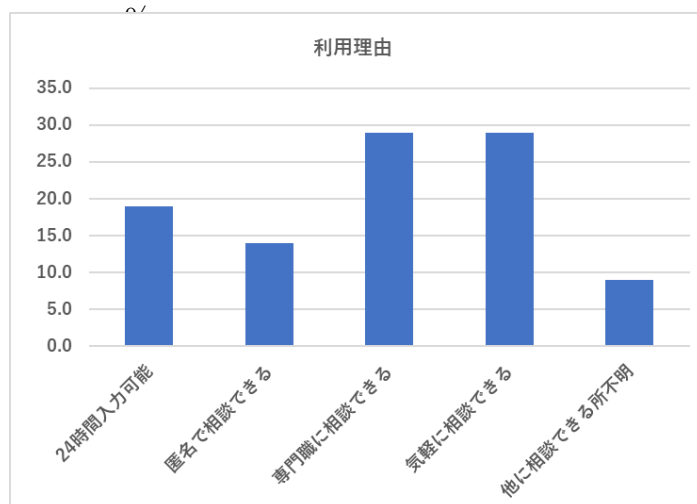
a. オンライン健康(看護)相談利用希望

	n	%
利用したい	8	73.0
利用したくない	0	0.0
どちらでもない	3	27.0



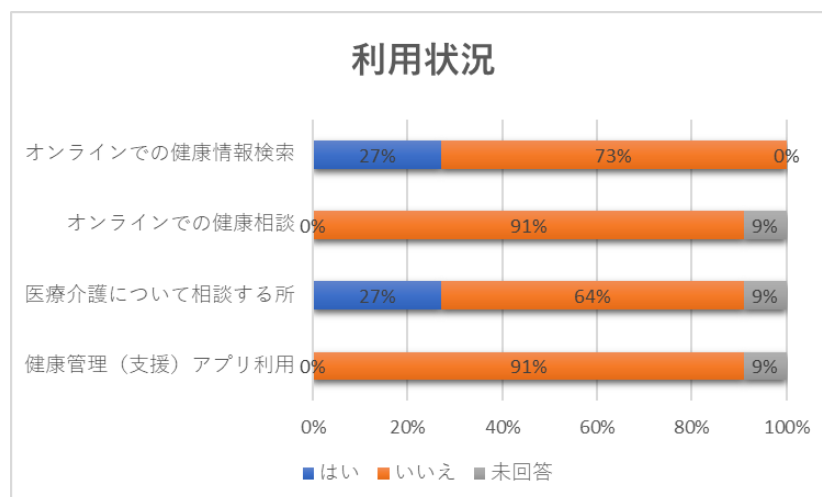
→「利用したい」と答えた方の理由（複数回答可）

	n	%
24時間いつでも相談入力可能	4	19.0
匿名で相談できる	3	14.0
専門職に相談できる	6	29.0
気軽に相談できる	6	29.0
他に相談できる所が不明	2	9.0



b.インターネットや相談の利用状況

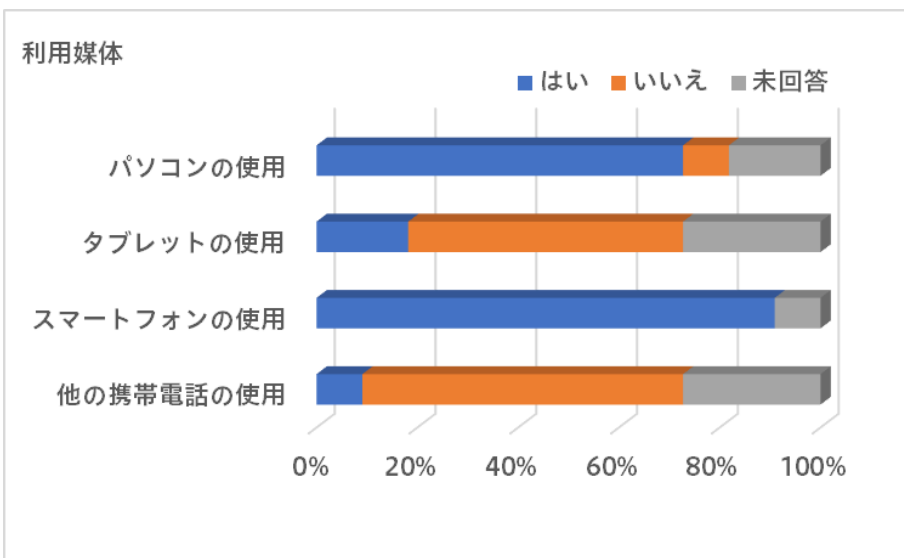
	はい		いいえ		未回答	
	n	%	n	%	n	%
オンラインでの健康情報検索	3	27.0	8	73.0	0	0.0
オンラインでの健康相談の経験	0	0.0	10	91.0	1	9.0
医療介護について相談する所があるか	3	27.0	7	64.0	1	9.0
健康管理(支援)アプリの利用	0	0.0	10	91.0	1	9.0



④日頃の生活で利用していること

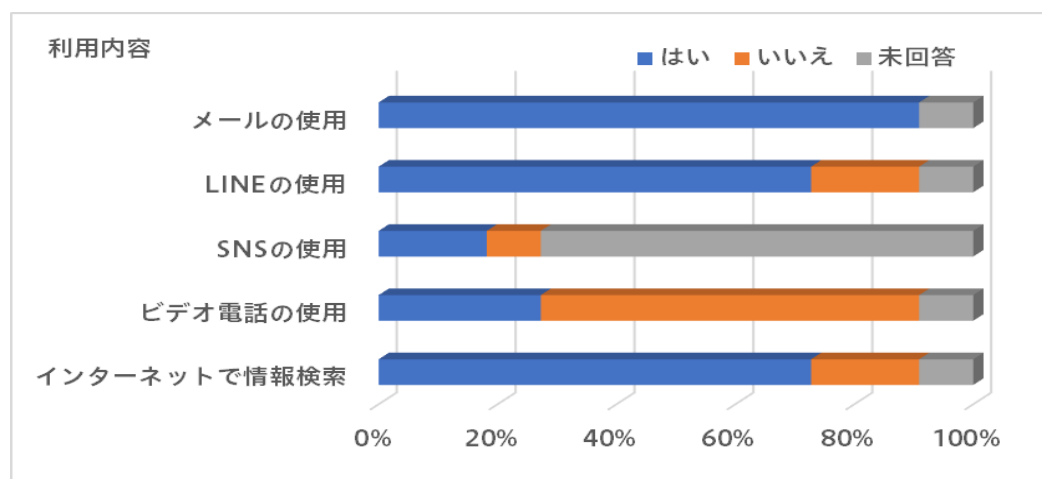
a.日頃利用している媒体

	はい		いいえ		未回答	
	n	%	n	%	n	%
パソコンの使用	8	73.0	1	9.0	2	18.0
タブレットの使用	2	18.0	6	55.0	3	27.0
スマートフォンの使用	10	91.0	0	0.0	1	9.0
スマートフォン以外の携帯電話の使用	1	9.0	7	64.0	3	27.0



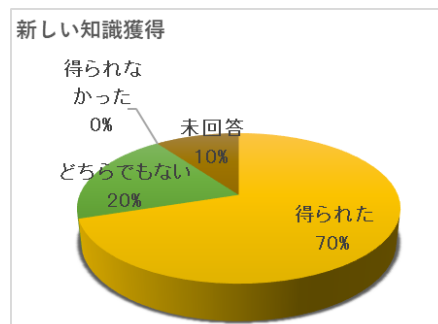
b.日頃利用していること

	はい		いいえ		未回答	
	n	%	n	%	n	%
メールの使用	10	91.0	0	0.0	1	9.0
LINEの使用	8	73.0	2	18.0	1	9.0
SNSの使用	2	18.0	1	9.0	8	73.0
ビデオ電話の使用	3	27.0	7	64.0	1	9.0
インターネットでの情報検索	8	73.0	2	18.0	1	9.0



⑤健康講座で新しい知識が得られたか

	n	%
得られた	7	70.0
どちらでもない	2	20.0
得られなかった	0	0.0
未回答	1	10.0

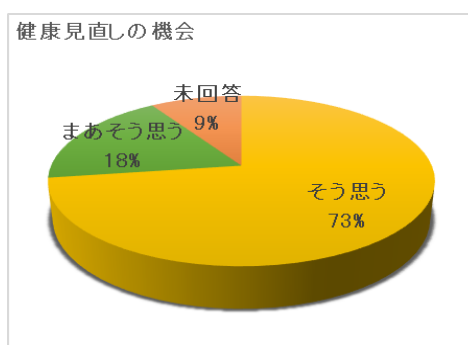


理由（自由記載）

- ・ レジスタンス運動とは、サルコペニア、レジリエンス運動とは等がわかった
- ・ 運動が必要、運動の大切さ
- ・ 健康維持でよく言われていることを改めて説明していただいた
- ・ 「よく言われていること」を日常自覚して生活するのが難しい

⑥体力測定・個別相談に参加して自身の健康を見直したり健康を増進する機会となったか

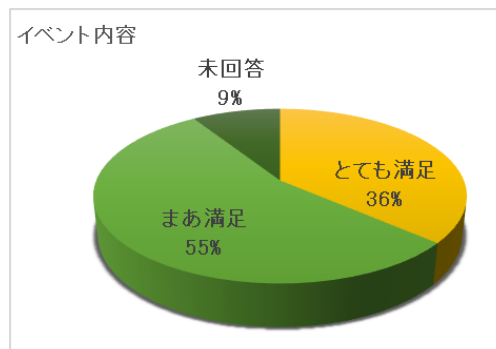
	n	%
そう思う	8	73.0
まあそう思う	2	18.0
どちらでもない	0	0.0
あまり思わない	0	0.0
思わない	0	0.0
未回答	1	9.0



⑦今回のイベントについて

a. 今回の内容はいかがでしたか？

	n	%
とても満足	4	36.0
まあ満足	6	55.0
少し不満	0	0.0
とても不満	0	0.0
未回答	1	9.0



理由（自由記載）

- ・ 新しい知識・気づきがあり、日頃の体操（ストレッチ）に取り入れたいと思いました。丁寧な説明をしていただきました。ありがとうございました。

b. 感想・意見（回答者 6 名）

- ・ 日頃の生活を見直すきっかけになりました。
専門職の方からのアドバイスは説得力があります。
相談窓口が登録できました。24 時間ご相談ができるのが心強いです。
- ・ 親切なご説明ありがとうございました。
足指力が弱いので強くする運動を教えてください、これからそれをしていきたい。
- ・ 専門教師のアドバイスがありがたかった。
日常の生活維持の参考になりました。ID 登録しました。
- ・ 内容がわかりやすかった。
- ・ 自分の体調について詳しく見ていただいた。
- ・ インターネットの HP で、今日ガイドいただいた内容が簡単に見られるようになれば、必要なときにリマインドできると思います。

（6）まとめと今後の展望

2021 年 12 月から 2023 年 3 月まで、オンライン看護相談を実施した。相談者が合計で 37 名と予想に反する少なさであった。多様な機関でのチラシの配布、広報、スマートシティ神戸の PR、対面でのイベントの実施と使い方の説明など、住民への啓発を工夫して行ったが、今年度の相談者の伸びは少なかった。対面で行ったオンライン看護相談の使用方法的説明時には、スマートフォンを用いた相談を行った場合、アプリでの使用がよいという意見もあり、オンライン看護相談のシステムを簡便に改善することの必要性があると考えられる。また、チラシなどの紙媒体での啓発よりも、インターネットを活用した啓発の方が効果的であることが考えられる。次年度は、啓発方法を検討し、今後、強化していきたい。

オンライン看護相談の利用者については、非常に高い満足感が得られていると考えられる。一度相談をされた方は、何度も相談を繰り返される方も複数おられ、健康に関するちょっとした悩みを気軽に相談できる場として活用していただいているようである。

オンラインの相談の場の意義としては、市民がちょっとした健康の疑問を相談し早期の受診に繋がっていること、あるいは疑問を相談し回答により解決している場合もある。また医療を既に受けているがそれを補佐する情報を得たいと思い相談している場合もある。いずれにしても、市民の健康の保持増進や、疾病の早期発見などに繋がっていると考えられる。

オンライン相談の場としての有効性は高いものの、課題としては、相談数の少なさである。ターゲットとする層は、40-60 歳代と考えられ、その年代にアクセスできる方法を検討していきたい。また、匿名で無料、オンラインで活用できる本相談は、医療や保健へのアクセスが難しい層（例えば、無職者、自営業者、フリーターなど）が、相談しやすい場ともいえると考えられる。そのような方々へオンライン看護相談に関する情報が行き届く方策を検討していきたい。

今後のオンライン看護相談の発展としては、市民がより簡易に相談ができる場として、周知していくこと、さらに、オンライン看護相談の相談者として、本学の大学院生(看護師免許を取得している)などの学習の機会として活用していくことを検討していきたい。

3. 慢性疾患重症化予防オンラインナーシング班メンバー

リーダー 水川真理子

メンバー 片倉直子、谷知子、石橋信江、磯濱亜矢子、畑中あかね、宮島朝子、勝田玲子

4. 慢性疾患重症化予防オンラインナーシングの実績

健康支援グループのオンライン慢性疾患重症化予防班の医師、看護教員は、医療機関と連携し、コロナ禍で通院を控える傾向のある心不全患者など重症化リスクの高い慢性疾患患者を対象として、看護師がオンラインで患者の血圧・脈拍などの健康状態を把握し、異常の早期発見、必要時に健康指導などを行うことで、重症化予防につながるプログラムの開発と展開を行っている。本取り組みにより、慢性疾患患者の重症化予防に向けた「オンライン看護」のモデルが構築されることを目指している。本取り組みは、神戸市の委託事業（「コロナ禍を契機とした健康問題の増加への先行的対策事業」）の中の慢性疾患患者の重症化予防に向けた「オンライン看護」のモデル構築事業として展開を行っている。

（1）オンライン慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの概要

慢性心不全や糖尿病など重症化リスクの高い慢性疾患を有し、神戸市内の医療機関に通院中の方を対象として、遠隔モニタリングで看護大学の医療職者が対象者の血圧・脈拍などの健康状態を把握し異常時に状態確認を行う。必要に応じて主治医に報告し早期受診につなげ、オンラインで生活上の指導を実施して慢性疾患患者の重症化を予防する(図1)。介入期間6ヶ月とフォローアップ6ヶ月の12ヶ月のプログラムである(図2)。

ICTを活用した慢性疾患重症化予防疾病管理プログラム

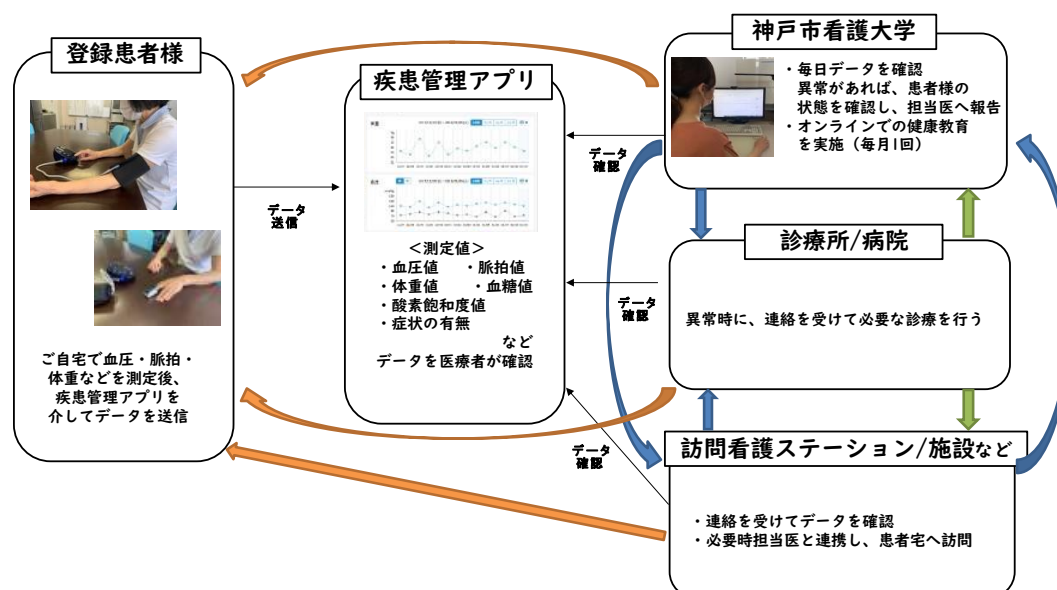


図1. ICTを活用した慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの概要

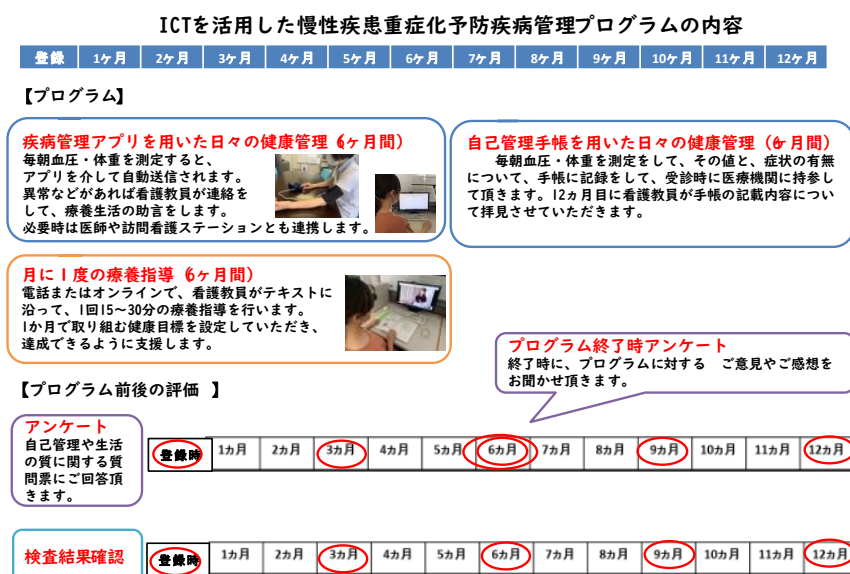


図 2. ICT を活用した慢性疾患重症化予防疾病管理プログラムの内容

（2）活動経過とリクルート状況

2022 年 4 月より、プログラム協力医療機関の募集、説明会を行い、現在 2 つの診療所と 2 つ訪問看護ステーションより協力が得られている。7 月から患者リクルートを開始し、医療機関より、慢性心不全の重症化予防プログラムの適格基準を満たす対象者を 10 名紹介頂き、2023 年 3 月末までに慢性心不全患者 7 名より参加同意が得られた。その内 1 名が参加を辞退されたため、6 名がプログラムを継続している。

（3）プログラム参加者背景

プログラム参加者の平均年齢は 84.5±4.5 歳で、男性 4 名、女性 2 名で、心不全の基礎疾患としては、心臓弁膜症 2 名、心房細動 2 名、心筋梗塞 1 名、高血圧 1 名である。高齢者で多疾患を有する方が多くを占めている。要介護認定は 4 名が受けており、区分は要支援 2 が 2 名、要介護 2 が 2 名であった。また、プログラム導入時に 2 名が訪問看護を受けており、プログラムの途中で 1 名の訪問看護が開始された。

（4）プログラムにおけるオンライン看護実践と多職種連携の実際

2023 年 3 月末までに、3 名が 6 ヶ月の疾病管理アプリを用いたモニタリング期間を終えている。プログラム登録時に、病歴とともに生活背景などの聞き取りを行って状態をアセスメントし、個別の看護計画を立案している。また、ガイドラインに基づいて作成した心不全重症化予防教育パンフレットを用いたオンラインでの面談・教育を毎月 1 回 6 ヶ月間実施した。希望者には、ご本人と一緒に家族も同席をされた。オンライン教育時には、参加者とともに 1 ヶ月で実践する療養行動の目標を設定している。

6 ヶ月間のモニタリング期間中、データの未送信や逸脱のために、看護大学担当者から 3 名の参加者に電話連絡をして状態確認を行ったのは計 27 回であった（表 1）。その理由

としては、測定値の異常、体重の増加や減少、血圧高値、頻脈、酸素飽和度低値などであった。データ異常時には状態確認後、表 2 に示す療養指導等を必要に応じて行った。そして、状況に応じて主治医のほか訪問看護師などの多職種と連携を行った。連携回数を表 3 に示す。

表 1 データ逸脱時の架電（状態確認）理由

架電（状態確認）理由	回数
測定値異常（逸脱）時	
体重増加	7
体重減少	2
血圧高値	5
頻脈	1
SpO2低値	3
1日の振り返り（症状・服薬）データ異常時	
安静時息切れ+/浮腫等	8
内服薬未服用	1

表 2 データ異常時の介入内容

データ異常発見時の介入内容 （体重増加・血圧高値・頻脈・SpO2低値・安静時息切れ）	
・状態確認（安静時息切れ/浮腫等）	12
・節酒指導	13
・減塩指導	7
・バランスのとれた食事	2
・悪化徴候について指導	2
・服薬指導	9
・HOT装着促し	1
・喘息発作時の吸入器使用方法	1
・ASV装着方法・時間	1
・呼吸リハビリテーション/筋トレ	2
延べ回数	45

表 3 多職種との連携回数

多職種連携	回数
医師	11
看護師	3
訪問看護師	2
ケアマネジャー	1

参加者からのデータ送信方法について、高齢独居者からの問い合わせが多く、データの未送信時への対応は延べ 30 回行った（表 4）。また、状態の変化による参加者からの相談は 21 回あった。相談に対する介入は延べ 28 回行っており、その内訳を表 5 に示す。

表 4 データ入力・送信・通信エラーに関する
操作サポート内容の内訳

データ入力・送信・通信エラー	
通信エラー	3
YaDocお知らせ表示確認・不明	2
Wi-Fi接続方法不明	9
ログイン方法不明/PW不明	5
YaDocアプリアップデート方法不明	1
誤入力	6
血圧入力方法不明	2
1日の振り返り入力不可	1
QRコード読み取り不可	1
実数/延べ回数	22/30

表 5 相談に対する介入内容の内訳

患者からの相談・報告に対する介入内容	
転倒	
・医師へ報告	1
・状態確認/創傷確認/処置助言	6
・転倒予防教育/訪問リハビリ導入の必要性助言	2
内服薬紛失	
・医師へ報告	1
・モニタリング1日2回	3
施設（サ高住）入所	
・訪問看護の導入の検討	1
・介護サービス/ヘルパー利用の薦め	2
認知機能低下（もの忘れ、日付間違い）	
・受診日程の確認/カレンダー記載	1
歩行時ふらつき	
・リハビリ・杖使用促す	1
受診困難（付き添い必要）	
・安全な受診手段の提案	5
手首の違和感（前にいかない）	
・整形受診時相談を促す	2
下肢浮腫・水泡形成	
・対処法指導	1
熱傷	
・状態確認	2
延べ回数	28

（５）プログラムの効果

慢性心不全プログラム参加者のうち、3 名が 6 ヶ月のモニタリング期間を終了している。3 名とも心不全の増悪はみられず、心不全の重症化と再入院の予防ができています。モニタリング期間継続中の 3 名の参加者についても同様に心不全の増悪はみられていない。オンラインで身体の状態（浮腫や息切れの有無）を確認することができ、電話では難しかったフィジカルアセスメントが可能となった。虚弱高齢者には、病状の進行、認知機能低下、転倒などの問題について、適宜多職種と連携し、訪問看護の導入やケアプランの変更につなげることができた。また、月に 1 回のオンラインでの患者教育では日頃は通院に同行できない家族でも同席を希望される方が多い。病状や生活上の困りごとを共有することで対処法を共に考えることができる利点もみられている。

（６）参加者と医師の満足度調査結果

プログラム参加者への満足度アンケートから、プログラム参加の感想として「大変良かった」「大変役にたった」「見守られている安心感がある」「担当看護師はモニタリングを通じて自分の身体の状態や問題をよく理解している」「将来的に医療の中にとりいれられると良い」との回答がみられた。また、主治医のアンケートからは、本プログラムが「日頃の診療や看護の役に立った、診療に際し時間や費用の節約になる」「心不全を悪化させないための日常生活管理に必要である」「患者に大変利益があった」との回答がみられた。

（７）今後の課題

オンラインでの看護を実践する利点が多くある一方で、独居高齢者については、初期の機器設定や操作説明、データ送信練習、通信エラーが生じた際の支援に時間を要するという課題がみられた。来年度は、今年度プログラム導入を行った 6 名の心不全患者へのフォローアップの他にも、リクルートを継続し、対象者の特性および得られた効果について検証を継続する予定である。

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

1. グループ概要

在宅ケア支援グループは、在宅サービス提供者への支援を目指して活動しており、2021 から 2022 年度まで神戸市健康局の委託事業を中心に行ってきた。神戸市の委託は、当初 ①兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による、感染症防止対策や、患者や家族へのケアを提供する体制づくりに関する研修の実施及びマニュアル・教育動画の作成、②多職種連携会議や事例検討会の開催支援、③医療介護従事者を対象とする個別相談窓口の開設となっていた。その後、神戸市と協議を重ねた結果、2021 年度の事業として、①訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による研修事業、②オンラインを使用した多職種による退院時協働指導モデルの検討、③COVID-19 禍における神戸市訪問看護事業所調査を実施することになった。

2022 年度は、継続の必要性がある 2 研修と、2021 年度調査の結果にもとづき必要が生じた 1 研修を、神戸市内訪問看護事業所または在宅療養を支援する事業所へ提供した。また、2021 年度にひきつづき、オンラインを使用した多職種による退院時協働指導モデルの提供を行った。

ここでは、「研修 3 事業」および「オンラインを使用した多職種による退院時協働指導モデル」の業務報告をする。

2. グループメンバー

リーダー 片倉直子

メンバー 船越明子、片山修、小山富美子、丸尾智実、宇多みどり、水川真理子
大瓦直子、富田春奈(2022 年 8 月末まで)、勝田玲子(2023 年 1 月から)

3. 研修事業

(1) 外国人の在宅療養サービス利用と意思決定支援を学ぶ

在宅看護学分野 片倉 直子

1) 背景

2019 年の全国訪問看護事業協会の調査で、利用者のみならず介護者が外国人利用者の訪問看護に関わった事業所は全国で 43.2%であった。2021 年度神戸市訪問看護ステーション調査では、利用者のみならず介護者が外国人利用者の訪問看護に関わったことがある事業所は 51.0%となっている。そのうちの 7 割はコミュニケーションの困難を抱えていることがわかり、国際都市神戸の特徴が表れている。外国人利用者への訪問看護や地域包括ケアシステムにおける意思決定支援など、様々な課題があると考えられるが、その点についてはあまり議論されてこなかった。

2) 事業内容・経過

外国人の在宅療養時の価値観にそったサービス提供やケアをしていくための意思決定の支援方法を学ぶ機会として、本研修を企画した。この度、NPO 法人神戸定住外国人支援センター（Kobe Foreigners Friendship Center、以下 KFC）が、外国人利用者への在宅ケアを提供していることがわかったため、講師を依頼し、その事例と課題、保健福祉医療専門職に必要な意思決定の支援方法を学ぶ機会とした。

研修対象者は、神戸市内訪問看護事業所、居宅介護支援事業所、医療介護サポートセンターに参加している事業所、病院退院支援部署等の保健医療福祉専門職とした。

日時、方法、講師と講演内容概要は以下の通りである。

日時：2023 年 1 月 9 日（月・祝）13 時 00 分～17 時 00 分

方法：ZOOM によるリアルタイムのオンライン研修

講師：

- ① KFC 居宅介護支援事業所ハナ介護サービスゼネラルマネジャー（ケアマネジャー）呼(フ)和徳力(フデルゲ)根(ル)氏

外国人の在宅ケア時のケアマネジメントの経験や利用者との接し方の工夫、保健医療福祉専門職が知っておくべき外国人が利用できる社会資源について講演した。神戸市には、意思疎通が困難な定住外国人が介護保険サービスを利用する際にサポートする、「コミュニケーション・サポート」事業を行っている。要介護認定やケアプラン作成時のコミュニケーション・サポーター派遣や養成研修を行っているが、現行の研修は介護保険制度の説明にとどまっており、在宅療養者とのコミュニケーション方法等には触れていない。また、定住外国人のケアマネジメントを依頼される時に、習慣の違いを認知症状として認識されていたり、国籍を本人に確認せずに依頼されたりする事例などを紹介した。

- ② 訪問看護ステーションはれ管理者、KFC 理事 中根香代子氏

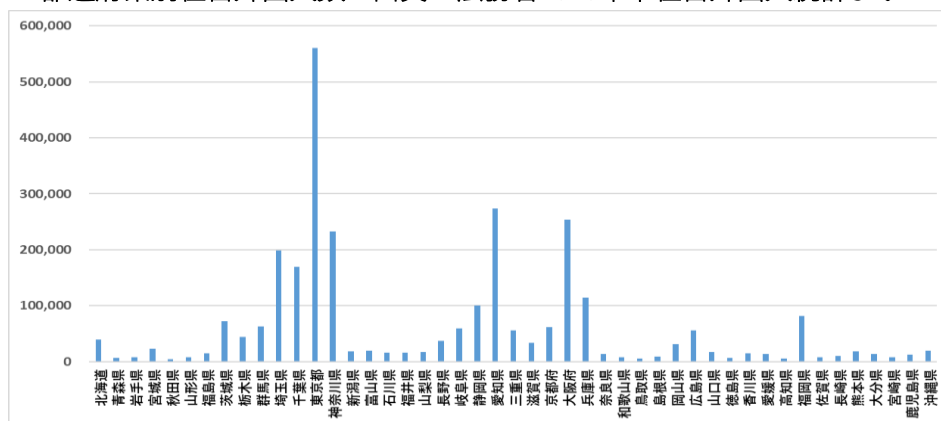
KFC 関連の外国人への訪問看護の事例について、在宅療養の意思決定支援を含めて講演

した。介護保険制度そのものが複雑で理解が難しい事、契約時に署名をする習慣がなく戸惑われることがあることなどを紹介した。また、課題として定住外国人が増えている状況からすれば、各行政区でもっと対応が図られる必要性を述べていた。介護保険制度や医療だけではなく、地域のコミュニティの中で、外国人への声掛けが増え、地域ぐるみの付き合いが増え、在日外国人も気軽に相談できる、開かれた地域作りを求めている。定住外国人には生活保護受給者の利用者が多いので、貧困によるモラルの貧しさも感じることがある。また、いろんな情報から取り残されている場合も多い。

③ 神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科 相原洋子氏

KFC と訪問看護ステーションはれに関わり、定住外国人高齢者のヘルスリテラシー支援のための地域包括ケアモデルの構築について研究している（在留外国人高齢者の在宅療養と看取り事例集等を作成）。異文化の在宅療養者へのケアや、終末期の意思決定支援について講演した。定住外国人数が、都道府県別では東京都等の関東の方が関西よりも多いが、高齢者割合は近畿圏の方が多く、兵庫県は約 16%であることを説明した（図 1）。したがって、定住外国人が要介護状態になる割合が多いと言え、保健医療福祉現場でもその対応が求められる。人々の多様な価値観や文化的感受性を高めていく必要性を述べていた。

都道府県別在留外国人数 出典：法務省2020年末在留外国人統計より



都道府県別在留外国人高齢者割合 出典：法務省2020年末在留外国人統計より

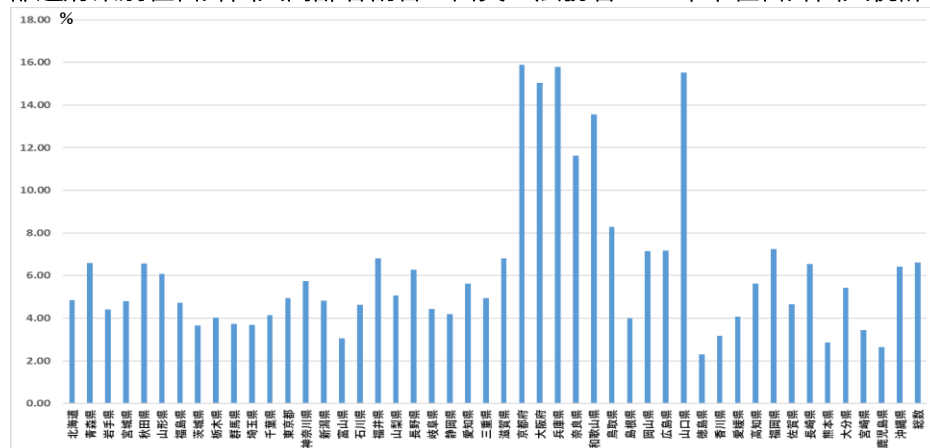


図 1 都道府県別定住外国人数と高齢者割合（出典を執筆者が図示）

3) 業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

本研修は、神戸市内居宅介護支援事業所、地域包括ケアセンター、医療介護サポートセンター、訪問看護ステーション等、保健医療福祉関係者を対象として参加を募集した。事前参加申し込み数は35施設で、当日の参加人数は19施設32名であった。

事前参加申込施設の在籍区は、「西区」「東灘区」が最も多く7件（20%）、次いで「北区」が6件（17%）であった（図2）。所属している事業所種類・職種は「地域包括支援センター」が最も多く7件（17%）、ついで「訪問看護」が6件（15%）、「居宅介護支援事業所」「大学教職員」が5件（12%）、「医療介護サポートセンター」「学生・大学院生」が4件（10%）であった。

アンケート回答者は14名（回収率43%）であった。

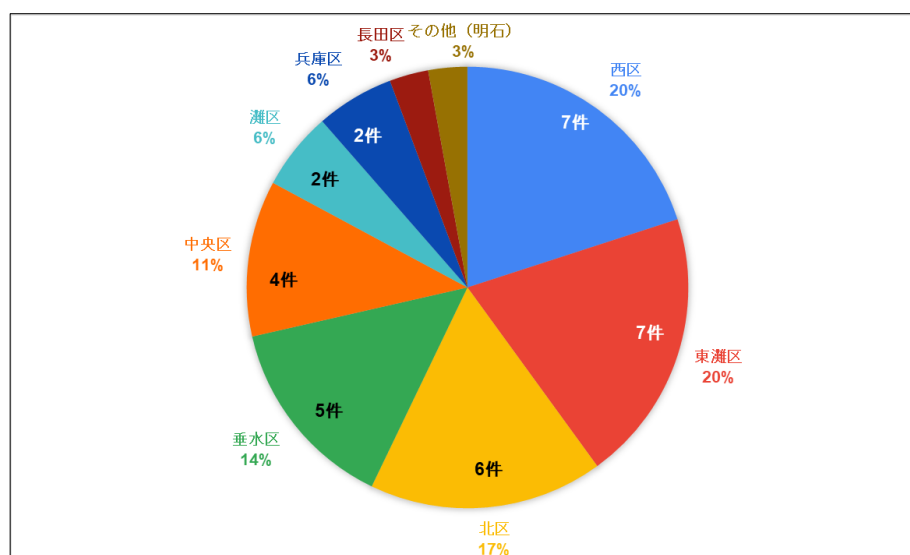


図2 事前参加申込事業所の在籍区

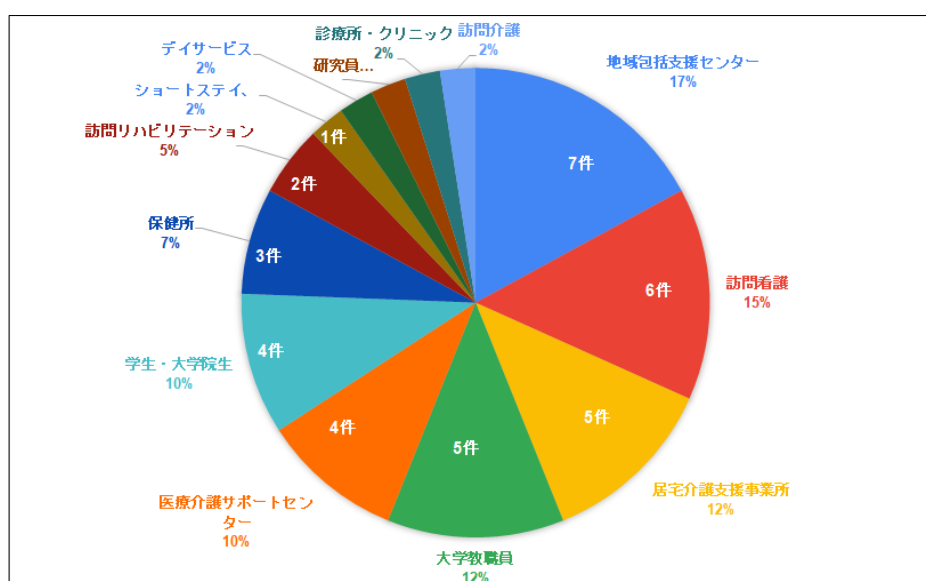


図3 所属している事業所種類・職種（複数回答）

②参加理由・参加後の意見や感想

参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く 12 人（86%）、ついで「講師に関心があったから」が 8 人（57%）、「オンライン開催であったから」が 7 人（40%）だった（図 4）。回答率が高くはなかったが、研修のテーマには高い関心があった参加者が多かったことがうかがえた。

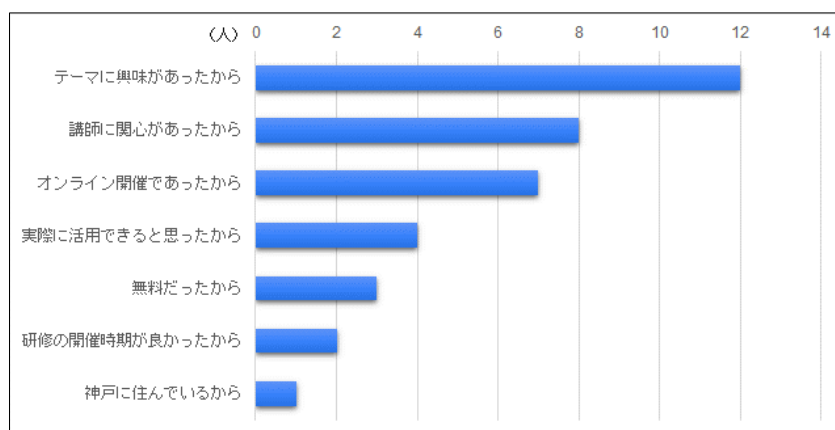


図 4 研修の参加理由（複数回答）

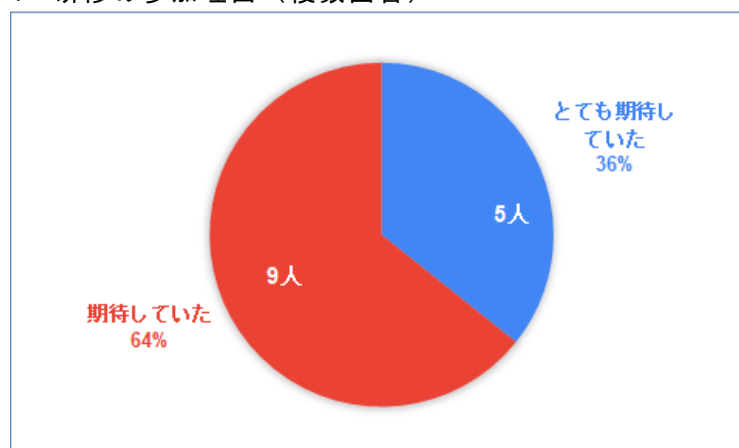


図 5 研修前の期待度

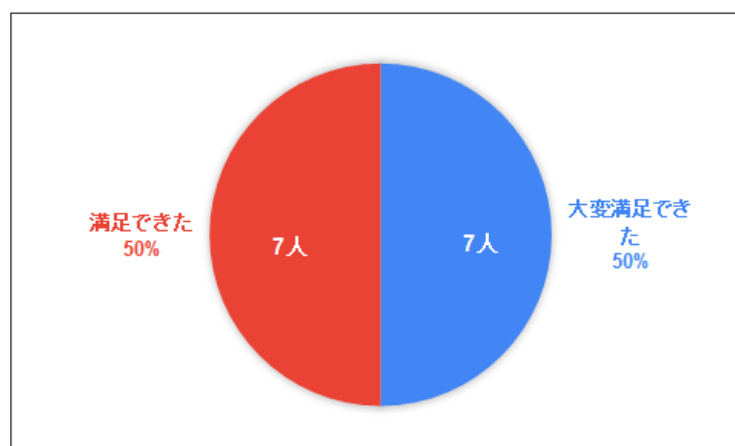


図 6 研修後の満足度

研修前の期待度は、「とても期待していた」が5人(36%)、「期待していた」が9人(64%)であった(図5)。研修後の満足度は「大変満足できた」「満足できた」がそれぞれ7人(50%)で、「あまり満足できなかった」「満足できなかった」の回答はなかった(図6)。また、各施設における研修の役立ち度について、「大変参考になる」が5人(36%)、「参考になる」が9人(64%)で、「あまり参考にならなかった」「まったく参考にならなかった」の回答はなかった(図7)。したがって、研修への期待をある程度満足させる、参考になる研修内容であったと推測できる。

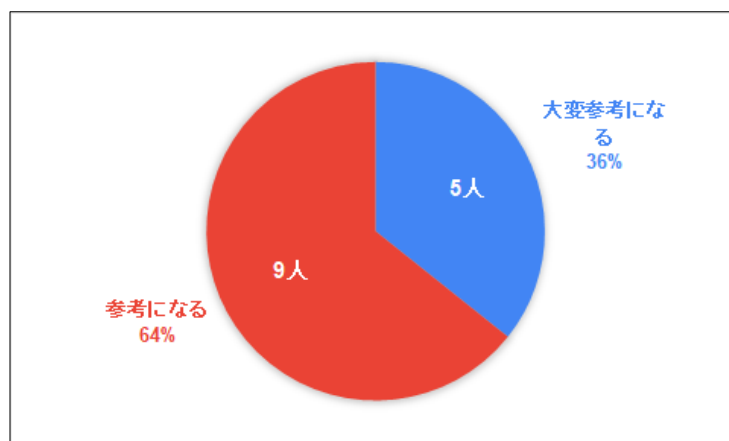


図7 研修の役立ち度

③今後の本学への要望

「外国人に対する支援を知る機会、学ぶ機会」「定住外国人高齢者支援の事例検討会」「外国人が外来受診の際に必要な配慮に関する研修」等の要望が寄せられた。

4) 来年度の展望

居宅介護支援事業所423件、地域包括支援センター76件、訪問看護ステーション249件に本研修の案内を郵送したが、申し込みは35件と少なかった。研修日が成人の日に重なった等の理由もあると推測する。しかし、研修後の参加者の自由記載をみると、もともと定住外国人への在宅ケアにかかわった経験があるか、関心を寄せている人が参加しているように読み取れた。したがって、近畿圏では定住外国人の高齢化が進んでいることについて、この圏内の在宅ケアを提供する事業所へ周知を図り、研修を継続させていく必要があると考えられた。

（２）訪問看護における「臨床判断能力」を育むためのシミュレーション教育

＜応用編＞

在宅看護学分野 宇多みどり

１）背景

急速な高齢化をたどる現代、在宅医療体制の充足が急務とされており、中でも訪問看護師の量的・質的確保は喫緊の課題である。昨今、臨床経験のない新卒看護師を訪問看護の場で教育・育成する研修やしくみが開発され、僅かではあるが神戸市内においても新卒採用を行っている事業所もある。しかし、小事業所での新人訪問看護師への現任教育は十分とは言えない。

2021 年度は、新卒看護師や訪問看護実践が初めての新採用者、指導的な立場にある訪問看護師に対して、「臨床判断モデル」の基礎知識と活用方法についての研修を行った。結果、アンケートの回答者すべての方が「大変満足できた」または「満足できた」と回答し、7 割の方が「テーマに興味があった」と回答、8 割以上の方が同研修（大学での対面方式）の開催があれば 8 割以上が参加したいという好評を得た。

そこで、本年度は、対面での演習を組み入れた実践編を企画した。なお、シミュレーション教育においては、スマートインフィルによる居宅を再現した空間で高機能ハイブリッドシミュレータを活用し体験や経験を振り返る演習を実施した。

２）事業内容・経過

今回は、訪問事例を通して「臨床判断モデル」を活用した看護実践を考えることができることを目的として、演習を実施した。具体的には、臨床判断モデルの 5 つの構成要素が分かる（復習）こと、「臨床判断モデル」を使った看護実践（振り返り）がイメージできること、そして、明日からの訪問看護実践で活用したいと思えることを到達目標とした。

演習内容は、臨床判断モデル（Tanner、2006）の 4 つの構成要素の特徴のミニレクチャーに加え、特に訪問看護でこれらの影響を受けるコンテキスト・背景・関係性について訪問看護の事例を通して説明した。その後、実践能力向上のためのシミュレーション教育の流れやグラドルール説明を行い、高血圧・人工肛門造設している高齢女性の訪問事例とⅡ型糖尿病の方の緊急訪問の事例のシミュレーションを実施した。シミュレーションは、2～3 人の小グループによる参加型演習で、訪問事例から知識を共有し、看護を実践し、「気づき」「解釈」「反応」「省察」の視点からの振り返りを体験した。グループワーク後に、全体で振り返りを共有した。最後に、普段からの「訪問場面の思考発話」と「振り返り」を意識的に行うことや経験の浅い訪問看護師と指導的な立場にある訪問看護師の双方が「気づき」を促すための「発問」方法を紹介した。

日時と演習担当は、以下の通りである。

日 時： 2023 年 3 月 4 日（土）14 時 00 分～16 時 00 分

ファシリテーター：宇多みどり（神戸市看護大学在宅看護学分野）

演習担当：丸尾智実（同大学在宅看護学分野） 小山富美子（同大学慢性病看護学分野）
稲垣 聡（同大学基礎看護学分野） 勝田玲子（いちかんダイバーシティ看護開発センター）

方 法：神戸市看護大学北館 2 階の成人老年実習室におけるスマートインフィルと高機能ハイブリッドシミュレータを活用したシミュレーション教育を実施した。

3）業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

事前参加申込人数 15 名のうち、当日の参加人数は 10 名であった。研修後に実施したアンケートへの回答数は 8 名、回収率は 80%であった。回答者の「訪問看護ステーションでの勤務経験年数は 1 年未満」が 62%、「3 年以上」が 25%、「1 年以上 3 年未満」が 13%であった（図 1）。また、職場での立場は「指導的な立場でない」方が 88%で、「指導的な立場でない」方が 0%、「どちらでもない」方が 12%であった。

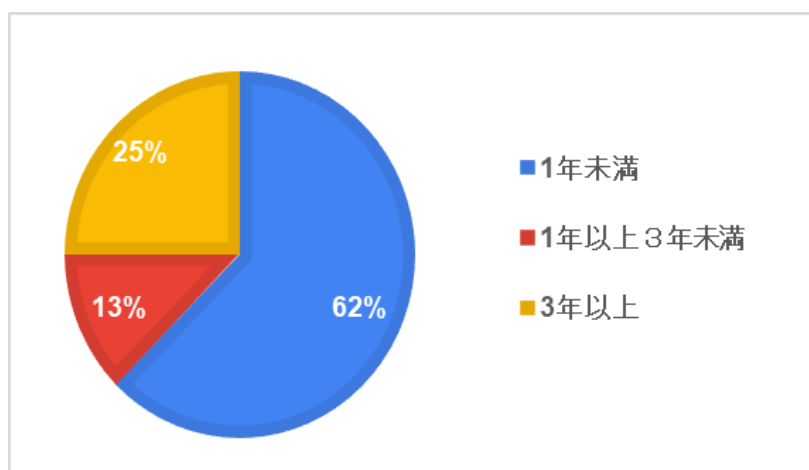


図 1 訪問看護ステーションでの勤務経験年数（回答者 8 名）

②参加理由・参加後の意見や感想

研修開催を知った理由は、「送付チラシ」75%、「管理者からの勧め」25%であった。参加理由は「実際に活用できると思った」75%、「テーマに興味があった」50%、「上司や同僚・教員の勧めがあった」37.5%であった（図 2）。

研修内容の満足度では、研修前の「とても期待していた」25%、「期待していた」62.5%が、研修後「大変満足できた」50%、「満足できた」50%と満足度の高い結果であった（図 3・4）。その理由として、「実践的な内容で現場で活かせる研修だった」や「自信のない急変時の対応を実際に教えた頂き勉強になった」こと等が自由記載に挙げられていた。また、シミュレーション演習においては、「ちょっと抵抗があったが利用者さん側も反応してくれる形式でやりやすそうでした」や「症例に基づいて少人数でシミュレーションできた」、

「実際にシミュレーションして細かく振り返れた点良かった」と好評であった。終了後には、参加者がお互いに連絡先を交換したり、大学で開催される訪問看護についての研修の問合せ方法を確認する等の交流の場となった。

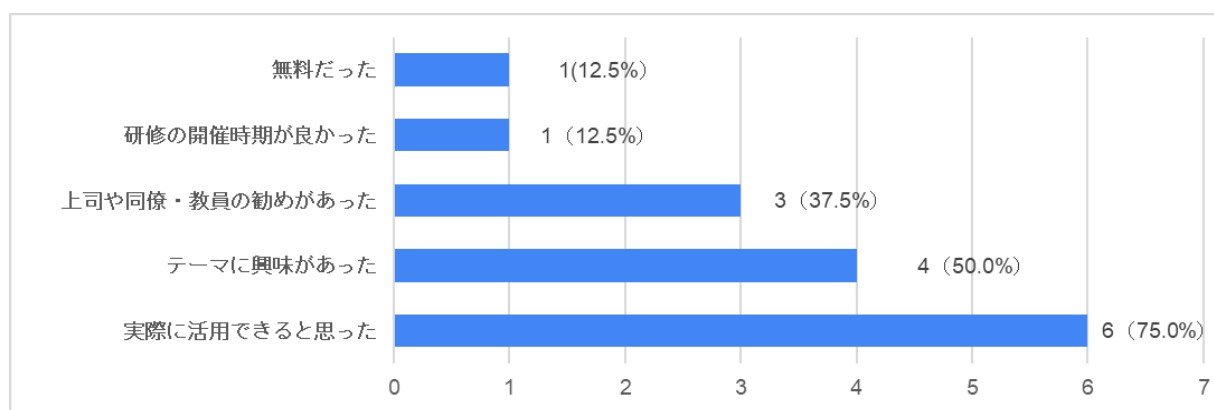


図2 研修の参加理由

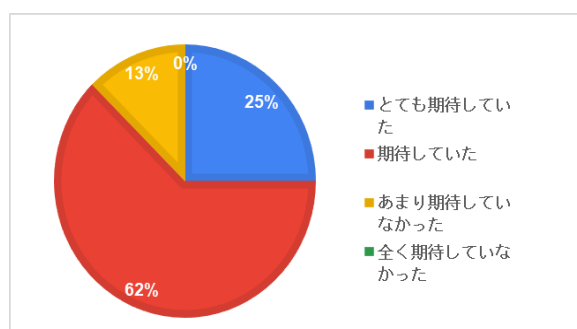


図3 研修内容への期待

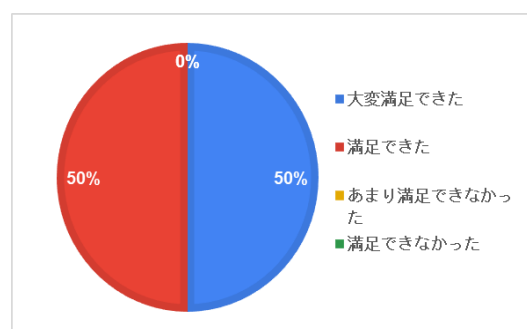


図4 研修内容の満足度

③今後の要望

今後の大学への要望について、「在宅内での急変を知りたい」や「他の訪問看護ステーションの方の体験談を是非お聞きしたい」など、いろいろな実際の事例を知り振り返ることが看護の学び直しとなり「面白い」という意見が寄せられた。今回と「同様の臨床判断モデルを活用したシミュレーション演習にも参加したい」や「訪問看護に役立つ研修があれば参加したい」という意見もあった。

4) 来年度の展望

訪問看護における「臨床判断能力」を育むためのシミュレーション教育に関する研修ニーズが高く、特に実際の事例を活用しながら実践的な研修の実施が必要と考えた。臨床経験の浅い訪問看護師が体験した事例を客観的に振り返る場や実践的な技術習得の場の提供について将来的に検討する必要がある。

(3) KOBE 訪問看護ステーション BCP 作成フォローアップ研修

在宅看護学分野 片倉 直子

1) 背景

2021 年度介護報酬改定では、第一の柱に感染症や災害への対応力強化を掲げていた。介護サービス事業者の事業継続計画（BCP）策定率はかなり低く、内閣府（2020 年）の「令和元年度企業の事業継続及び防災の取組に関する実態調査」によると、医療・福祉関係の BCP 策定率は 22.2%と、企業等他の事業を含む全体の 41.8%と比べてかなり低くなっている。このため、介護報酬改定では非常時への対応力強化として、以下の事項が決定されている。

- ・感染症対策の強化
- ・業務継続に向けた取組みの強化
- ・災害への地域と連携した対応の強化
- ・通所介護等の事業所規模別の報酬等に関する対応

2) 事業内容・経過

BCP は、住宅状況や自然などの地域性や社会資源、訪問看護ステーションの規模などの状況によっても、リソース不足を加味した作成過程や内容が異なってくると考えられる。2022 年度は 2021 年度に本学研修を受けた訪問看護師が、作成した（あるいは作成過程にある）BCP を近隣地域の訪問看護ステーションへ情報提供し、地域特性などを加味した BCP 作成や、BCP 作成過程における工夫に関する理解を深め、2023 年度末の BCP 完成を目指した。なお、2022 年度は、近隣地域の訪問看護ステーションへ情報提供を目指すので、神戸市内訪問看護ステーションを対象に研修を企画した。

日時と講師は下記のとおりである。

日時：2022 年 9 月 3 日（土）14 時～17 時

講師：・愛のき訪問看護ステーション（灘区）代表取締役 奥河典子氏

・訪問看護・リハビリステーションわたぼうし WEST(西区) 管理者 皆川美穂氏

研修方法：ZOOM によるオンラインライブ研修。ブレイクアウトルーム等を使用し、研修参加者が発表する等の技術を用いた。

研修内容：講師のそれぞれ、昨年度の研修を参考にして、どのように BCP を作成したか（作成しているか）を 45 分ずつ講演した。

愛のき訪問看護ステーションでは、2022 年 5 月より BCP のプロジェクトチームを編成して、週 1 回のペースで BCP について話し合いを進めている。訪問看護・居宅介護支援事業所が同一建物、通所デイサービスが別場所になっており、BCP に対し各事業所から 1 名ずつ参加している。

訪問看護・リハビリステーションわたぼうし WEST では、昨年度の研修にもとづき、自ステーションの状況にあわせて分析のフォーマットなどを作成している過程を紹介した。

その後、神戸市を東西にわけ、講師を中心に、リソース中心の BCP 作成の枠組みにあわ

せて、以下のトピックスについてそれぞれのグループで 30 分情報交換を行った。神戸市内東は奥河講師が、西は皆川講師が担当し、本学教員がファシリテーターを務めた。

グループワークでは、スタッフと共に BCP を作成する時間の作り方や、近隣の区で連携して BCP を作成する工夫等が話し合われた。

3) 業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

事前参加申込は 25 施設 41 名であり、申込事業所の在籍区は、「西区」が最も多く 6 件（24%）、次いで「東灘区」が 5 件（20%）、「灘区」が 4 件（16%）であった（図 1）。講師と同区の訪問看護ステーションからの申込が多かった。当日の参加人数は 23 施設 29 名であった。

研修後に実施したアンケートへの回答数は 17 名、回収率は 59%であった。回答者の在籍区は、「西区」「東灘区」「灘区」が 5 名（29%）、「兵庫区」が 2 名（12%）だった（図 2）。回答者の訪問看護ステーションでの勤務年数は、「10 年以上」が 9 人（53%）、「10 年未満」が 5 人（29%）、「3 年未満」が 1 人（6%）、「1 年未満」が 2 人（12%）であった（図 3）。職位は、「管理者」が 11 人（65%）と「統括管理者」が 1 人（6%）で運営管理者が最も多く、ついでスタッフ 3 人（17%）、事務 1 人（6%）だった（図 4）。

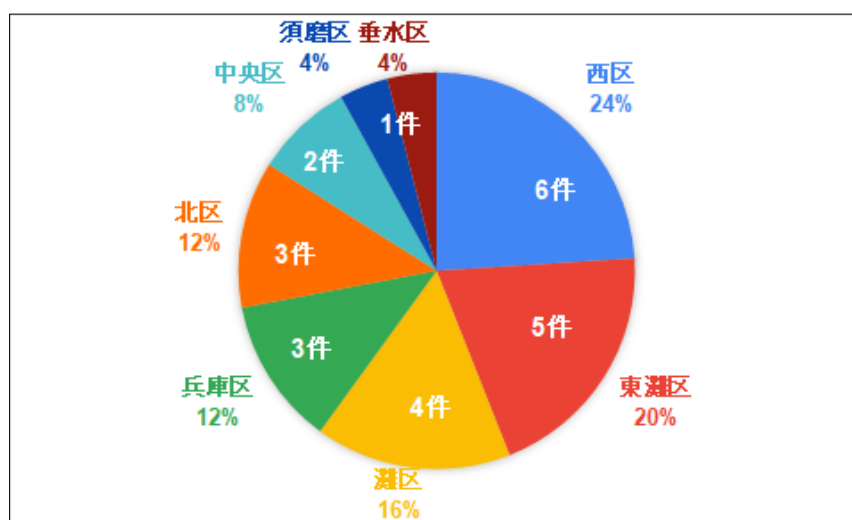


図 1 事前参加申込事業所の在籍区

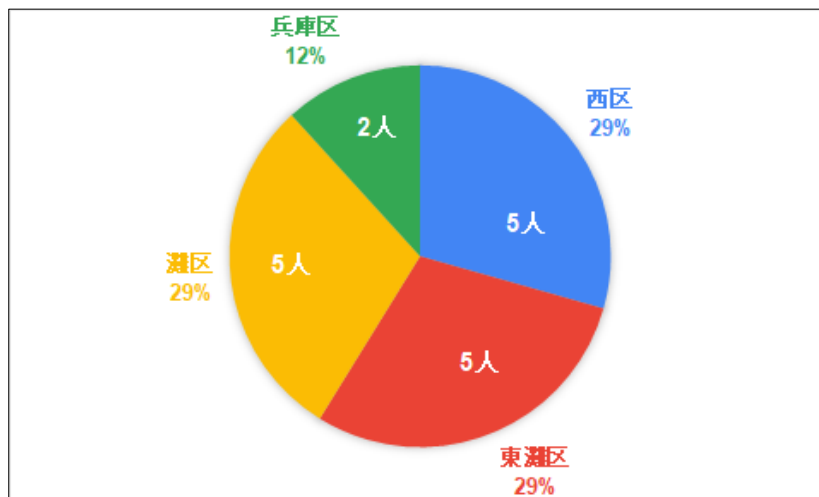


図 2 回答者の在籍区

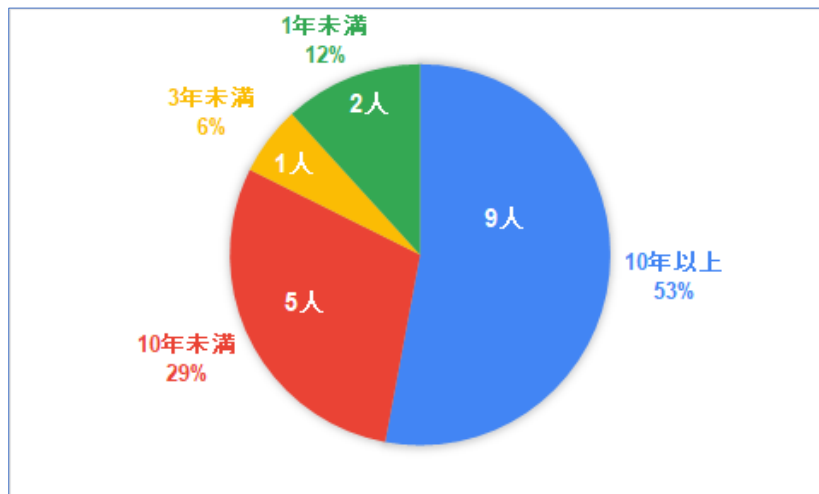


図 3 訪問看護ステーションでの勤務経験

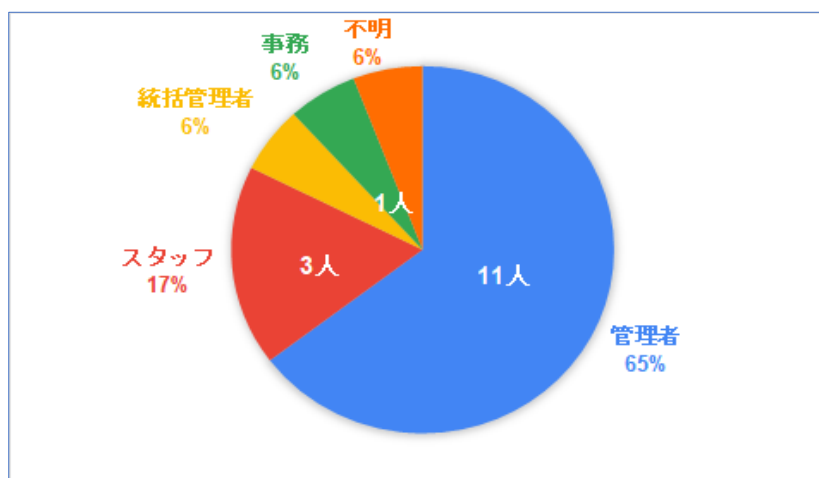


図 4 職位

②参加理由・参加後の意見や感想

参加理由は、「テーマに興味があったから」が最も多く 15 名（88%）、ついで「実際に活用できると思ったから」が 13 名（76%）、「オンライン開催だったから」が 8 人（47%）であった（図 5）。

研修前の期待度は、「とても期待していた」が 6 名（35%）、「期待していた」が 10 名（59%）、「あまり期待していなかった」が 1 名（6%）であった（図 6）。研修後の満足度は「大変満足できた」が 9 名（53%）、「満足できた」が 8 人（47%）で、「あまり満足できなかった」「満足できなかった」の回答はなかった（図 7）。また、各施設における研修の役立ち度について、「大変参考になる」7 人（41%）、「参考になる」10 人（59%）で、「あまり参考にならなかった」「まったく参考にならなかった」の回答はなかった（図 8）。したがって、研修への期待をある程度満足させる、参考になる研修内容であったと推測できる。研修に満足したことに関する自由記載では、「取り組むきっかけが見つけれられた」「どこから、作成し始めたらいいかイメージがわいてきた」「これから、作成にするに辺り方向性が見えた」等があげられた。

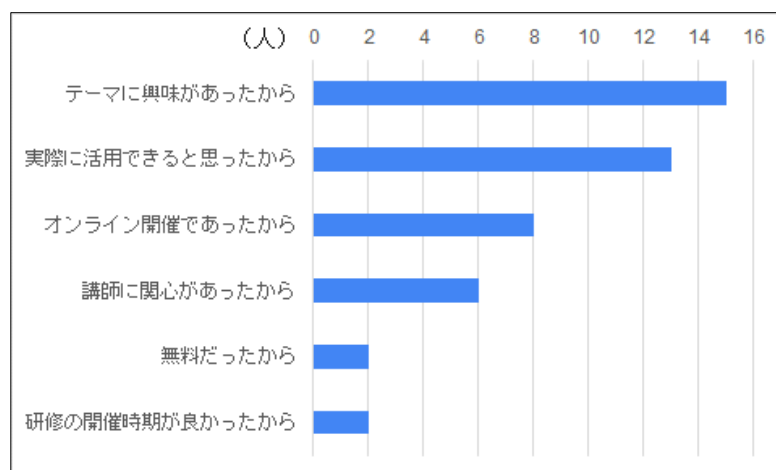


図 5 研修の参加理由（複数回答）

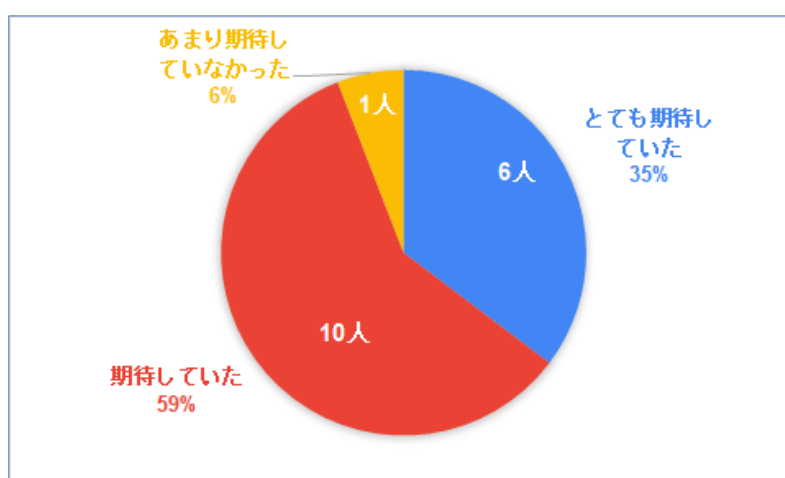


図 6 研修前の期待度

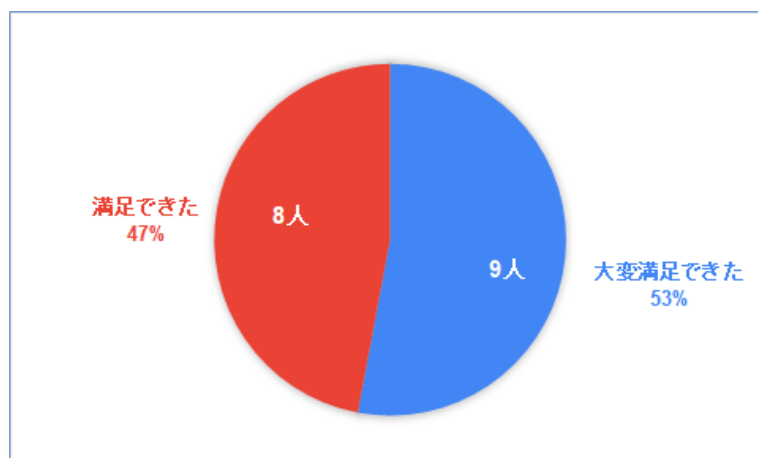


図 7 研修の満足度

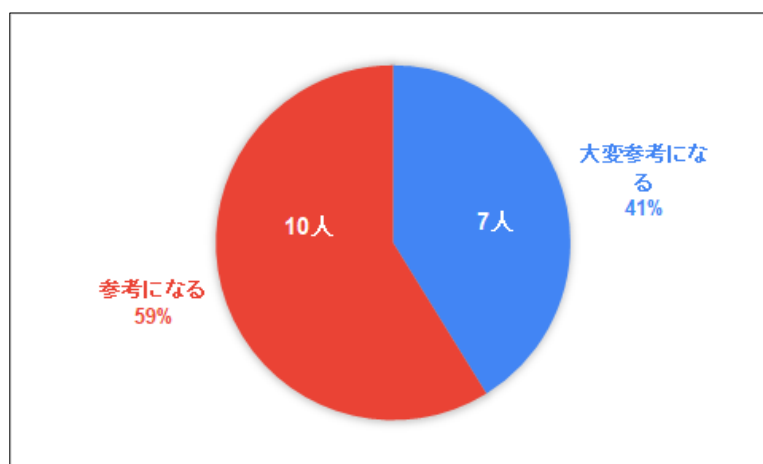


図 8 研修の役立ち度

③今後の要望

今後の大学への要望では、2023 年度も「BCP 作成研修のフォローアップ研修」を希望する意見が多数あった。BCP を具体的に活用した事例の紹介を希望する意見もあった。

4) 来年度の展望

2024 年 4 月から BCP の完成が求められていることから、完成に向けたフォローアップ研修が求められているので、訪問看護ステーションの現状ニーズに沿った研修を企画していく必要がある。また、2023 年 1 月 25 日（水）に大寒波と大雪があり、訪問看護ステーションは事業持続を求められた。この時に、BCP を用いて事業持続を行った訪問看護ステーション管理者に講師を依頼することも、具体的な活用事例として有用と考えられる。

4. オンラインを使用した多職種による退院時共同指導モデルの検討

在宅看護学分野 丸尾 智実

（１）背景

退院時共同指導は、地域の医療機関等から退院・退所する利用者に、入院していた病院等の医師やスタッフと在宅側の医師や訪問看護師、ケアマネジャー等が共同して指導を行うものであり、退院時カンファレンスとも呼ばれる。診療報酬および介護報酬における退院時共同指導加算は、一定の条件を満たした際に算定できる。2021 年度介護報酬改定では、退院時共同指導加算の算定要件について、COVID-19 対策や ICT 活用の観点からオンラインの活用が認められるようになり、ビデオ通話が可能な機器を用いて共同指導した場合でも対面と同等に算定が可能となった。オンラインを使用して退院時共同指導を行う場合は、患者の個人情報や当該ビデオ通話の画面上で共有する際に患者の同意を得ていること、保険医療機関の電子カルテなどを含む医療情報システムと共通のネットワーク上の端末において共同指導を実施する場合には、厚生労働省の「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」に対応していることが必要となる。

2021 年度は、オンラインを用いた退院時共同指導の現状について十分に明らかにされていなかったことから、オンラインを使用した多職種による退院時共同指導の現状と課題を明らかにすることを目的に、文献検討および神戸市内の病院や訪問看護ステーションでのヒアリング、「COVID-19 禍における神戸市内訪問看護ステーション現状調査」の結果からオンラインを活用した退院時共同指導を行った訪問看護ステーションの背景要因について検討した。その結果、オンラインを用いた退院時共同指導の普及を進めるにあたって、オンライン環境がない、オンラインに不慣れである、といったデメリットを改善する仕組みづくりを行っていく必要性が考えられた。

（２）事業内容・経過

以上の課題から、2022 年度はオンラインを使用した多職種による退院時共同指導に必要な基本的支援（導入支援）を行うことを目的に、①希望する神戸市内在宅拠点施設（訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所等）への ICT 活用・導入支援、②ICT 活用への課題や困難な事柄は何かを明らかにする（前年度からの継続課題）、③オンラインに慣れていない家族、施設への退院時共同指導に関するパンフレットの作成・公開を行った。

（３）業務成果・実績

①では、チラシやホームページで ICT の活用・導入支援を希望する在宅拠点施設を応募した。その結果、2 施設の訪問看護ステーションより申し込みがあり、延べ 4 件の支援を行った。相談・支援内容は、オンラインシステムを用いた会議の開催方法やシステムの使用方法・設定について、自施設内のオンライン環境の相談等であった。また、これらの施設では、オンラインを使用した退院時共同指導に参加した経験はなかったが、今後も新興感染症等を含む災害発生時を考慮した対応策を考える必要があることから自施

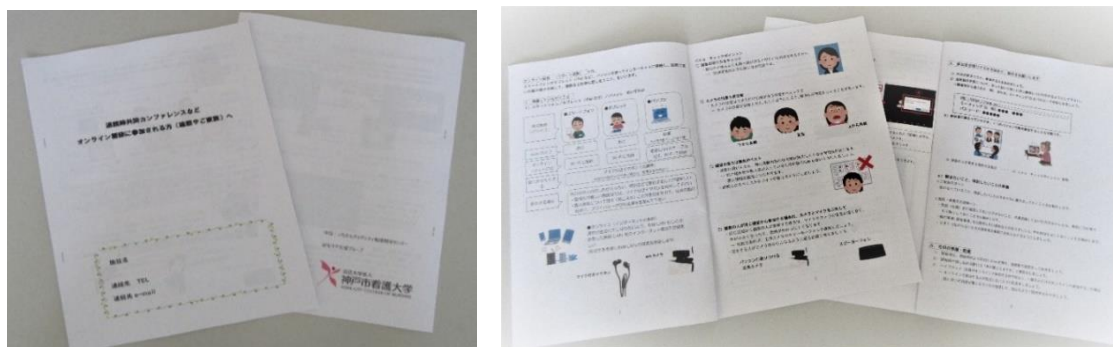
設内で行う多職種での会議等に活用したいという意向があった。

②では、①の支援を通して、ICT 活用への課題や困難な事柄は何かを検討した。その結果、ICT を活用したいという意向はあるものの基本的な設定や使い方に苦慮しており気軽に相談するところがないという課題があった。特に、今回支援をした訪問看護ステーションは、訪問看護ステーションを設立して数年以内の小規模な（常勤換算人数が全国平均の5.8人よりも少ない）ステーションであり、管理者が交代したばかりであったこと等が共通していた。また、オンラインを使用した退院時共同指導の依頼自体がなかったことから、コロナ禍は継続しているもののオンラインを使用した多職種での退院時共同指導等でのICTの活用状況には差がみられると考えられた。これらの結果は、昨年度のヒアリングや調査の結果（オンラインを使用した多職種カンファレンスの依頼を受ける側である施設側がオンラインをする環境が整っていないこと、ICTの活用状況は区によって偏りがあること等）を支持する内容であった。

③では、昨年度のヒアリングの結果で明らかになった課題（オンライン環境がない、苦手という方は参加しにくい、在宅側の施設でオンラインに慣れている人がいないので進まない、在宅側の施設にオンライン設備がない、オンライン会議に不慣れでイメージがわからず不安がある方がいる、個人情報漏洩への懸念がある、ニュアンスが伝わりにくい、患者・家族が参加しにくい）と、①で支援を行った訪問看護ステーションでの支援内容および実際にICTを活用した退院時共同指導を行った経験のある複数の施設スタッフの意見を踏まえて、オンラインに慣れていない家族や施設とのオンラインを使用した多職種による退院時共同指導のポイントや必要な環境および機器や環境のセッティングのポイントを記載したパンフレットを作成した。作成したパンフレットは、市内の訪問看護ステーション約260か所に郵送して周知するとともに、本学のホームページ上で公開して、誰もが活用できるようにした。

（４）来年度の展望

今年度は、昨年度の課題を踏まえて、オンラインでのデメリットを改善する仕組みづくりの一端を担うことができたと考えられる。しかし、ICTの活用・導入支援を希望する訪問看護ステーションへの支援を通して、小規模で身近な支援の得られにくい訪問看護ステーションへの個別のニーズに合わせた柔軟な支援がより一層必要であると考えられた。



作成したパンフレット

資 料

**退院時共同カンファレンスなど
オンライン面談に参加される方（施設やご家族）へ**

施設名

連絡先 TEL

連絡先 e-mail

オンライン面談（リモート面談）とは、

スマートフォンやタブレット（iPad など）、パソコンを使ってインターネットに接続し、画面に互いの顔や様子を映して、複数名と同時に話し合うこと、をいいます。

1. 準備していただくこと

1) スマートフォン／タブレット（iPad など）／パソコン のいずれか

端末機器 (デバイス)	●スマートフォン 	●タブレット 	●パソコン 
web カメラ	あり	あり	必要 カメラ付きパソコンは不要
オンライン (ネットに接続)	Wi-Fi に接続	Wi-Fi に接続	有線 LAN のケーブル 又は、Wi-Fi で接続
聞こえやすくする	マイク付きイヤホン（必要時） ※周りの音が入りやすい場合は、使用する方がよい		
参加する場所	外の音や人の話し声が入らない、個室などで参加することが望ましい ・個室等が難しい職場等では、マイク付きイヤホンを利用して下さい ・個人情報について話す（聞こえる）ことがありますので、公共の場所を避け、 プライバシーが守れる場所を選んで下さい		



●オンライン（インターネットの接続）

通信が途切れてしまわないよう、有線 LAN もしくは安定した無線 LAN 等のインターネット環境下が望ましい
(安定性を考慮し有線 LAN の環境を推奨します)

・ マイク付きイヤホン



web カメラ



<+α チェックポイント>

□ 画面の映り方をチェック

- ・顔だけが映るよりも肩～顔が映ると相手に圧迫感を与えません。
→ 証明写真のような映り方が理想です。



□ カメラの位置も要注意

- ・カメラの位置はできるだけ目線が合う位置がベストです。
→ カメラの位置が目線より上、もしくは下になると、相手に不快感を与えることがあります。



下から目線



正面



上から目線

□ 画面の後ろは無地がベスト

- ・背景に柄が入ると、特に高齢の方にはお顔が見えにくくなる可能性があります。
→ 特に掲示物や個人名が入っているものが後ろに映らないようにしましょう。
個人情報漏洩につながります。
- ・照明もなるべく上からライトが当たるようにしましょう。



□ 複数の人が同じ画面から参加する場合は、カメラとマイクも工夫して

- ・同じ画面から複数の人が参加する場合は、マイクやカメラの位置が遠くなり、声が小さくなったり、表情がわかりにくくなります。
→ 可能であれば、広角カメラやスピーカーフォンを使用しましょう。
- ・話をする人がカメラの中心になるように座る位置も考えましょう。

パソコンに取りつける
広角カメラ



スピーカーフォン



2. オンラインの準備 (ZOOM) 〈面談 (会議) 日までにしておくこと〉

■ 予め、Zoom をスマートフォン/パソコン/タブレットにダウンロードします。(無料です)

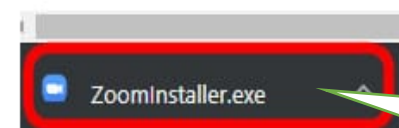
(1) インターネットで Zoom ダウンロードセンター を開きます。

<https://zoom.us/download>

下の画面が出たら、青いボタン【ダウンロード】をクリック (タップ) します。



(2) スマートフォン/パソコン/タブレットに Zoom をインストール (パソコン等に取り込む) (無料です)。



(3) Zoom にサインインしておく (※しなくてもよい)

・ご自身のメールアドレスとパスワード (英数字) をご自身で決めて忘れないようにして下さい。



Zoom アプリを立ち上げると下のような画面が表示されます。

【サインイン】をクリック (タップ)

- ① メールアドレス (ご自身のもの)
- ② パスワード設定 (英数字)

パスワードは忘れないように、メモしておいて下さい



サインインができれば、この画面になります。

3. 当日の参加（入室）方法

1) ミーティングに参加する … 以下の3つのいずれかの方法で参加して下さい。

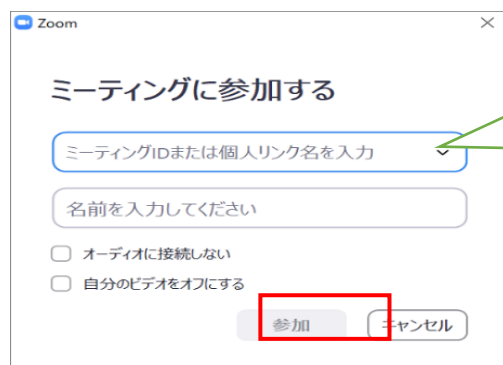
※ メールで参加案内を受け取られた場合は、【方法その3】が一番簡単です。

(1) 【方法その1】サインインせずに参加



Zoom を開く
→ 「ミーティングに参加」をクリック（タップ）

★ミーティング ID とパスコードを入力



事前に開催者から知らされた
①ミーティング ID
②パスコードを入力
→ 「参加」をクリック（タップ）

(2) 【方法その2】サインインして参加



「サインイン」をクリック（タップ）



「参加」をクリック（タップ）

★ミーティング ID とパスコードを入力
※上と同じ

③【方法その3】招待された ZOOM の URL をクリック（タップ）して参加

メールで受け取る内容は以下のようになっています。

(1) メールで以下を受け取る

例) ●月●日 カンファレンス (▼▼訪問看護ステーション)

●●時●●分～●●時●●分

URL : <https://zoom.us/j/.....>

ミーティング ID: 985 ●●● ●●●

パスコード: ●●●●●

この URL をクリック（タップ）する

さんがあなたを予約されたZoomミーティングに招待しています。

トピック: の Zoom ミーティング
時間: 2021年10月19日 07:00 PM 大阪、札幌、東京

Zoomミーティングに参加する
<https://>

ミーティングID:
パスコード:
ワンタップモバイル機器
+81524564439, # 日本
+81345781488, # 日本

この URL をクリック（タップ）する

2) 以下のアイコンを【オーディオ参加】にする

必ず上の青いほうをクリックしてください。声が聞こえないことがあります。

どのようにオーディオ会議に参加しますか?

電話で参加 コンピューターのオーディオ

コンピューターでオーディオに参加
コンピューターオーディオのテスト

☐ ミーティングへの参加時に、自動的にコンピューターでオーディオに参加

● 当日、開始の少し前（5分前など）に参加し

① 音声がかかるか

② 画面が見えるか をご確認ください。

● 接続トラブルに備え、相手先の緊急連絡先(電話番号)を確認しておきましょう。

3) トラブルについて

★ 相手の声が聞こえない / こちらの声が聞こえないと言われる

(1) マイクをオンにする。

ミュート（マイクのマーク）に赤い斜線が入っている



マイクオフ

→ ミュート（マイクのマーク）をクリック（タップ）すると、赤い斜線が外れます。

マイクオン



(2) 音が聞こえるか、チェックする

① ミーティングに入室した後

- ・画面左 下のミュート（マイクのマーク）の右の【^】を押す。
- ・「スピーカーとマイクのテストをする」を選ぶ

② ミーティングに入室した後画面左 下のミュート

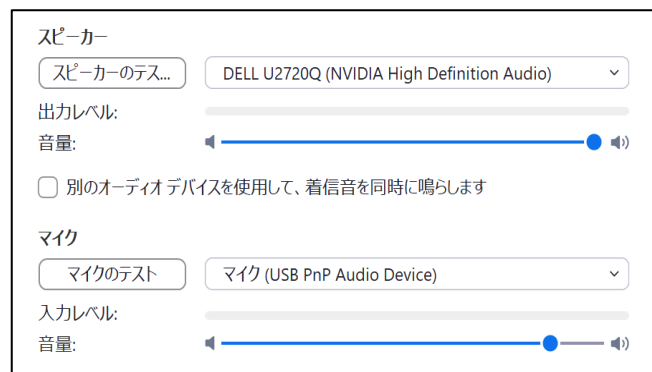
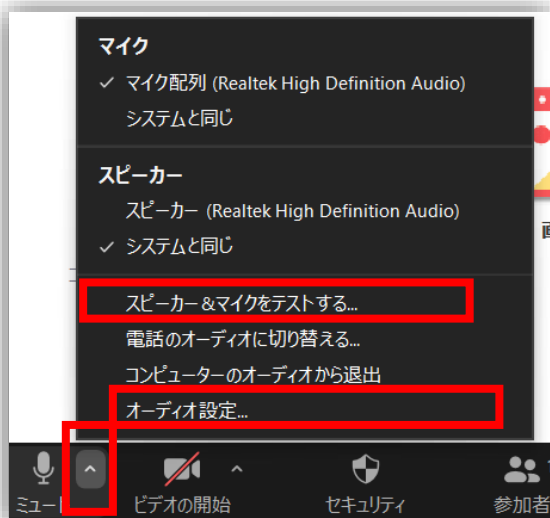
（マイクのマーク）の右の【^】を押す。

- ・「スピーカーとマイクのテストをする」を選ぶ

② 音量を調節する

- ・音量が小さい、自分の声が聞こえないと言われるという場合

→「オーディオ設定」をクリックし、スピーカーやマイクの青い●を右に動かして、音を上げることができます。



(3) その他のチェックすべきこと

- PC/スマートフォン のスピーカーのボリュームが下がっていないか
- スピーカーが2つ以上ある場合はご利用されるスピーカーを選んでいるか（上の画面）
- マイクが2つ以上ある場合は、ご利用するマイクを選んでいるか（上の画面）
- ヘッドセット、外付けマイクを使用する場合 使用するマイクとスピーカーを選んでいるか（上の画面）

4) 施設名・名前の変更ができます。

【ご施設の場合】

表示される名前を【施設名または名前】に変更しておきましょう。

【■■■医院／●●】などを入れて下さい。



④ 画面下部の「参加者」をクリック

- ① 参加者一覧から「自分の名前」を選択すると右に「詳細」がでる。
- ② 「詳細」をクリック「名前の変更」をクリック。
- ③ 「名前の変更」の枠で名前を変更し、OK をクリック

また、現在のご自分の表示名上で、右クリックをして「名前の変更」から変更することもできます。



4. 参加者を誰にするかを決めて、案内をお願いします

- 1) 日時が決まったら、参加する人を決めましょう。
- 2) 退院後の生活について、知っておいて欲しい方に参加していただけるようにして下さい。
→開催者から送られた URL または、ミーティング ID とパスコードを知らせましょう。

URL : <https://zoom.us/j>
ミーティング ID: 985 ●●● ●●●
パスコード: ●●●●●

- 3) 参加者に集まっていただき、1つのパソコンで数名参加することも可能です。



※ 複数の人が集まる場合の注意点 . . . p2 <+α チェックポイント> 参照

4) 聞きたいこと、検討したいことの準備

<ご家族の方へ>

気になっていること、確認したいことは予めメモに書き出しておくことをお勧めします。

<施設・事業所の皆様へ>

- ・面談（会議）前に確認しておいた方がよいこと、共通認識しておいた方がよいことは、事前に FAX 等でやり取りしておくことをお勧めします。
- ・検討事項、懸念事項、当日提示したい資料などがありましたら、予めお知らせしておくことをお勧めします。
- ・うまくつながらないときの連絡先を事前にお知らせするようにしましょう。

5. 当日の準備・配慮

- 1) 開催者は、開始時間より早めに Zoom を開き、接続等の確認をしておきましょう。
- 2) 開始時や話し始める際には「声が聞こえますか」と確認をしましょう。
- 3) ハイブリッド（全員がオンラインで参加するのではなく、一部の人だけがオンラインで参加する）の場合
→ オンラインで参加する人が孤立しないように配慮をしましょう。
話し合いの内容が聞こえているか確認して、話せるように随時声をかけましょう。

IV 国際交流グループ

災害看護・国際看護学分野 神原 咲子

1. グループ概要

いちかんダイバーシティ看護開発センター内の国際交流グループにおいて企画・運営が実施された。

1～2 週間程度の短期間、学生らが現地に赴いて見学・視察や語学研修、看護演習を含む「海外看護学研修」については、本学と学術協定を締結している米国ワシントン大学（シアトル）において、自分の目で見たり聞いたり触れたりするという形で海外を経験することができた。また、この機会に、危機管理マニュアルの見直しもした。一方、ベトナム・ダナン大学については、今年度も引き続きオンラインセミナーという形で実施した。コロナ禍であればこそその新たな試みへのチャレンジを経て、オンライン形式、オフライン授業での国際交流、課外の English Extra などを含め、多様な国際交流を検討できた。

以下はそれらを含めた 2022 年度国際交流グループ活動報告である。

2. グループメンバー

リーダー 神原咲子

メンバー 高木廣文、林千冬、山内理恵、クロスビ・アダム、佐藤隆平、樋口佳耶

3. 今年度の実施内容及び実施結果

（1）学術協定の更新手続きとあらたな協定に向けた活動

本学の学術協定（MOU）提携校の一つであるベトナム・ダナン大学との協定が満 5 年を迎え、このたび更新手続きを開始した。同大学との交流は年々活発化しており、コロナ禍において本学の国際交流の基軸となっている。

4 月にスタートアップ企業 T-ICU と協定を結び、バングラデシュでの共同プロジェクト（独立行政法人国際協力機構プロジェクト、日本貿易振興機構による DX 等新規事業創造推進支援事業費補助金（ビジネス共創促進事業）事業）に関する協議を行った。

韓国大邱大学との協定と学生交流に向けた議論を進めており、先方の看護学部長は来日を希望されているが、コロナで延期となっている。この交流から、長田区にある神戸朝日病院との交流ができ、神戸看護学会への参加も促した。

台北護理健康大学との学術交流に向けて、オンライン議論を開始し、機会あるごとにオンラインサマーセミナーなどの情報提供も行なった。10 月には台北を訪問し、国際交流

担当教員と意見交換し、学内視察も行った。

（２）ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流イベント

ベトナムのダナン大学看護学部との学生交流イベントを 2023 年 1 月 5 日にオンラインで実施した。ダナン大学からは学部長をはじめ、多数の看護学科教員や学部学生らの参加を得ることができた。

本イベントでは、まず前半に両大学の教員による COVID-19 禍での看護教育に関するプレゼンテーションとディスカッションを行った。後半には本学の学生 2 グループとダナン大学の修士学生 1 名から、コロナ禍における授業や演習の経験について交互にプレゼンテーションを行い、参加者全員でディスカッションを実施した。

参加者の方からは、「ベトナムの状況について、生の声を聞けて良かった」、「それぞれの学生が疑問などを質問しあい、その答えが面白かった」といった感想が聞かれ、多くの方にとって貴重な機会となったことがうかがえた。日本語-ベトナム語の通訳は看護師であり修士院生である So Hideko 氏に依頼し、双方の補完的な知識を得ることができた。

（３）オンラインセミナー「日本で働く外国人看護師のキャリアの探究」の開催

日本で働く外国人看護師のキャリア開発におけるニーズを知ることを目的にした講演を開催した。益加代子氏には支援者の立場から、外国人看護師（候補者）がどのように来日し、看護師として働き始めるのか、制度や現状、課題などについて解説いただいた。

大阪公立大学大学院生の畢琴燕さんと NURFANDY さんには当事者の立場から、キャリアの節目となるその時々、どのようなことを考えておられたか等を織り交ぜながら、ご自身の経歴について講演していただいた。

（４）English Extra

English Extra は予定通り学期期間中の毎週 1 回 12 時 30 分から 13 時まで対面方式で開催した。今年度は全体的に昨年度よりも多くの学生や院生、事務職員、教員の参加がみられた。また、学生からの希望もあり、休暇中にも特別企画として 9 月と 2 月にそれぞれ 2 回 "Extra English Extra"（対面方式）を開催し、複数の参加者（学生・教職員）があった。

本館 3 階オープンスペースは Wi-fi 環境があまり良くないこともあり、オンライン方式は行わないこととした。より多くの参加者を呼び込めるよう、前期には学生が集まりやすい場所への変更を念頭に参加者に希望を聞いたが、特に変更して欲しいとの希望はなかった。

新しいサービスとして、English Extra の会話に参加できなくても英語を上達させたいと考えている人に向けて、9 月に Moodle 上でも English Extra のページを作成した。そして、英語学習のためのヒントやアドバイスを掲載した他、毎月 1 回、医療英語に関する動画とクロスビー准教授による英語のショートメッセージをアップし始めた。登録者数は徐々に増え、現時点では英語教員 2 名を除いて 20 名である。



The poster for 'English Extra!' features a blue banner at the top left that says '今学期は Face to Face!'. The main title 'English Extra!' is in large, orange, stylized letters. Below the title, the text '水曜日のお昼休みに英語を話ませんか? Adam Crosby 先生を中心に English Extra を開催します。奮ってご参加ください。' is written in black. The dates are listed in red and orange: '開催日: 10月5日、12日、19日、26日', '11月2日、9日、16日、30日', '12月7日、14日、21日', and '1月4日、11日、18日'. To the right of the dates is a blue speech bubble with the text 'Do you speak English?' and a blue marker. Below the dates, the time and location are listed in green: '開催時間: 12 時 30 分から 13 時まで' and '場所: 本部研究棟 3 階オープンスペース'. At the bottom, there are three bullet points in black text, each preceded by a red asterisk: '※ 対象者は本学の学生、院生、教職員です。', '※ 感染対策のため、必ずマスクを着けての参加をお願いします。', and '※ 感染対策のため、飲食はお控えください。'. The background of the poster includes a purple flower and a book.

今学期は
Face to Face!

English Extra!

水曜日のお昼休みに英語を話ませんか? Adam Crosby 先生を中心に English Extra を開催します。奮ってご参加ください。

開催日: 10月5日、12日、19日、26日
11月2日、9日、16日、30日
12月7日、14日、21日
1月4日、11日、18日

開催時間: 12 時 30 分から 13 時まで
場所: 本部研究棟 3 階オープンスペース

※ 対象者は本学の学生、院生、教職員です。
※ 感染対策のため、必ずマスクを着けての参加をお願いします。
※ 感染対策のため、飲食はお控えください。

(5) 異文化交流の推進

- ・ヘルスプロモーションの授業の中でシラバスに則りつつ、グローバルヘルス課題や人間の安全保障の課題について、自分ごととして課題解決に向けた議論ができるような教材とグループワークを実施した。
- ・トビタテ JAPAN での留学希望者がおり、行先の大学を紹介するなどした。今後は、海外の情報を入手しやすい情報を置いたり、応募準備に関する相談ができる窓口が必要と考えている。
- ・研究演習において、神戸市内に住む数カ国の外国人の健康課題についてヒアリングを行い、得られた結果を長田区まちづくり課に還元した。今後は、国際まちの保健室のような活動に発展させたい。
- ・英語の書籍（特に英語学習者用のラダーシリーズを 60 冊ほど）を図書館に配置した。

V 保健師キャリア支援センターグループ

公衆衛生看護学分野 岩本 里織
いちかんダイバーシティ看護開発センター 磯濱 亜矢子

1. グループ概要

保健師キャリア支援センターは 2021 年 4 月に設置され、事務局を本学が担っている。主な活動内容は、兵庫県保健師人材育成ガイドラインに基づく人材育成研修や、キャリアアップを図るための相談・支援、保健師活動に関する調査研究や情報発信等、地域で活動される保健師の方々の資質向上につながる様々な取組を行っている。

2. グループメンバー

リーダー 岩本里織

メンバー 磯濱亜矢子、山下正、山田暢子、遠藤真澄、西村康子

3. 今年度の活動内容と実績

(1) 保健師人材育成研修

1) 新任期保健師研修会

①合同研修

日時：2022 年 6 月 29 日（水）10:30～12:00

開催方法：オンライン研修

内容：講義「伝える：災害時の保健活動～阪神・淡路大震災及び東日本大震災被災地での支援活動から～」

講師：兵庫県保健医療部参事 松下 清美氏

参加者数：170 名（新任期保健師 169 名、災害担当保健師 1 名）

②前期 I 研修（オンライン研修）

1 年目相当（個別支援）

日時：2022 年 7 月 11 日（月） 13:00～16:30

内容：講義「個別支援」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉 比佐子 氏

講義「1 年目の課題の取り組み方について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 中前 日里 氏

参加者数：86 名（新任期保健師 82 名、聴講者 4 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2022 年 7 月 14 日（木） 10:00～14:20

研修：講義「地域診断」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉 比佐子 氏

講義「2 年目の課題の取り組み方について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 職員 長谷川 莉沙 氏

参加者数：59 名（新任期保健師 57 名、聴講者 2 名）

3 年目相当（地域診断）

日時：2022 年 7 月 14 日（木） 13:00～16:30

研修：講義「地域診断に基づく事業計画と評価について」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉 比佐子 氏

講義「3 年目の課題の取り組み方について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 中前 日里 氏

参加者数：40 名（新任期保健師 38 名、聴講者 2 名）

③前期Ⅱ研修

1 年目相当（個別支援）

日時：2022 年 10 月 17 日（月） 10:00～16:30

場所：三宮研修センター 6 階 605・601

内容：先輩保健師からの講話「2 年目の保健師として伝えたいこと」

講師：宝塚健康福祉事務所健康管理課 職員 元木 晴香 氏

グループワーク「日頃の活動の振り返り」

「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：103 名（新任期保健師 83 名、ファシリテーター 20 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2022 年 10 月 21 日（金） 10:00～16:30

場所：兵庫県民会館 10 階 福

内容：先輩保健師からの講話「後輩保健師に伝えたいこと～これまでの保健師活動を振り返って～」

講師：姫路市保健所予防課 保健師 田川 若奈 氏

グループワーク「日頃の活動の振り返り」

「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：68 名（新任期保健師 55 名、ファシリテーター 13 名）

3 年目相当（地域連携）

日時：2022 年 10 月 24 日（月） 10:00～16:30

場所：兵庫県中央労働センター 1 階 小ホール

内容：先輩保健師からの講話「新任期保健師に伝えたいこと」

講師：加東市健康福祉部健康課 保健師 吉田 里奈 氏

グループワーク「日頃の活動の振り返り」

「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：45名（新任期保健師36名、ファシリテーター9名）

④後期研修

1年目相当（個別支援）

日時：2023年1月19日（木） 10:30～16:00

場所：兵庫県民会館 11階 パルテホール

内容：中堅期保健師からの講話「個別支援の実際について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 職員 長谷川 莉沙 氏

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：101名（新任期保健師81名、ファシリテーター20名）

2年目相当（地域診断）

日時：2023年1月23日（月） 10:30～16:00

場所：兵庫県民会館 10階 福

参加状況：67名（新任期保健師54名、ファシリテーター13名）

内容：中堅期保健師からの講話「地域診断の実際について」

講師：伊丹健康福祉事務所 主査 西原 沙織 氏

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

3年目相当（地域連携）

日時：2023年1月26日（木） 10:30～16:00

場所：兵庫県民会館 10階 福

内容：中堅期保健師からの講話「PDCAに基づく保健活動の実際 特定健診・保健指導の実践例から」

講師：尼崎市保健担当局健康増進担当部健康支援推進担当 係長
山田 茉衣子氏

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：42名（内訳：・新任期保健師33名、ファシリテーター9名）

⑤フィードバック研修（講師派遣調整）

洲本市新任期保健師研修会

日時：2023年3月1日（水） 13:30～16:00

場所：洲本市みなと元気館2階 多目的室

内容：話題提供「新任期保健師研修の振り返り」

講師：神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター
特任講師 磯濱 亜矢子 氏

グループワーク「今後の課題や取組について」

参加者数：10名（新任期保健師3名、指導保健師3名、人材育成担当3名、トレーナー保健師1名）

2) プリセプター研修会

日時：2022 年 11 月 18 日（金）13:30～16:30

場所：兵庫県中央労働センター 1 階小ホール

内容：講義「新任保健師の個別支援能力を高めるプリセプターシップ
～新任期の強みや特性を活かして～」

講師 甲南女子大学看護リハビリテーション学部 教授 合田 加代子 氏
グループワーク「プリセプターとしての現状や課題を踏まえた支援のあり方」
発表及びまとめ

助言者 甲南女子大学看護リハビリテーション学部 教授 合田 加代子 氏
話題提供「新任期保健師研修とファシリテーターの役割について」

講師 兵庫県保健医療部健康増進課 主査 中前 日里 氏

参加者数：44 名（健康福祉事務所 18 名、中核市 5 名、市町 21 名）

3) 地域ケアの総合調整研修

①公開講座

日時：2022 年 8 月 25 日（木）13:30～16:30

場所：三宮研修センター 8 階 805

内容：講義「地域活動において、科学的手法（調査研究）を用いて疑問や課題
を明らかにする必要性とその手法」

講師：武庫川女子大学看護学部 教授 和泉 京子 氏

課題解決に向けた助言・指導

講師：武庫川女子大学看護学部 教授 金谷 志子 氏

教授 和泉 京子 氏

講師 松井 菜摘 氏

助教 枝澤 真紀 氏

神戸市看護大学看護学部 教授 岩本 里織 氏

講師 山下 正 氏

参加者数：5 名（健康福祉事務所 1 名、中核市 1 名、市 3 名）

②課題研修

保健活動における課題や疑問を選定し、科学的手法を用いて課題や疑問を明らかにするための計画書を作成する。計画に基づき調査等を行い、課題や疑問を明確化する。取り組みの成果について学術集会や報告会等の場を活用して公表し、意見交換を行い、成果に基づく方策など現場への活用を提案する。

期間：2022 年度～2023 年度

内容：サポート講師の助言のもと、チームで検討したいテーマに沿って調査や事業の検討を行い、根拠に基づいた保健事業の展開につなげる。

参加状況：3 市

①宍粟市：テーマ「高齢者保健」、サポート講師 武庫川女子大学

②淡路市：テーマ「高齢者保健」、サポート講師 関西看護医療大学

③洲本市：テーマ「母子保健」、サポート講師 神戸市看護大学
※実践報告会は 2023 年度実施予定

4) 統括期保健師研修会

日時：2022 年 10 月 31 日（月）10:00～16:50

場所：UNITY（大学共同利用施設） セミナー室 3

内容：講義 「統括期保健師の役割や機能・期待する役割」
「統括保健師の組織内のリーダーシップと調整力」
「実践の評価」

講師 神戸市看護大学看護学部 教授 岩本 里織 氏

講義 「統括保健師の実践を振り返って」

講師 兵庫県保健医療部 参事 松下 清美 氏

グループワーク

テーマ「自組織における統括保健師としての課題、統括保健師としての
自組織での活動計画、提案と課題」

個人ワーク

テーマ「行動計画立案（課題・目標）」

全体発表・共有

参加者数：6 名（健康福祉事務所 2 名、中核市 2 名、市町 2 名）

(2) 保健師キャリア支援（再就業支援含む）

1) 保健師キャリア相談

県内の保健師（保健師免許保有者）を対象として、活動に関する具体的な相談（事業、個別支援等）、スキルアップやキャリアラダーに関する事等保健師活動全般に関する相談窓口を開設している。今年度の相談実績は 5 件で、相談内容は、研修講師の紹介や、キャリアアップに関する相談などであった。必要に応じて相談ができる窓口をさらに周知する必要がある。

2022 年度の相談実績

番号	相談方法	相談概要
1	メール	地域診断の研修の講師の紹介
2	メール	再就業先の情報
3	ZOOM 面談	キャリアアップ
4	電話	再就業のための勉強会
5	電話	組織育成・ソーシャルキャピタル研修の講師紹介

2) 保健師就業・復職支援研修会

今年度の新たな取組として、保健師資格取得後、保健師活動から離れていた人材を有効に活用するため、潜在保健師等の就業・復職を促進することを目指し、座学と実地見学で構成する研修会を行った。

①講義

日時：2023 年 2 月 1 日（水）13:30～16:30

場所：中央区文化センター 11 階 1112 会議室

対象：行政保健師として求職中の者（新卒除く）

内容：講義「最近の保健・医療・福祉の動向と兵庫県における保健施策について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課 主査 中前 日里 氏

講義「神戸市の保健師活動」

講師：神戸市健康局 保健企画担当局長 山崎 初美 氏

現職保健師との座談会（実地見学オリエンテーション含む）

助言者：神戸市健康局健康企画課 担当係長 大澤 和恵 氏

保健師 鍋島 伶実 氏

兵庫県保健医療部健康増進課 副課長 山下 久美 氏

主査 中前 日里 氏

神戸市看護大学看護学部 教授 岩本 里織 氏

講師 山下 正 氏

参加者：6 名

②実地見学

日時：2023 年 2 月 17 日（金）13:00～16:00

場所：中央区保健福祉課

対象：保健師就業・復職支援研修会受講者のうち希望者

内容：4 か月児健康診査の見学

講師：神戸市健康局健康企画課 保健師 小南 ちひろ 氏

保健師 鍋島 伶実 氏

参加者：2 名

3) オンデマンド研修

①先駆的保健活動の紹介

テーマ：「神戸市における介護予防の取り組み」と題した講話及び活動紹介

講師：神戸市福祉局介護保険課 担当係長 丸岡 友美 氏

②新任期保健師研修

合同研修（オンデマンド配信）

日時：2022 年 6 月 29 日（水）10:30～12:00

内容：講義 「伝える：災害時の保健活動」

講師：兵庫県保健医療部 参事（感染者対応・保健師確保調整担当）

松下 清美 氏

課題説明

1 年目～3 年目の課題の取り組み方について

新任期研修（前期 I）の抜粋版をオンデマンド配信

4. 公衆衛生看護等に資する調査研究

現在、以下の研究課題の研究に取り組んでいる。

- (1) 保健師のキャリア支援に関するニーズと支援体制に関する研究
- (2) 職歴を考慮した新任期保健師の人材育成支援に関する研究
- (3) 保健師の産休・育休復帰支援に関する研究

5. 2022 年度の活動の振り返り

兵庫県保健師キャリア支援センターでの取組を開始して 2 年目である今年度は、新たな研修も含めて、対面研修を基本とした人材育成の取組を中心に、さらに充実した研修となるよう企画実施した。

まず、新任期保健師研修会について、健康危機管理分野をテーマにした合同研修を行ったところ、震災の体験に乏しい新任期保健師にとっては、平時からの保健活動の重要性に気付ける機会となった。また、継続研修においても、研修課題に取り組む時間を確保できるようなスケジュール設定及び、対面でのグループワーク、先輩からの学びの場を毎回企画したところ、有意義であったと大変好評であった。新任期保健師研修は、集合研修と現場の OJT を交えた研修体制で実施しているが、一貫して継続した支援を行えるよう、各新任期保健師の所属先とも一層連携して、効果的な人材育成を行えるよう検討していきたいと考える。

さらに、地域ケアの総合調整研修として、根拠に基づく保健活動への支援や、保健師就業・復職支援研修会による潜在保健師の活用を目指した研修の実施など、前年度より多角的な人材育成に取り組み、参加者からは高評価を得た。このような企画が実現したのは、県内の自治体保健師及び看護系大学教員の協力によるところが大きく、県内全体で人材育成を進めていく機運を一層高め、継続して質の高い研修を実施していくことが重要であると考えます。

一方で、キャリア相談の認知度は低く、必要に応じて活用できる相談窓口として更に周知する必要がある。

今後は、現在進めている調査研究や取組を通じて把握したニーズをもとに、保健師活動を支える当センターの役割についても随時整理をしながら、質の高い保健師の確保・育成を図ることができるよう、関係機関とも協議しながら進めてまいりたい。

VI 地域保健支援グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 磯濱 亜矢子
公衆衛生看護学分野 岩本 里織

1. グループ概要

地域保健支援グループでは、保健師等の専門職が行う地域の保健活動及び地域住民の健康を支援することを目指した活動を行っている。

現在の主な活動内容は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴って保健師の採用が増えた状況下での人材育成の支援や、地域の健康課題に基づく活動の検討などに取り組んでいる。

2. グループメンバー

リーダー 磯濱亜矢子

メンバー 岩本里織、山岡由実、山下正、山田暢子、遠藤真澄

3. 今年度の活動内容と実績

(1) 地域の保健活動への支援

1) 神戸市新任期保健師人材育成支援事業（神戸市からの委託事業）

県下の自治体の保健師採用状況は、新卒、職歴を有する者（看護師、保健師等）、年度途中の採用等多岐にわたっている。新型コロナウイルス感染症流行下の担当業務による経験の違いなども影響し、一律に人材育成を行うことが難しい現状がある。しかし、公衆衛生看護活動において個別支援は基本であり、対象者と信頼関係を築き、生活者としての価値観を的確に捉えて支援につなげることのできる資質を育成することがとても重要である。

そこで、神戸市の新任期保健師の家庭訪問や健康相談における保健指導について具体的な助言指導を行い、保健師としての能力向上をはかるための支援を行っている。具体的には、新型コロナウイルス感染症対応業務集中期間を除き、主に月 2～4 回程度、担当する保健センターへ赴き、個別支援（家庭訪問）計画について助言指導を行い、同行訪問を行っている。訪問後は新任期保健師及び指導保健師（または係長）と面談し、家庭訪問を振り返ることで、新任期保健師一人ひとりについて今後の個別支援における課題を整理し、今後の保健師活動につなげるよう助言指導を行っている。今年度は対象保健師 11 名、延 13 日で 32 回の指導を

行った。指導後に神戸市健康局健康企画課が行ったアンケートによると、回答のあった新任期保健師のほぼ全員が「とても役に立った」、「また利用したい」と回答している。その理由として、個別支援にあたって多角的視点につながったことや、自分自身が到達しているところと今後の課題について理解することができたことなどを挙げ、この取組により事例にじっくり向き合うことができたからこそ得られた学びであると認識していた。

また、係長への報告の際には、新任期保健師への直接的指導という観点のみで無く、管理職として新任期保健師自らの気づきを促すための指導のあり方についても、教員と新任期保健師のやりとりから学べることも多くあったという意見もいただいた。

昨年度と同様、新任期保健師のみならず、指導保健師等の支援にもつながる有意義な取組となっている実態が明らかになった。次年度も引き続き、人材育成ニーズに応える支援を行ってまいりたい。

2022 年度の支援状況

回数	相談方法	相談概要
1	面談	個別事例の計画指導
2	同行訪問	同行訪問
3	面談	振り返り
4	面談	個別事例の計画指導
5	面談	個別事例の計画指導
6	同行訪問	同行訪問
7	面談	個別事例の計画指導
8	同行訪問	同行訪問
9	面談	振り返り
10	面談	個別事例の計画指導
11	同行訪問	同行訪問
12	面談	振り返り
13	面談	振り返り
14	面談	個別事例の計画指導
15	同行訪問	同行訪問
16	面談	振り返り
17	面談	個別事例の計画指導
18	同行訪問	同行訪問
19	面談	振り返り
20	面談	個別事例の計画指導
21	面談	個別事例の計画指導
22	同行訪問	同行訪問

23	面談	振り返り
24	面談	個別事例の計画指導
25	面談	個別事例の計画指導
26	面談	個別事例の計画指導
27	同行訪問	同行訪問
28	面談	振り返り
29	同行訪問	同行訪問
30	同行訪問	同行訪問
31	面談	振り返り
32	面談	振り返り

2) 神戸市新任期研修への講師派遣

神戸市からの依頼により、下記の研修の講師として支援を行った。

①ファシリテーション研修

日時：2022 年 11 月 25 日（金）13:30～16:30

場所：神戸市職員研修所

対象：神戸市保健師（キャリアレベル A2 以上）

内容：講義「事例検討会ファシリテーション研修」

講師 神戸市看護大学 教授 岩本 里織氏
グループワーク及び全体発表

参加者数：18 名

②地域診断研修

日時：2022 年 11 月 28 日（月）14:00～17:00

場所：神戸市職員研修所

対象：神戸市の新任期保健師（キャリアレベル A0～A2）

内容：講義「地域診断に必要な基礎的知識・視点について」

講師 神戸市看護大学 講師 山下 正氏
グループワーク及び全体発表

ファシリテーター 神戸市看護大学 教授 岩本 里織氏
神戸市看護大学 講師 山下 正氏
神戸市看護大学 特任講師 磯濱 亜矢子氏

参加者数：26 名

(2) 地域住民の健康課題に対する支援

地域住民を対象に実施した新型コロナウイルス感染症流行下における高齢者の健康に関する調査について、結果の再分析及び周知のための取組を行っている。

4. 2022 年度の活動の振り返り

昨年度から実施している神戸市新任期保健師への支援については、大学の活動が評価され、今年度からは「神戸市新任期保健師人材育成支援事業」として、神戸市からの委託事業の位置づけで行うことになった。また、新任期から中堅期保健師を対象として企画・実施した研修について、来年度も支援の依頼を受けるなど、大学の立場で行政機関の人材育成を支援し、協働して地域の人材育成に取り組んできた成果が評価され、地域貢献としての役割を果たすことにつながっている。

今後も引き続き、様々な側面から地域保健活動を支援することで、専門職並びに地域住民の皆様の健康支援につなげていきたいと考える。

Ⅶ 臨床看護連携グループ

急性期看護学分野 江川 幸二

小児看護学分野 二宮 啓子

1. グループ概要

本グループは、①看護職者が主体的に自分のキャリア開発を考え行動できるように、看護師の生涯教育支援と神戸市内の看護師の臨床看護実践能力の強化、②地域に看護人材を供給するために、看護師の就業継続支援や復職支援、③大学教員の臨床能力と神戸市民病院機構の看護職員の教育能力の向上を目指した神戸市民病院機構との相互連携システムの構築を目的に活動を行っている。

2. グループメンバー

リーダー 江川幸二、二宮啓子

メンバー 澁谷幸、鈴木和代、高山良子、山本陽子、新澤由佳、岩井詠美、原口梨那
堤恵美、林裕美

3. 2022 年度の活動内容及び結果

(1) 看護専門職講座

がん看護専門職講座として、「緩和ケアに携わるスタッフの癒やし（講師：沼野尚美氏）」を 10 月 8 日（土）に開催し、143 名（対面 29 名、オンライン 114 名）が参加した。当日、WEB 参加者に音声問題が発生し対応が十分にできず、満足度は 68%にとどまったが、現地参加者からは、「豊富な経験に基づく実践に感動しました」や「患者さんへの関わり方について大切なことを教えていただいた」等と好評であった。

また、看護専門職講座として、「ベッドサイドの倫理的課題－ケアの倫理再考－（講師：吉田みつ子氏）」を 11 月 12 日（土）に Web 開催し、51 名が参加した。満足度は 94.5%、自分の仕事に役立ったところがあったのは 97.2%で、「音声も聞きやすく、先生のお話が非常にわかりやすく、日頃からモヤモヤしていた倫理についての突破口になりそうです」、「すぐに実践可能な示唆が得られた」、「グループディスカッションが楽しかった」等、好評であった。

（２）４年生の卒業前技術演習

就職後の看護実践力を高め、仕事への適応を促進するために卒業前技術演習を希望する４年生 20 人に、12 月 21 日に入職後すぐにひとりで実践しなければならない場面を想定したシミュレーション演習、採血や点滴作成・管理演習を実施した。参加者のアンケート結果では、全員が満足し、就職後の不安や心配の軽減に役に立ったと回答した。

（３）兵庫県看護協会と連携した新人看護師育成に関する支援

2021 年度に兵庫県看護協会を介して支援依頼のあった西宮市立中央病院の新人看護師教育支援を 2022 年度も継続して実施した。まず指導する立場の先輩看護師達が教える側としての思いを吐き出せる機会を作ってはどうかと助言を行い、研修としてどのように開催すれば良いかという具体的な方法を合わせて相談にのったことで、現場の限られた時間や人材の中でも「やってみることができそうだ」という反応が得られた。

（４）就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業への支援

文部科学省の令和 3 年度補正予算「DX 等成長分野を中心とした就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業」に採択され、2022 年度地元創成看護を担う看護師リカレント教育プログラムを 22 名の受講生に 10 月 12 日～12 月 21 日に開催した。受講生のアンケート結果では、満足度は対面講義 88%、技術科目 84%、オンライン講義が 77%で、「これまでの自分の看護を振り返る機会となり、看護実践への自信につながった」、「就職・転職意欲の向上につながった」等が書かれていた。また、就職決定が 4 人、就職・転職の相談 5 人であった。詳細は、2022 年度「きりり☆」看護技術を学べる～地元創成看護を担う看護師リカレント教育プログラム～報告書をご覧ください。

（５）神戸市民病院機構と本学の相互連携システム構築の促進

5 月より市民病院機構の看護部長、副部長と本学教授との定期的な会議をオンラインで開催し、卒業生の適応状況や看護職者の大学院進学状況等の情報共有を行うとともに、市民病院機構と大学との人事交流の方法を検討した。また、新型コロナウイルス感染拡大への対応により、看護系教員の臨床研修制度を活用した教員は 1 人であった。

西神戸医療センターの 2023 年度新人教育研修に関する本学への協力依頼があり、準備のために 2023 年 3 月 20 日に「中堅看護師に対する実践現場での教育に関する研修会」の講師を行ったほか、本学実習室（Ⅲ、Ⅳ）の使用について協力することになった。

（６）臨床看護連携グループの HP の作成

いちかんダイバーシティ看護開発センターの HP に臨床看護連携グループの HP を作成し、事業について掲載した。

Ⅷ 災害看護グループ

災害看護・国際看護学分野 神原 咲子

1. グループ概要

災害看護グループは、災害や新たな疾病等の健康危機に備え、災害時における福祉避難所の支援などの本学の役割の検討を含め、災害看護における教育・研究・実践活動を行うグループとして結成された。2022 年度の主な活動は、コロナ禍で本学が行う地域の保健医療への貢献（神戸市の保健センター・軽症者等宿泊療養施設への支援の調整）を行った。また、災害への備えとして、まちの減災ナース指導者養成研修への本学教員の参加と、日本看護系大学協議会の災害支援対策委員会の関西・近畿ブロック：兵庫小ブロックのリーダー校としての取り組みを通じて、本学及び兵庫ブロックの防災・減災に関する現状とニーズを把握し、今後の課題を明らかにした。

2. グループメンバー

リーダー 神原咲子

メンバー 南裕子、池田清子、岩本里織、山岡由実、宇多みどり、畑中あかね、
水川真理子、山下正、後藤由紀子

3. 2022 年度の取り組み内容と結果

（1）有志教員による神戸市保健所・保健センターの支援

神戸市保健所への本学の支援は、2021 年 1 月から開始している。本学の有志看護教員が、保健所・保健センターに出務し、積極的疫学調査の実施、自宅療養者等の電話での健康観察、療養期間終了の電話等を実施している。新型コロナウイルス感染症感染拡大時において、保健所の積極的疫学調査や療養者の健康観察の支援を、看護系教員 15 人が延べ 42 回、大学院生 5 人が延べ 57 回出務した。さらに、神戸市保健所の協力をしている他 3 大学の調整も実施している。これらの結果、学術会議の主催シンポジウムで、「コロナ禍における地元創成看護」について、本学の取り組みとして発信された。

（2）有志教員による新型コロナウイルス感染症軽症者等宿泊療養施設への支援

神戸市の軽症者等宿泊療養施設への神戸市看護大学の支援は、神戸市からの施設の設置に向けた協力依頼を受けて、立ち上げ時から出務している。2022 年度は、教員 2 名が述べ 2 回実践活動を行った。兵庫県看護協会の報告書「コロナ禍の看護職のレポート～明日の

看護につなぐ看護の足跡～」の中で、「神戸市看護大学における教育・実習の取り組み」、「コロナ禍における神戸市看護大学の地域連携」の他、今後の取り組みへの示唆や報告を執筆した。

（３）まちの減災ナース指導者養成研修への参加とフィールドワーク調査

昨年の本学における防災・減災に関する現状調査の結果を受けて、2022年度は学生及び教職員が個々の防災・減災意識の向上（自助）に向けた啓発活動を行った。活動内容は、「災害が起きたら、どうする！」をテーマに、本学および周辺地域で災害が起こった場合の防災・減災に向けた対応をビデオ作製し、オンラインで学生及び教職員への配信を、7月1日より開始した。まず、まちの減災ナースの役割を紹介し、地域特性とハザードマップの検索方法、災害発生への対応、最後に災害への備えについて、過去の災害体験をもとに情報提供を行った。学生と教職員では役割が異なることから、教職員には防災組織計画の一員であることや備蓄等の内容を、学生には教室からの避難経路や個々で準備する備蓄に関する内容をそれぞれ教職員編・学生編として配信した。ビデオ配信は、1.17と3.11の際にもポスターを通じて広報を強化し、防災を推進した。

結果、44名の学生・教職員が視聴していた。教職員への視聴後アンケート（回答者22名）では、8割以上が「大学周辺地域での災害のリスク」と「大学における防災や減災対策の現状」を理解しており、防災意識が高まったことが示唆された。

今後も、引き続き防災・減災意識の向上に向けた活動を継続していく。

（４）JANPU の活動

日本看護系大学協議会の災害支援対策委員会より、災害時においても教育を維持するために平時より大学間のネットワークの構築が重要であるとのことから、全国の加盟校を対象に、6つの広域ブロック（北海道東北、関東、中部、関西・近畿、中国・四国、九州・沖縄）に区切る考え方が公表された（2021年2月6日）。その後、各校の代表者（本学代表・池田清子教授）が集まり関西・近畿広域ブロックをさらに小ブロックに分けるための協議がなされた。救援を考慮した交通アクセス等の観点から、関西・近畿ブロック（47校）は、「大阪・和歌山」「三重」「京都・滋賀」「兵庫」の4つの小ブロックに編成することになった（3月8日）。その後、兵庫小ブロック（14校）は6月に会議を開催し、2021年度のリーダー校（神戸市看護大学）と副リーダー校（兵庫医療大学）を決め、任期は1年とされている。

今年度の連携については、兵庫小ブロック会議を7月5日に開催し、2022年度のリーダー校は園田女子大学、副リーダー校は関西福祉大学に決定した。今後も他大学とのネットワークを構築するため、3ヵ月に1回程度（9月9日と12月5日）に開催した。9月23日には台風13号、14号、15号による大学の被害状況を把握する情報収集のメールがあり、本学の状況を報告した。2月にフォーラムがあり、オンライン参加した。看護系大学防災マニュアル指針改定があり、今後は防災防火マニュアルとJANPU指針を統合し、独自の防災マニュアルと訓練を実施する予定である。

（５）科研費を用いた調査

山下講師が代表者となる科学研究費を用いて在住ベトナム人へのオンライン調査（2021年9-10月及び2022年5-6月）を実施した結果、約半数が健康に関する相談相手がいないこと、約3割が他者から孤立していると感じていることが明らかとなった。また、神戸市在住の外国人向けに健康支援のためのアプリケーションの開発を行った。それらの成果は毎日新聞、NHK神戸、NHK総合、FMわいわい、ベトナムでの記事等で報道された。

南学長が代表を務める「COVID-19 感染拡大への世界の看護界の対応」については、台湾から専門家を招聘し、議論した。ネパールへ渡航し現地調査を行った。

（６）その他

大学が組織として、世界災害看護学会に入会することにした。

神戸市総合市民センターとの協働の可能性を議論している。災害時の避難所運営について、神戸市危機管理課と協議を始めた。

神戸市危機管理課と意見交換を始めたが、COVID-19の影響で遅延している。協議は具体的な役割に関する内容となる予定であり、実装はこれからの課題である。

IX ウクライナ支援プロジェクトチーム

災害看護・国際看護学分野 神原 咲子

1. チーム概要

去る 2022 年 2 月 24 日にロシア軍がウクライナに侵攻したことにより、多くのウクライナ人が日本に避難してこられた。現地での情勢悪化により、一時的に日本に避難している方が多く、兵庫県でも 2022 年 4 月から 100 名を超える方が避難し、2022 年度末現在神戸市だけでも 60 名以上の方が避難されている。本チームは国際交流グループ、災害支援グループの有志を中心に、避難してきた方々の健康支援を行うことを目的に、2022 年 5 月に立ち上がった。まず初めに、神戸市国際コミュニティセンター（以下、「KICC」）のスタッフ、ウクライナ情勢や文化について詳しい専門家や CODE、KFC などの NGO の人々と意見交換を行った上で、異文化交流イベントを行った。近隣に住むウクライナからの避難者である留学生、本学や神戸市外国語大学（以下、「外大」）の学生らが参加し、このイベントをきっかけに SNS などを通じた新たな異文化理解コミュニティが生まれた。

2. チームメンバー

リーダー 神原咲子

メンバー 南裕子、藤代節、船越明子、山岡由実、水川真理子

3. 活動内容

（1）ウクライナの文化を理解するための研修・意見交換会

まず、6 月 8 日に、神戸学院大学の岡部芳彦教授を学内に招いて、ウクライナ侵攻に際し、国の歴史や文化を理解するためのセミナーを開催し理解を深めた。
次に、6 月 21 日（火）には、関西医療看護大学助教花村カテリーナ先生を大学に招いて、ウクライナの現状と避難者の健康ニーズについて、意見交換を行った。
さらに、7 月 1 日には、KICC 主催で避難者の健康に関する勉強会が開催され、本学の山岡由実准教授が災害時のメンタルヘルスに関する講義を行い、意見交換を行った。

（2）異文化交流・健康支援イベントの開催

ウクライナから神戸に避難してきた方々が安心して暮らせるよう、『異文化交流と健康を考えるつどい』を企画し、2022 年度は 2 回 4 イベントを開催した。

＜異文化交流と健康を考えるつどい 「第1回 季節の変わり目に備える ～日本の秋を楽しみ冬に備える～」＞

開催日時：2022年9月24日（土）13:30-16:30

本学の学部生と外大の学生計12名がボランティアとして参加し、避難者4名に、健康チェックを行って・看護系教員が健康・くらしの相談に応じた。本学茶道部の学生が手ほどきする茶道体験などを通して文化交流を深めることもできた。

＜異文化交流と健康を考えるつどい 「第2回 季節の変わり目に備える ～紅葉の秋から清澄の冬へ～」＞

開催日時：2022年11月23日（水）13:30-16:30

避難者や地域の支援者が11名、学生ボランティアは14名（本学学部：7名、本学編入・院生2名、外大：5名）、本学サークルのコーラルレインから学生11名、茶道部より学生3名に加え茶道の先生2名の他、本学教職員や保育士、通訳と総勢57名が参加した。

文化交流では、茶道部によるお点前体験の企画があり、本学の合唱サークル「コーラルレイン」によるミニ・コンサートの後は、ウクライナの皆さんにクリスマスソングを披露いただいた。さらに、体育館では、バスケットボール、バレーボール、バトミントンと本学の学生と教員、外大の学生と一緒に身体を動かし汗を流して交流を深めることができた。血圧や体組成測定後に、健康やくらしについての相談、幼児には保育士によるふれあい遊びも行うことができた。避難者からは、「本当に楽しかった。またこのような機会があれば、是非呼んで欲しい」と好評をいただいた。学生にとってもコロナ禍で留学が叶わない時期に、国際交流の機会となっており、参加学生からも貴重な機会であったという声が寄せられた。



（3）学園都市大学共同利用施設 UNITY でのイベントの開催

さらに、2023年2月24日～3月31日には、UNITYに於いて、ウクライナチャリティプロジェクト「発行されなかった卒業証書展」開催に協力し、期間中に複数のミニセミナーを提供した。展示会はウクライナのキーウ・モヒーラー・アカデミー国立大学の学生ボンダレンコ・マリヤさんとペトレンコ・マクシムさんらの有志が発案し、本学、外大の教

職員有志が支援することで、開催が叶った。新聞やテレビなどのメディアで多く取り上げられ 300 人の来場があった。期間中、学生生活の被害を共有し平和を願うイベントととして下記のセミナーを開催した。

3月1日「世界平和と災害看護」（神原咲子教授）

3月4日「ウクライナからの避難と神戸の暮らし」（ボンダレンコ・マリヤ）

3月6日「世界・神戸の暮らしと災害看護」（神原咲子教授）

3月23日、30日「ウクライナってどんな国？ーウクライナ語・文化セミナー」
（ボンダレンコ・マリヤ、ペトレンコ・マクシム、他）

本学学生、外大生、近隣の学生や住民ら 56 人がこれらセミナーやワークショップに参加し、ウクライナでの人々の避難の状況から、日本の日常生活の些細な困りごとまで、災害看護や国際看護に通じるグローバルな課題を共有することができた。

X ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる

医療人材育成事業（DX）プロジェクトチーム

基礎看護学分野 澁谷 幸

1. チーム概要

文部科学省の令和3年度大学改革推進等補助金（ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業）に採択され、交付された助成金により、北館看護学実習室IVに空間構築ユニット（スマートインフィル）が設置された。これは、プロジェクターやカメラを配備した専用壁面により、模擬空間を教室内に構築し、病室や手術室、ICU等を再現することができる教育機材である。

本事業では、各看護学分野から1名の教員が参加してチームを構成し事業の推進を図った。具体的には、チームメンバーが、空間構築ユニットを活用した授業実践例を他大学で研修したり、学内全教員に呼び掛け、シミュレーション教育研修会を開催した。また、チームメンバーが主導して、各看護学分野における授業や代替実習でシミュレーション教育を行った。

2. チームメンバー

リーダー 澁谷 幸

メンバー 片倉直子、池田清子、船越明子、石橋信江、池田智子、山下正、山本陽子、
稲垣聡、佐藤智夫

3. 実績報告

（1）シミュレーション教育研修会（図1）

2022年8月8日・9日の2日間にわたり、愛知医科大学医学部シミュレーションセンター講師、船木淳氏を講師として、本学実習室IVにて「スマートインフィルを使ったシミュレーション教育の授業設計研修会」を開催した。

合計で37名の教員が参加し、スマートインフィルの使用方法やその授業例をもとにした意見交換を行った。



図1 シミュレーション教育の授業設計研修会

(2) 看護学専門分野プレ実習演習 (図 2)

1) 老年療養生活支援論 (2022 年 7 月 1 日・8 日・15 日)

スマートインフィルを使って、新型コロナウイルス重症病棟を再現した。場面は、患者が搬送されてきて、看護師があわただしく処置をしているところで、動画とモニター音で臨場感を出した。学生 1 名が入院患者になり、酸素マスク、点滴チューブが装着された状態でベッドに臥床する体験を行った。この演習の意図は、加齢に伴う視力・聴力の低下や自分の周囲で何が起きているのかが理解しにくい状態にある高齢者が、コロナ重症病棟という異質な環境下での体験をすることで、高齢者の不安な気持ちや恐怖等の精神的な変化を理解することである。

3 年生 16 名が受講した。演習後のアンケートの回答率は 81.3% (13 名が回答) で、「本設備を使用することで現場にいるようなイメージで学ぶことができた」とする学生が 100%、「本設備が授業内容を理解するのに役立った」とした学生は 92.3% で、効果的な学びができていたが、「本設備を使用することで、看護職の活動の場に対する理解が深まった」と回答した学生は 76.9% であった。

スマートインフィルにより映像と音声でリアルな現場を再現したことで、学生は高齢者の加齢に伴う身体的な変化だけでなく、不安な気持ちや精神的な変化も理解することができていた。学生の授業後の感想では、「普段実習などでも体験できることはほとんどないと思うので、学校で学べるのはありがたい」「音も空間も本当にその場にいるようで、とてもリアルで怖かった」との声もあり、スマートインフィルを活用した授業により、学生の理解が深まったと考えられた。



図 2 老年療養生活支援論で学習する学生

右壁面にはコロナ重症病棟の様子、左壁面には実施中の学生の様子を上から撮影し映写されている。

2) 慢性病看護学実習前演習 (2022 年 9 月 28 日)

慢性病看護学実習の直前学習として、3 年生 6 名が、起立性低血圧を起こした患者への対応を学習した。事例設定は以下の通りである。「患者は高齢者で、術後 2 日目。学生は、前日に、看護師の見守りの元で、患者の術後第 1 歩行を援助している。本日、学生が訪室すると患者がトイレに行きたいと訴えた。移動は、看護師の見守りの元で行うことになっているが、患者は昨日の第 1 歩行の時に学生も付き添っていたため、学生の付き添いだけでよいと思い、ベッドから起き上がり立位になった。その際に、立ち眩みを起こした。」

学生は事前学習として、事例の提示を受け、これをもとに、この患者の移動介助で、どのようなことが起こるか、その際の観察点や具体的な援助を考えていた。

演習では、スマートインフィルを使って病室を再現し、教員が患者役になり、学生 1 名が看

護学生として患者にかかわった。実施後、参加学生全員で実施場面の録画映像を見ながらディブリーフィングを行い、気づいたこと、疑問点、改善点などを話し合った。このロールプレイは 3 回実施した。

病室風景を再現しながらの演習で、学生は緊張感を持ちながら演習し、転倒転落といった不足の事態に対応する力を向上させることができた。

3) 女性のライフコース支援論 (2023 年 1 月 12 日・16 日・26 日)

妊娠期の健康診査の演習で、観察技術のタスク練習と妊婦への関わり方を学ぶ目的で、病室を再現しながら妊婦健康診査とノンストレステストの実践を行った。実施内容は、レオポルド触診、胎児心拍測定、子宮底長計測、NST 装着、妊婦健康診査、妊娠 34 週の妊婦の観察である。

2 年生 93 名が受講した。妊婦健康診査の観察技術のタスク練習は、腹部触診による胎位胎向の確認をどのように行っているかを、スマートインフィルに付設されたカメラで壁面に学生の手技を投影し確認した。この学習方法によって、学生各自のタスク練習が円滑に行えた。また、スマートインフィルを使って、妊婦がノンストレステストを受けている病室場面を再現し、学生は妊婦への関わり方を体験した。スマートインフィルの音声機能を活用して胎児心音を流して演習したことで、学生からは「自然と赤ちゃんに関する会話になった」「お腹をやさしく触ろうと思った」などの感想があり、周産期の特徴を踏まえたコミュニケーション、関わり方のイメージ向上が図れたと思われる。学生の 72% は授業内容を理解するのに役立ったとの評価が得られた。

(3) 感染拡大下における代替臨地実習

1) 基礎看護学実習 (2022 年 9 月 5 日～10 月 7 日) (図 3)

COVID-19 感染症患者の増加により実習病院への学生の立ち入り制限が発生したことで、本来 2 週間の臨地での実習が 1 週間となった。そのため、残り 1 週間は学内においてスマートインフィルを活用した代替実習を行った。対象学生は 1 週につき 22～23 名で、合計 4 週間、93 名であった。

学内実習では、スマートインフィルを使って、病室空間と背景音を再現した。受け持ち患者として、前年度に「看護過程」の授業で学習した事例(腰椎圧迫骨折で入院した 75 歳の女性)を設定し教員が患者役を担った。5 日間の実習では、学生が基礎看護学実習で遭遇するシーンを以下のセッション 1～5 として設定した。

セッション 1 : 患者さんとの初めての出会い場面。

セッション 2 : バイタルサイン測定の場合。

セッション 3 : 環境整備を行う場合。

セッション 4 : 患者に必要な援助を提案し実施する場合。

セッション 5 : 環境整備を行いつつ援助を提案し実施する場合。

各セッションでは、1 名の学生が代表で看護学生として患者にかかわり、その様子を 2 台のカメラとマイクを用いて撮影して、他学生が見ることができるよう投影し、かつ録画した。終了後、録画映像を見ながら、全員でディブリーフィングした。また、学生は、

セッションでの患者との関わりから、患者の情報を得て、それをグループで共有して全体像を洗練化し、看護上の問題を導いた。その中で浮上した援助の必要性、援助の方向性を全員で共有し、それに基づく援助の提案をセッション 4 および 5 で実施した。

このような一連の学習活動により、学生は看護実践がどのように展開されるのかを学内で学ぶことができた。実習後のアンケートでは、約 8 割の学生が「現場にいるようなイメージで学ぶことができた(「とても当てはまる」「当てはまる」と回答)」と回答し、自由記載では、「臨場感があり、まるで病室で実習をしている感覚になりとても学習になった。」

「周りの物音が聞こえて、それが病院にいるような感じがして良かった」のように、病院風景の投影と臨床現場の雑音を再現することで、実際の現場でケアをするような感覚を得ながら、学習することができたと思われた。

また、援助を実施している場面を別アングルで映写し壁面に投影したことで、援助を実施していない場合でも、「座っている目線からだけでは見えない様子をカメラで映すことで確認できたことで、より実践している目線で観察できた。」「色々な角度から見ることで 1 面から見るよりも気づくことが増え、患者さんに対する理解や関心がより深めることが出来た。」というように、スマートインフィルを活用したことの効果・感想が述べられていた。録画映像を振り返りに活用した点は、約 9 割の学生が「設備を使用することで、授業内容をより理解することができた(「とても当てはまる」「当てはまる」)」と回答した。転倒の危険予知と対応が不十分であった場面の録画による振り返りでは、学生は「全員が同じ場面を見て体験できるため、一つの場面について詳しく議論することが出来た。皆で同じ場面を共有できること。気づきをみんなで話し合う時に良いと思った。」と述べており、撮影した場面(録画)を切り取り、即時ディブリーフィングで用いることで、学生の理解を促すことができた。

感染症の拡大により臨地での活動時間は制限されたが、スマートインフィルを用いた学習により臨地実習に近い学習ができたと思われる。



図 3 基礎看護学代替実習の様子

2) 慢性病看護学実習 (2022 年 11 月 21 日)

COVID-19 感染症患者の増加により臨地実習ができなくなった 3 年生 6 名の学生に対する代替実習として実施した。

事例は、COPD の患者で、学生には事前課題として、事例患者の移動において①どのようなことが起こる可能性があるか考え、その際の②観察点、③具体的な援助についての 3 点を考えてきてもらい、演習日に共有した。

スマートインフィルには、4 床病室を再現し、病棟の映像や音声を流し臨場感を作り出した。歩行器や酸素チューブなども準備した。学習場面として、学生が患者に付き添い、トイレ移動しようとしたときに、患者が、自分で酸素チューブを外して移動しようとした

場面を設定した。この学習活動では、患者への安全・安楽な援助を代表学生が実施し、受講生全員でスクリーンに映し出した録画映像を見ながら振り返り、評価して、次回への課題を検討した。

今回の代替実習では、病室風景を映し、事例に応じた状況を設定したことで、学生は臨場感を感じることができ、危険察知能力の向上や状況に適した行動を考え実践する力の向上を図ることができた。

(4) 卒業生を対象とした卒業前技術演習

1) 卒業前看護技術研修会 (2022 年 12 月 21 日) (図 4)

2023 年 3 月に卒業を控えた 4 年生に対して、看護技術実践力の強化と、新人看護師として臨床に出るにあたっての緊張感の緩和を目的として卒業前看護技術研修会を開催した。

研修会では、学生が卒業後、新人看護師としてすぐに自立して実施しなければならない可能性の高い看護技術として、自立度の高い患者の清拭を実施した。スマートインフィルで 4 床室の病室を再現し、模擬患者は基礎看護学分野の教員が担った。代表学生 1 名が、ベッドサイドで端座位になった状態の患者への清拭を実施し、他学生はその様子を観察した。また、代表学生の実践の録画映像を見ながら、全員で振り返りを行った。

受講は希望者のみと、4 年生 16 名が受講した。受講生への実施後アンケートでは、「設備を使用することで、現場にいるようなイメージで学ぶことができたか。」という問いに 67%の学生が「当てはまる」と回答した。一方、33%の学生が「あまり当てはまらない」と回答し、その理由として、「患者と関わっている学生には、壁に背景が投影されているものが視界に入らないので、『病室にいる感覚になった』と言う感覚はあまりなかった。」という記載があり、背景画像の活用方法の検討の必要性が示された。「設備を使用することで、授業内容をより理解することができたか」の問いには、92%が当てはまると回答した。その理由として、「振り返りを動画と音声で見ることができて、その時に気がつかなかったことも繰り返し見ることで学習が深まった。」と振り返りの機能の利点を述べた。さらに、本事業が、感染拡大下における学習補助として機能したかどうかに関しては、「就職後に対する心配や不安の軽減に役立ったか」という問いには、「非常に役立った」は 41.7%、「まあまあ役立った」は 58.3%であった。

自由記載には、「領域実習はオンライン実習が多く、曖昧なまま卒業してしまう自分が悔しかったので、最後に学ぶことができて嬉しかったです」と、実習でできなかった援助項目を振り返り、実施できたことが学生の満足感につながったと推察された。また、「実習で（も同じような）自立度の高い患者さんに対するケアを行いました、至らない点が多かったことに気づけました。臨床でよく行われているケアが最適ではないこともあるということを実感でき、現場で行われているケアに満足してはいけないことが分かり、とても満足しました。」と、汎用的な事例を用いたシミュレーションを行ったことで、実習での自分自身のケアの振り返りにつながったことが示された。さらに、「自分ができていなかった部分がわかり、これからはもっと練習しないといけないなという気持ちになったので、いい経験になった。」というように、卒業に向けての課題が得られた学生もいた。

以上のように、本研修会は、参加学生にとって、実習体験の補足、臨床に出て看護師と

して実践する不安の緩和に貢献できたとともに、卒業前に自身の看護技術に関する課題に気づく契機になったと考えられる。



図 4 卒業前看護技術演習の様子

2) 精神看護学分野卒業前演習（2022 年 12 月 22 日）

精神看護学実習は、卒業生のうち、一部の学生が 3 年次における臨地での実習を感染状況の悪化のために体験できていない状態であった。そのため、その体験を補足する目的で、精神看護学分野で研究演習を受講する学生を対象に、バーチャルハルシネーション体験を実施した。

方法として、スマートインフィルにバーチャルハルシネーションの動画を映写し、学生は統合失調症の主症状である幻聴を疑似的に体験した。体験後に、自分に生じた感情の共有と幻聴のある患者への対応について、講義や実習で学んだことを想起しながら振り返った。

体験したのは、4 年生 8 名で、受講後のアンケートにおける「本設備を使用することで、精神疾患患者の病的体験への理解が深まったか。」「本設備を使用することで、幻聴のある患者への看護について考えることができたか。」の質問項目では、全受講生が「とても当てはまる」または「当てはまる」と回答をした。自由記載では、「実際に実習で幻聴のある患者さんを受け持ったとき、どんな音が聞こえているのか分からなかったけれど、こんな体験をしていると知って怖いと思った。」との記述があった。その他、「（視界の）中心に角（支柱）があるため、一人称視点で移動されるとすこし酔うと感じた。」「普通にビデオを見ている感覚で、臨場感が増したわけではなかった。」という意見も見られた。これは、動画サイズがスマートインフィルにあわないための視覚的効果の制限と思われ今後の課題である。

4. まとめ

以上のように、ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材育成事業（DX）チームでは、補助金で導入されたスマートインフィルという学習機材を既存の教育活動に組み込むことで、学生の学習効果向上を目指した。今回のどの活動においても、受講後の学生アンケートからは学習効果を認める結果が示されたことから、本事業が本学学生の学習に貢献できたものと思われる。

本事業は、学部教育以外にも、大学院教育や近隣の訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の研修にも活用されており、今後さらに発展が期待できる。

XI リカレント教育運営プロジェクトチーム

慢性病看護学分野 池田 清子

1. チーム概要

看護師のリカレント教育事業は、臨床看護連携 グループに位置づけられている。
本事業は、地元創成看護を担う看護師リカレント教育プログラム「きらり、看護技術を学べる」を文部科学省の令和 3 年度「DX 等成長分野を中心とした就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業」に応募し、採択されたものである。

本事業の実施及び評価は、本学の教職員と連携先の神戸市民病院機構の看護職及び兵庫県看護協会の常任理事からなるプロジェクトチームが担当した。

2. チームメンバー

リーダー 池田清子

メンバー 小山富美子、柴田しおり、高山良子、畑中あかね、石橋信江、
丸尾智実、江川幸二、二宮啓子、澁谷幸、藤原のり子、大路貴子、
永石かずみ、大迫しのぶ、堤恵美、林裕美

3. 事業概要と成果

本教育プログラムは、神戸市看護大学、神戸市民病院機構、兵庫県看護協会、専門的技術の民間協会等の協力を得ながら、受講生の方々がそれぞれのニーズに沿って、最新の看護技術や知識を学べるよう、講義・演習、インターンシップを組み込んだプログラムで、期間は 2022 年 10 月から 12 月の約 3 か月であった。社会人が学びやすいよう講義中心の科目では、オンライン授業を積極的に取り入れ、技術演習やインターンシップは対面授業とした。学習内容は、「地域包括ケア」「看護とケア」「医療安全」「看護技術」「キャリア開発」を柱とし、受講生が学びたい科目を選択できるよう、必修科目と選択科目を設けた。プログラムの総時間は 60 時間である。

成果として、受講生は 22 名、プログラム完遂率（80%以上出席）は 16 名（72%）であった。修了式に実施した受講生対象のアンケートによると、各科目の満足度は、講義・演習科目は、「とても満足」「満足」あわせて 91%、技術科目は 96%であった。自由記載のコメントからは、インターンシップに満足した、就職意欲が向上した、就職（転職）への不安が減少した、看護への意欲が増したなど、受講生の看護や就業への意識に変化があったことが伺えた。インターンシップは 1 人 1 か所（6 時間×2 日）で、インターンシップ先は

一般施設、訪問看護ステーション、介護福祉施設の3つの領域を準備し、その中から受講生の希望を伺い配置した。

就職・転職に関しては、ハローワークおよび看護協会ナースバンクへの相談は5件、大学担当者への就職相談利用回数は2件であった。プログラムを機に就職につながったのは4名（18%）であった。

連携先の施設を対象にしたアンケートでは、「対象者がリカレント教育に求めているもの（ニーズ）がわからなかった。」「講義の資料作成の途中で全体像をいただいたので、最初にあると受講生の方の状況を理解して作成するのが円滑です。」「手探りで実施した研修の成果を確認したいです。」等の意見を頂いた。事業開始前の連携先との丁寧な情報共有と終了後の報告が今後の課題である。

その他、プログラム開始前には予想していなかった成果として、受講生のコミュニティが生まれたことがある。受講生は、一人ひとりキャリアもプログラムへの参加動機も異なっていたが、学びを通して、お互いを理解し、さらに高め合う関係を築いていた。

プログラム修了後に受講生が「目まぐるしく責任の重い看護の現場だからこそ、そこから離れて学びの場から現場を見直してみる機会を持つことがあれば、より良い〈看護〉と自分との関わり方を考えながら、看護を一生の仕事として続けていける」とコメントしていたように、実践と学びを繰り返すことにより、自身のキャリアを生涯発達させることができることを実感した。

今後は、2022年度のプログラムを洗練させたプログラムを作成し、より多くの看護職の皆様へ学び直しの機会を提供するとともに、リカレント教育における大学の役割についても考え続ける必要がある。

なお、本事業の途中経過は、本助成金に採択された4大学（関西学院大学、神戸大学、園田学園女子大学、神戸市看護大学）が話題提供する大学コンソーシアムひょうご神戸「リカレントフォーラム2022」（2022年11月30日オンライン開催）で発表し、参加者より「単なる看護師育成でない、具体的な課題感をベースにした内容で、特に他プログラムとのコラボレーションというのはぜひ検討していただけるといいなと思いました。」「地域密着型大学として親近感が持てる。」「現場の苦労をよく理解出来ました。」等のコメントを頂いた。



業績一覧

教員研究業績一覧(2022 年度)

論文

- (1) 高田大樹, 牛尾裕子, 稲垣真梨奈, 宮本純子, 水川真理子, 藤田さやか, 増野園恵 (2022): COVID-19 感染者が救われたと感じた言葉掛けやサポート 一軽症者療養施設入所中の療養者への調査から. 地域保健 53(6), 56-59.
- (2) 水川真理子 (2022): 患者指導、医師のこの一言が患者を変える 疾患別指導 心不全. 診断と治療 110(8), 1001-1005.

学会発表

- (1) 水川真理子(2022): 慢性心不全患者における遠隔モニタリングシステムを用いた疾病管理第 19 回日本循環器看護学会学術集会 (シンポジウム 3 在宅医療を支える遠隔チーム医療), 大阪 オンラインハイブリット開催
- (2) 水川真理子(2022): 再入院予防をエンドポイントとしたテレナーシングの RCT - 心不全患者を対象として. 第 42 回日本看護科学学会学術集会 (教育シンポジウム 2), 広島 オンラインハイブリット開催
- (3) 加古まゆみ, 森山美知子, 水川真理子(2022): プライマリケアナーシングの看護学基礎教育課程における位置づけ—豪州における質問調査結果より. 第 13 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 横浜 オンラインハイブリット開催
- (4) 岩本里織, 山下正, 水川真理子, 遠藤真澄, 山田暢子, 磯濱亜矢子(2022): COVID-19 流行禍の地域包括支援センターの活動の実態. 第 81 回日本公衆衛生学会総会, 山梨 オンラインハイブリット開催
- (5) 水川真理子, 中麻規子, 森山美知子(2022): 慢性心不全患者への遠隔モニタリングシステムを用いた疾病管理プログラムの満足度調査. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島 オンラインハイブリット開催
- (6) 宮本純子, 藤田さやか, 牛尾裕子, 水川真理子, 高田大樹(2022): COVID-19 軽症者宿泊療養施設療養者の退所後支援ニーズ. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島 オンラインハイブリット開催
- (7) 秋定真有, 坪井桂子, 石橋信江, 水川真理子, 西村康子(2022): コロナ禍に開始した「もの忘れや認知症とともによりよく生きる」ためのオンライン活用による支援のあり方. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島 オンラインハイブリット開催
- (8) 岩本里織, 水川真理子, 南裕子(2022): 看護大学教員の COVID-19 関連業務への支援の実態-A 大学の調査結果から. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島 オンラインハイブリット開催

その他

- (1) 神戸市看護大学、地域連携活動で健康相談や子育て支援－キャンパス探訪－.日本経済新聞, 2022 年 6 月 1 日夕刊. 日本経済新聞電子版.
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF203JZ0Q2A520C2000000/>
- (2) 神戸市看護大学子どものための食育セミナー. ビバ! ニュータウン 2022 年 11 月 23 日号 vol800 (4) NPO 法人 ビバ・ニュータウン発行
<https://www.vivanewtown.com/wp-content/uploads/2022/12/20221202130738.pdf>
- (3) 池田清子、堤恵美 (2022) : 大学コンソーシアムひょうご神戸リカレントフォーラム 2022,オンラインフォーラム,11 月 30 日



センターの組織

2022 年度いちかんダイバーシティ看護開発センター組織

センター長 南 裕子
副センター長 岩本 里織、片倉 直子

地域連携グループ

	氏 名	所 属
リーダー	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	勝田 玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ＜オンライン健康相談班＞

	氏 名	所 属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	坪井 桂子	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	井上 理絵	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	小山 富美子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	関口 瑛里	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	宮島 朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	勝田 玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ＜慢性疾患重症化予防オンラインナーシング班＞

	氏 名	所 属
リーダー	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	谷 知子	専門基礎科学領域 医科学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	宮島 朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	勝田 玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

在宅ケア支援グループ

	氏 名	所 属
リーダー	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	船越 明子	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	小山 富美子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	宇多 みどり	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	大瓦 直子	健康生活看護学領域 在宅看護学分野
	勝田 玲子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

国際交流グループ

	氏 名	所 属
リーダー	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	高木 廣文	神戸市看護大学 特任教員
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	山内 理恵	人間科学領域 言語科学分野
	クロスビ アダム	人間科学領域 言語科学分野
	佐藤 隆平	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	樋口 佳耶	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

保健師キャリア支援センターグループ

	氏 名	所 属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野

地域保健支援グループ

	氏 名	所 属
リーダー	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野

臨床看護連携グループ

	氏 名	所 属
リーダー	江川 幸二	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
リーダー	二宮 啓子	療養生活看護学領域 小児看護学分野
	澁谷 幸	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	鈴木 和代	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	高山 良子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	岩井 詠美	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	新澤 由佳	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	原口 梨那	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	山本 陽子	療養生活看護学領域 小児看護学分野

災害看護グループ

	氏 名	所 属
リーダー	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	南 裕子	いちかんダイバーシティ看護開発センター長
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	宇多 みどり	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	後藤 由紀子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

神戸・兵庫訪問看護ステーションこころの支援プロジェクトチーム

	氏 名	所 属
リーダー	南 裕子	いちかんダイバーシティ看護開発センター長
	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	近澤 範子	兵庫県立看護大学 名誉教授
	玉木 敦子	神戸女子大学 看護学部教授
	松枝 美智子	青槎大学大学院 教育学研究科教授
	川田 美和	兵庫県立看護大学 看護学部准教授
	丸本 典子	甲南女子大学 看護学部講師
	藤田 愛	北須磨訪問看護リハビリセンター所長

ウクライナ支援プロジェクトチーム

	氏 名	所 属
リーダー	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	南 裕子	いちかんダイバーシティ看護開発センター長
	藤代 節	人間科学領域 人文科学分野
	船越 明子	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材育成事業 (DX) プロジェクトチーム

	氏 名	所 属
リーダー	澁谷 幸	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	船越 明子	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	池田 智子	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	稲垣 聡	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	佐藤 智夫	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	山本 陽子	基盤看護学領域 基礎看護学分野

リカレント教育運営プロジェクトチーム

	氏 名	所 属
リーダー	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	江川 幸二	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	柴田 しおり	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	澁谷 幸	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	二宮 啓子	療養生活看護学領域 小児看護学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	小山 富美子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	高山 良子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	林 裕美	キャリア支援室 教務学生課係長
	堤 恵美	キャリア支援室 教務学生課係長
	藤原 のり子	神戸市立医療センター中央市民病院看護部長
	大路 貴子	神戸市立医療センター西市民病院副看護部長
	永石 かずみ	神戸市立医療センター西神戸医療センター副看護部長
	大迫 しのぶ	兵庫県看護協会 常任理事

神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター

2022 年度実績報告書

発行日	2023 年 7 月 1 日
発行者	公立大学法人 神戸市看護大学 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4 TEL 078-794-8080 FAX 078-794-8086
編 集	神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター
表紙デザイン	手島美華
ISBN	978-4-9909462-4-1

©公立大学法人神戸市看護大学 無断転載を禁じます。

